

〔翻刻〕 神宮文庫蔵「大番職制」

〔表紙〕



惣目録

〔朱書以下同〕

- 〔一〕 一、起請文前書之事
- 〔二〕 一、年中行事并 殿中衣服之事
- 〔三〕 一、惣而休日数覚書之事
- 〔四〕 一、二条大坂御番出立日割書之事
- 〔五〕 一、大坂御加番御合力割合書之事
- 〔六〕 一、二条大坂在役数并在役順之事
- 〔七〕 一、騎射たゐはゐ（帶佩）人在番致永残候詔書之事
- 〔八〕 一、御蔵奉行出役御能拝見本組被附出候例書之事
- 〔九〕 一、組頭諸御礼式之事
- 〔十〕 一、御番衆諸御礼式之事
- 〔十一〕 一、同組限り御礼勤部分ケ之事

附看病断数書之事

姉看病断相立候例書之事

- 〔十二〕 一、組頭并御番衆其御礼勤先格且例書之事
- 〔十三〕 一、先格御番頭江申立置候数ケ条之事
- 〔十四〕 一、代人本組戻り之事
- 〔十五〕 一、組頭在番之節日延之儀ニ付達候事
- 〔十六〕 一、取人代人在番先借用金始末之事
- 〔十七〕 一、在番先御番衆親類江対面数達候事
- 〔十八〕 一、御番衆出立前日延限り之事
- 〔十九〕 一、火事之節組頭心得方之事  
但西丸之式
- 〔廿〕 一、御法事等之節組頭御香奠献上諸式之事
- 〔廿一〕 一、他番之者江相跨変事有之候節心得方達候事
- 〔廿二〕 一、取人代人順書番頭達候事
- 〔廿三〕 一、先組江代人内問合認振等之事
- 〔廿四〕 一、御目見以下江養子差遣不縁ニ付再養子遣候例書之事
- 〔廿五〕 一、在番先ニ而家来手討老条之事
- 〔廿六〕 一、部屋住御番衆父死跡目不濟内在番江罷登候例之事
- 〔廿七〕 一、御番頭組替例書之事
- 〔廿八〕 一、組頭日延中病死月番御取扱例書之事
- 〔廿九〕 一、地借之者江家来喧嘩手負候一件之事
- 〔卅〕 一、二丸当御番認振并諸振合書数ケ条之事
- 〔卅一〕 一、他組方助之義ニ付達書之事
- 〔卅二〕 一、番頭組頭不残差控伺ニ付俄助始末之事

附当番書之事

- 『卅三』 一、番頭被 仰付候節御同役等同道二丸御見習之節之事
- 『卅四』 一、御番衆急病人有之候節始末之事  
但西丸之例も有之
- 『卅五』 一、組頭宅近火致退番候節之御番頭被仰合書之事
- 『卅六』 一、明番之節葛籠持五時迄不罷越候節之事
- 『卅七』 一、御本丸江可參葛籠西丸江參候例之事
- 『卅八』 一、御番衆家来 御城中二而俄病氣始末之事
- 『卅九』 一、御番之節夜二入御番衆被為 召候一件之事
- 『四十』 一、御番所二而御番衆俄病氣夜中退番之事
- 『四一』 一、組頭被 仰付候節書狀案文其外手続之事
- 『四二』 一、供奉出入之節差引心得数ヶ条之事  
附御具足開登 城候心得
- 『四三』 一、御弓場始御延引御替日之節衣服之事
- 『四四』 一、月並講積登 城之事
- 『四五』 一、御能 御前置差引心得曲尺等之事  
附揃書認振之事
- 『四六』 一、大的 上覽之節差引心得方之事
- 『四七』 一、嘉祥御祝儀登 城之事
- 『四八』 一、玄猪御祝義登 城之事
- 『四九』 一、御番入御入人差引登 城之事
- 『五十』 一、御番衆誓詞差引心得之事
- 『五十一』 一、老統騎射 上覽之節差引心得方之事
- 『五十二』 一、両山拜礼心得方之事
- 『五十三』 一、在番御暇御番衆差引心得之事
- 『五四』 一、琉球人来聘之節出人差引之事
- 『五五』 一、武術 上覽之節御番衆差引心得之事
- 『五六』 一、御供弓罷出候者組々達心得之事
- 『五七』 一、御供衆宅近火当御番為致退番候手続之事
- 『五八』 一、二丸当御番書追加之事
- 『五九』 一、御成之節二丸当御番代り合刻限之事
- 『六十』 一、二丸組頭部屋有明断之事
- 『六一』 一、老衰二付泊御番御用捨例書之事
- 『六二』 一、養女差戻御進達濟御礼例書之事
- 『六三』 一、組頭 御目見差扣中 御成有之組頭人数之事
- 『六四』 一、明キ組相成候節出火有之寄場江罷出候心得之事
- 『六五』 一、御能之節組頭本出加番共御台所江下置候事二相成候達之事
- 『六六』 一、惣出仕之節当番二而不罷出候砌追而可罷出候哉之儀御達之事
- 『六七』 一、取人代人日延願罷登候上先下り不相成達之事
- 『六八』 一、代人下り本組戻無之以前病死候者取斗之事
- 『六九』 一、悴御番入願差出候前御番頭逢申込候事
- 『七十』 一、道中方御番衆病氣二付罷下候節右差添之者罷下候上休日数定書之事
- 『七一』 一、本御番之御番頭当御番日朝之内登 城被致候共其日之当御番書江者不認様二御達之事
- 『七二』 一、旅中二而御茶壺行合候節之心得方御達し書付之事
- 『七三』 一、御番頭明キ中御番頭御助之義御達手続之事
- 『七四』 一、出火之節当番非番とも都而大御番方心得并着服之義御目付方問合書且大御番頭御答書之事
- 『七五』 一、木曾路旅行之節跡登者矢張木曾路罷登取手返者東海道罷登可申達之事
- 『七六』 一、御番頭御引渡之節父看病断相達候例書之事
- 『七々』 一、廻り方初而被 仰付候節之事  
附其後追々被 仰出候御書付写廻り之者召捕者致候節屈等諸事心得方
- 『七八』 一、組頭兩人 御目見遠慮之節二丸当御番日 御成可有之義二付伺且助二不及候事  
但其日之当御番書江認入候事
- 『七九』 一、独旅行之御番衆旅中病氣二付罷下候儀心得方御達書之事  
附別紙組頭心得方達之事
- 『八十』 一、二丸御番衆部屋有明ヶ半夜分之事

〔八一〕 一、元日二日御番所代り合刻限之事

〔八二〕 一、組頭為持候挟箱差置所心得伺之事

〔八三〕 一、同断下乘迄供連之事

〔八四〕 一、同断病氣差合二而出番 助合之事

〔八五〕 一、御番頭明ヶ詰番二相成候間是迄詰番出候事伺候久矢張諸事当御番  
日より三日目心得可致段御達有之候事

〔八六〕 一、二丸 御殿 御成之節御番所詰合人数申合候事

〔八七〕 一、水馬水稽古大御番方世話役伺問合候事

〔八八〕 一、忝人登り御番衆旅中於駄宿病氣之節致養生罷登候例書之事

〔八九〕 一、大御番方水馬水稽古世話取扱兩人御番頭被申渡候事

〔九十〕 一、御番頭於泊所組頭江以來夜食不振廻よし申合書達之事

〔九一〕 一、組頭被 仰付候節其月二寄盆暮坊主衆江遣之物半減二(可力)致同役申  
合之事

合之事

〔九二〕 一、友松(徳川家齊男)殿逝去伺 御機嫌当御番平服之事

〔九三〕 一、嘉永六丑年冬(天力)御番方 西丸勤被 仰付候二付非常心得御番頭  
達書之事

達書之事

〔九四〕 一、改元被 仰出候節西丸当御番詰合着服之事

〔九五〕 一、大御番組頭采配所持由来之事

〔九六〕 一、武術 上覽之節差引之儀二付組頭申合八番組方部屋江張出之写之事

〔九七〕 一、馬揃 上覽之節当御番他組助二成当御番書之事

〔九八〕 一、昼夜廻り之者水馬願二付代り之者出候例九番組

〔九九〕 一、在番帰之御札不相濟番頭衆出番無之節者当御番書振合之事

〔百〕 一、御法事之節御菓子被下候式之事

〔一〕 一、甲州流采配仕立様作法之事

〔二〕 一、天正十八年小田原御陣大御番御供之事

〔三〕 一、同断之節組頭采色絵持之事

但杉原伝右衛門勘考諸書之事

〔四〕 一、大御番組采配持候儀御尋之節福嶋伝兵衛方御答書之事

〔五〕 一、武術 上覽之節組頭罷出候敷差引二罷出候節当御番書凡例之事

〔六一〕 一、上野(寛永寺) 御靈屋江拝礼願書之事

〔六七〕 一、御茶壺勤候者代人順建之事

〔六八〕 一、御代替初二而大的 上覽着服之事

〔六九〕 一、安政五年十月廿五日六番組江式番組方御同役御番助之事

〔七十〕 一、組頭被 仰付候砌盆暮遣物月割申合之事

〔百十一〕 一、安政六未 御代替御能拝見之砌諸達書

〔一〕 起請文前書

一、今度大御番組頭被 仰付候、弥重 公儀御為第一奉存、聊以 御後閣  
儀仕間鋪候、勿論 御為惡鋪儀申合仕間敷候、万事精入御奉公油断仕間  
敷事、

一、従跡々被 仰出候御法度之趣堅相守、猶以於 殿中茂不作法之義無之  
様相嗜可申候、并且以後被 仰出候御条目・壁書等、是又違背仕間鋪候事、  
附相役中者不及申、御一門方を始諸大名・諸傍輩二対 御為悪心

ヲ以申合一味仕間敷候事、

一、相番中万事御法度以下、無依怙最眞可申合候事、

一、相番中善悪之儀、親子兄弟知音之好又ハ中悪敷輩たりといふとも、無  
最眞偏頗有体言上可仕候事、

一、相番中方役人出候僉議、番頭相談之時、雖為他番数寄之通、無遠慮依  
怙最眞不仕、似合敷(在)書出可申候事、

附御奉公二候間、常々及心程他番之面々ヲ茂様子存候様、心を附  
可申候事、

一、二条・大坂御番之節、右之通相守可申候事、  
右之条々雖為一事於致違乱者、

罰文

〔式〕 年中行事并衣服附

正月元日・二日年始御礼之事、

一、烏帽子・素袍着用之事、

一、元日当御番・明ヶ御番・御供番、三組二日御礼、残五組元日御礼之事、

一、十二月晦日組切二月番組頭方揃書御番頭江差出、猶又当朝於 御殿中之御番頭部屋江揃書差出候事、

一、昼夜廻り之面々当日遠廻二候得者、御礼登 城無之、近廻り之節者、

四人二而朝昼夕持切、式人者御礼登 城之事、

但毎々当日近廻り之面々、式人二而朝昼夕持切、四人御礼登 城致

候処、寛政三亥年十二月十日拾式番組寄合之節、組々評義之上、前

文之通相極候事、

一、二条・大坂残役登 城無之候事、

一、御書院番方虎之間請取候儀、詰番組与頭老人中ノ口御書院番与頭部屋江罷越し懸合、請取御礼席江罷出候節、御番衆両三人虎之間江残置、御流頂戴二相廻候節、断返致候之事、

但詰番組与頭其組御帳掛り江申達し、虎之間御椽江被相越、詰合之

御書院番江為掛合請取候儀茂有之候、且詰番組御礼二不相当節者、

組順二而掛合候事、

一、本組番頭病気差合等二而登 城無之節、揃書詰番頭江差出申候、退散之節も届申達退出之事、

但御礼無滞相濟候段、番頭宅江月番之組頭方申達候事、

一、元日方七日迄当御番熨斗・麻上下、八日より平服之事、

一、六日寺社御礼出人有之候事、

一、八日・九日春御借米手形案文帳、月番与頭方番頭江差出候事、

但二条在番登り年者、取越米手形案詞帳書替所江問合之上差出候事、

且又二条・大坂とも残役者、本組二而取斗申候、代人登り永残共下

り年者、本組之取斗之事、

一、十日・廿日之内上野(寛永寺)、十七日紅葉山、廿四日・晦日之内増上寺 御参

詣之節、当御番帰方方熨斗目・麻之事、

但十七日御請二付、十六日泊方、十七日帰り方、服穢之者相改候事、

一、十一日御具足御祝儀頂戴、詰番組之与頭兩人熨斗目・麻着登 城之事、

一、十一日御具足御祝儀二付、当御番熨斗目・麻之事、

一、御弓場始大御番方方射手罷出候節者、其組与頭老人差引罷出、両組以上罷出候節者、其組与頭組順二老人罷出候事、

但十一日二候得者、差引組頭茂熨斗目・麻奥等二て、御延引別日二

相成候節者、平服用用之由、及承候儀有之、追而可礼、

一、二条登組休入、在府組方助昼夜廻り出候二付、右請取渡之儀、正月之

月番組寄合之節相極々、廻り退役助出役之面々登り組・在府組申渡候事、

一、四季打鉄炮有之候得者、証文正月十日頃迄二番頭江差出、掛り大目付

衆江断相濟候段、番頭方達有之次第、四季打鉄炮有之面々江其段申達候事、

一、十四日当御番熨斗目・麻着用之事、

但帰り方者書面之通、泊り方ハ平服之事、

一、春大的 上覽大御番方方出候節、上覽被 仰出有之候節、射手性名書番頭江差出候事、

一、十五日当御番熨斗目・麻之事、

但御礼後平服、

一、同日御礼登 城各同服之事、

一、節分二相当り候得者、当御番泊方熨斗目・麻之事、

一、廿八日当御番熨斗目・麻之事、

但御礼後平服、

一、同日御礼右同服之事、

二月

一、朔日当御番熨斗目・麻之事、

但日光 御鏡 御頂戴二付、殿中装束御規式相濟平服、前日泊方・

当日帰方服穢改之事、

一、同日日光 御鏡開キ二付、月並御礼無之事、

一、十日講釈之節、詰番組方与頭兩人服紗小袖・麻着登 城、此後之講釈

之節平服、詰番組与頭兩人ツ、登 城之事、

一、二条在番組休入二付、預人之面々在府組江預ヶ替、正月之月番頭二而

被相極、組々江達有之、休入組二而者御番老日番頭方用捨有之、右預中之為御礼、番頭江平服二而被相越候之様申達候事、

一、在府江者預替之御礼、番頭・組頭江服紗・麻二而被相越、若病氣之面々者、番頭用人迄口上書を以申達、組頭江茂同様被差越候様申達、追々書物請取番頭江差出候事、

但何人二而茂右同断之事、

一、十五日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日二条在番御暇服紗小袖・麻、且悴共 御目見熨斗目・麻着、詰番

組与頭差引之事、

一、同日御礼登 城服紗・麻之事、

一、廿八日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

三月

一、朔日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼無之事、

一、三日当御番泊り方共熨斗目・麻之事、

一、同日御礼熨斗目・長上下之事、

一、公家衆 御対顔御能御返答之節、当御番熨斗目・麻、御能之節者終日

泊方茂同服之事、

一、御馳走御能之節者、御前置出入有之候事、

但熨斗目・麻上下、足袋不用、差引組頭長袴着之事、

一、十日前後之内夏足袋願、月番之与頭二而一紙二相認め番頭江差出候事、

一、十五日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城同服之事、

一、廿八日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼無之候事、

一、大坂在番地願之面々有之、組々と頭方四月頃登組与頭江故障之有無掛

合之上、願書差出候事、

四月

一、朔日当御番給熨斗目・麻之事、

但今日方足袋不用候之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

一、八日・九日頃夏御借米手形案紙・俵数帳、御番頭江差出候事、

但大坂在番当り年者、取越米手形案紙・帳、一所二差出候事、

一、十五日当御番服紗給・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

但参勤之御礼有之候得者、月並御礼者無之事、

一、十七日紅葉山 御宮 御参詣之節、供奉出入有之候事、

一、同日当御番婦方給熨斗目・麻之事、

但十七日御請二付、十六日泊り方・十七日帰り方服穢之者相改候事、

一、廿日上野 (尾水) 御参詣有之候得者、当御番給熨斗目・麻之事、

一、廿八日当御番服紗給・麻之事、

一、同日御礼登 城各同服之事、

一、晦日増上寺 御参詣有之候得者、当御番給熨斗目・麻之事、

五月

一、朔日当御番服紗給・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

一、同日在番帰り御礼給熨斗目・麻、且悴共御目見同服、詰番組与頭差引

之事、

一、大坂登り組休入、二条下り休明二付、昼夜廻り請取渡之儀、五月之月

番組寄合之節相極メ、廻り退役・廻り当役之面々江登り組・出勤組方申

渡候事、

一、大坂登り休入、二条下り休明二付、預替之式、二条登休二入候節同断、

本組戻り御番老日御用捨、預中御礼御預替同断之事、

一、水馬水稽古之面々有之候得者、届書組頭江請取、四月末番頭江差出、

若年寄衆御船手江達相濟候段、番頭江申来次第、稽古之面々江申達候、番

頭并組頭相組切麻上下着、御礼被相越候事、

一、右稽古六月八日・九日頃之内、御番頭方御達有之相始申候、八月廿二

日・廿三日頃之内相止候様、御番頭方達有之、役船出数書付、銘々方差出次第番頭江差出申候、三人乘日除船大御番方江壹艘出申候、

但初而稽古始候面々方者、願書請取差出申渡相濟、御礼勤番頭・与頭不残江被相越候事、

- 一、五日当御番染帷子・麻、終日泊方共之事、
- 一、同日御礼登 城右同断、長上下之事、
- 一、八日上野(寛永寺) 御参詣有之候得者、当御番帰方染帷子・麻之事、
- 一、十五日当御番染帷子・麻之事、
- 一、同日御礼登 城右同服之事、
- 一、十七日紅葉山 御宮 御靈屋江 御参詣有之候得者、当御番染帷子・麻之事、

- 一、廿八日当御番染帷子・麻上下之事、
- 一、同日御礼無之事、

## 六月

- 一、朔日当御番染帷子・麻之事、
- 一、同日御礼登 城右同服之事、
- 一、十二日増上寺 御参詣有之候得者、当御番染帷子・麻之事、
- 一、十五日当御番染帷子・麻之事、
- 一、同日御礼無之事、
- 一、十六日嘉祥二付、当御番染帷子・麻之事、

但当御番・明ヶ御番ヲ除キ、諸組方合テ五拾人出人有之事、与頭之当御番斗相除不残出ル、在番登休入中ニ而茂、与頭ハ御暇不相濟内者罷出候事、

- 一、廿日上野(寛永寺) 御参詣有之候得者、当御番染帷子・麻之事、
- 一、廿八日当御番染帷子・麻之事、
- 一、同日御礼無之事、

## 七月

- 一、朔日当御番染帷子・麻之事、
- 一、同日御礼登 城右同服之事、

一、大坂在番御暇染帷子・麻、且悴共 御目見同服之事、詰番組与頭差引之事、

- 一、七日当御番泊方共白帷子・麻之事、
  - 一、同日御礼登 城白帷子・長上下之事、
  - 一、十四日紅葉山惣 御靈屋江 御参詣有之候得者、当御番染帷子・麻之事、
  - 一、十五日当御番染帷子・麻之事、
  - 一、同日御礼無之事、
  - 一、廿二日増上寺江 御参詣有之候得者、当御番染帷子・麻之事、
  - 一、廿八日当御番染帷子・麻之事、
  - 一、同日御礼登 城右同服之事、
- 一、七月末、八月之内、国役金納之儀、御勘定奉行方之案文達書、番頭方達有之次第、知行所国役掛り候面々江申達、納相濟次第、納証文并御代官手附手代請取書控とも、月番与頭江取集、十一月晦日限り御番頭江差出申候、御代官手代請取書被戻次第、銘々江差戻候事、

## 八月

- 一、朔日当御番泊方とも白帷子・麻之事、
- 一、同日御礼登 城白帷子・長袴之事、
- 一、十五日当御番染帷子・麻之事、
- 一、同日御礼登 城右同服之事、
- 一、廿八日当御番染帷子・麻之事、
- 一、同日御礼無之事、

## 九月

- 一、朔日当御番服紗袷・麻之事、
- 一、同日御礼登 城右同服之事、
- 一、同日大坂在番帰御礼熨斗目・麻、相延候得者服紗小袖・麻、且悴 御目見者両日とも熨斗目・麻之事、
- 一、秋大的 上覽大御番方罷出候節者、上覽被 仰出有之候節、射手性名書、御番頭江差出候事、
- 一、当月八日・九日頃之内、冬御切米手形案詞・俵数帳、番頭江差出候、

春夏同様之事、

一、当月月上旬之内、切支丹宗門改証文相組切取集メ、上包無之見出し認メ、程村紙二而上袋致し、相組切一所二入、月番与頭江取集、九月廿日頃御番頭江差出候事、

但二条・大坂取人代人罷登候面々、別紙証文取置、右之節同様一所二袋江入差出可申事、

一、大坂下り組出勤二付、在府組助廻り引、出勤組昼夜廻り請取渡之儀、九月之月番組寄合之節相極、助廻り退役・廻り出役之面々江、大坂下り組・在府組方申渡候事、

一、九日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城花色小袖・長袴之事、

但万石以下花色二かきらす、

一、十日今日きり足袋相用候事、

一、大坂下り組出勤二付、本組戻り預替之式、大坂登組休入、二条下り組出勤之節与同断、

一、十五日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

一、十七日紅葉山 御参詣有之候得者、当御番熨斗目・麻之事、

但前日泊り方方服穢改候事、

一、廿八日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御「礼」<sup>(職紙)</sup>無之事、

十月

一、朔日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

一、五日 御誕生<sup>(備川奉)</sup>日二付、当御番熨斗目・麻之事、

但泊り方者平服、

一、十五日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

一、亥猪当御番夕七時方熨斗目・麻之事、

一、同日御祝儀頂戴登 城熨斗目・長袴之事、

但当御番相除キ、諸組方合五拾人、詰番組方与頭老入、為差引登城之事、

一、諸拝借金上納之面々有之候得者、上納金包之儀、十一月中旬迄二用意致置候様申達、右上納金納証文帳、番頭方月番与頭江差越次第印形取揃、上納金相添、十一月晦日限番頭江持参差出候事、

一、十四日増上寺 御参詣有之候得者、当御番熨斗目・麻之事、

一、廿八日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼無之事、

十一月

一、朔日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

一、十五日当御番服紗小袖・麻之事、

一、二条在番地願之面々有之、組与頭方十二月頃登り組頭<sup>「与」</sup>江、故障有無掛合之上、願書番頭江差出候事、

一、廿八日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼無之事、

十二月

一、朔日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

一、十三日御煤払二付、当御番服紗小袖・麻之事、

但泊り方平服、

一、四季打鉄炮有之面々、右鉄炮取上書付、掛り大目付宛所并打留物数書付・扣とも、十二月中旬頃迄之内、番頭江差出候事、

一、武芸春以来免許目録請候品有之候得者、右之面々方書付差出、十二月中旬迄番頭江差出候事、

但春以来学問弟子取講積等出来候者も同様書出候事、

一、十五日当御番服紗小袖・麻之事、

一、同日御礼登 城右同服之事、

- 一、来二月二条登り組休入二付、助昼夜廻り之儀、在府組々方申立候事、
- 一、廿八日当御番熨斗目・麻之事
- 一、同日御礼登 城右同服之事、
- 一、節分当御番二相当候得者、泊り方熨斗目・麻之事、泊り方与頭、兩人御番所例席江罷出、御番衆共一同御祝儀之豆頂載之事、

『参』休日数之覚

- 一、取人休 五十日 一、代人休 三十日
- 一、代々人休 十五日 一、三度目代人休 十日
- 一、差人休 五十日 一、差人之代り差人休 三十日
- 一、差人之代三度目方休 二十日

右何れも被仰渡候翌日方前書之通り之事、

但取手返之面々者、在番内代人被仰渡候得者、定式下り休之外休無之、御番代以後被仰渡候得者、定式代人休明当日方増休二十日、残役宿割又者御用物差添等、其外都而先下り等之面々、代人被仰渡候節も御番代前後之日積りを以、休之有無被仰渡候事、

『老ノケ条下ケ札』

『下ケ札二ノケ条』

会田伊右衛門同例御礼之儀時之上下、下総守殿御同役四人江一

両日中参り様達向組之儀者、此方にて差図不致心得、

下ケ札三ノケ条

伊右衛門者六番ニ而跡組之事故、十月十七日出立之処、道中濟二付同日方増二十日、十一月六日迄休、七日江戸出立之御達可然、則十月十七日者当組出勤之日ニ候得共、代人組先組ニ候得者、十六日出立之事、依之式番組出勤之日方幾日与申義者相違、向組之前後ニ而産出候事与御心得之方宜く候、代人濟被達候御礼之事、在番中者平服勿論之事ニ候得共、休中

下ケ札

殊ニ長十郎例も有之、麻上下着用五軒廻り登御達之方宜候、尤一兩日ニ而宜候、

柳原九右衛門

- 一、二条・大坂方下り候者、差人ニ而罷登候節、定式五十日之外、増休三十日望ニ而罷登候者、差人休相止メ、代人休三十日、代々人休十五日、但代人之代り差人ニ而茂代々人ニ相成、代人ニ御極メ被仰渡候事、
- 一、御金宰領休 二十日
- 一、同宰領休 十日

是者下り差掛り罷下直ニ在江戸之者、但六月朔日以後江戸着之者者、直ニ在江戸之積り、五月晦日迄ニ下着之者者、大坂江又候罷登可申事、二条方御用物ニ而罷下り候者も右ニ准シ候事、

『但二条者、正月晦日江戸着之者者再京、二月朔日江戸着ニ

候ハ、直ニ在江戸、尤右者於二条 御用物被仰渡候節、江

戸居附再京とも被仰渡候事、

- 一、御扶持方者、式百俵十人扶持一倍之積り被下、式百俵余者百俵二付式人扶持増、一倍者同断之事、
- 一、再京之者者、江戸逗留中も道中上下同様御扶持方被下、

御暇拝領物濟之日方登休三十日之間者、御扶持不被下候事、

- 一、大坂御金請取休 前後五日ツ、
- 一、類焼休 三十日

但部屋住之者者休十五日、別棟ニ候得者父子共三十日、尤被仰渡候翌日方休、在番之者者下り後右日数休、大岡孫右衛門二条在番休中類焼二付、定式休明ケ出立之日方増休三十日致、罷登候事、

但自火ニ而者休無之、先格ニ有之候、

『但自火ニ而外類焼有之候而も取越米願出来之例、大御番三番

組土岐丹波守組山上(頼昌) 嘉永五年正月十六日、自

火外類焼有之候得共、取越米被下候事、

- 一、半類焼休 十五日 一、床上水附休 十五日

但被仰渡候翌日方休、在番ニ有之候得者前書之通、

一、地震家潰休 三十日

一、屋鋪御用二付、被 召上代地被下候節、休三十日、

但代地被下候翌日方休、部屋住之者十五日、別棟二候得者父子共三十日、在番之者下り後右日数休、

一、在番登休二入十日迄之内、組頭明キ跡被仰付候得者、組成・他組成無差別定式休之外増休無之、十日過候而被 仰付候時者、組成者登休之外十五日、他組成者三十日増休之事、

一、二条・大坂残役代り合ニ罷下候節、上方ニ而者休五日、江戸着翌日方十五日休、役儀請取代り合ニ罷登候者、役儀引渡候翌日方日数廿日休罷登り候事、

一、地願之面々登組出立定日方三十日前に被仰渡候得者、休日数ニ不抱登り組一同罷登可申候、三十日方過被仰渡候節者、被仰渡候翌日方三十日休、右代人病氣ニ而難登、代々人又者三度目代人被仰渡候節、登候組出立定日三十日方過被仰渡候ハ、代々人被仰渡候翌日方十五日、三度目代々人十日、

一、地願ニ而代人相濟、病氣ニ而永残被仰渡右代々人取手返之者江被仰渡候節、道中ニ而被仰渡、又者下り定式休中被仰渡候者者、定式休明ケ翌日方代々人休十五日相休之事、

御藏奉行出役之者 御免之節休日数之覺

一、三ヶ年方五ヶ年相勤候者 休百日

一、六ヶ年方十ヶ年迄相勤候者 休百五十日

一、拾ヶ年以上相勤候者 休百八十日

但右何れも 御免翌日方右之通、

一、出役之者御役仕舞御勘定不相濟候共、御番相勤ながら致御勘定候事、

右休日数 五十日

一、壹ヶ年程勤候得者 五十日

一、半年程二候得者 三十日

一、百日程二候得者 二十日

右御用有之遠国等江罷越候者、罷帰り候者休日数之覺

一、十日路方遠所江罷越候者 休二十日

一、五日路ハ 休十日

一、五日路方近所者 休五日

一、論所檢使御用相勤候者、休日数者御用中勤日数多少ニ寄、休日数被仰渡候事、

但取手返代人定式休明出立之事、

一、取手返定式休明出立者、二条登六月廿一日、跡廿二日出立之事、

一、右代人面々者休中ニ代人相濟候事も有之、其節者何れ休明より増休可致候事、

一、二条・大坂とも取手返代人被罷下候仁、下着届被申越候得者、右当日御番頭用方迄紙面ヲ以申遣シ、右当人江者明日御番頭江御届ケ罷越候様申達候、帰府 御目見之節、前日被申越次第、御番頭用方迄紙面ヲ以明幾日登 城ト申事申遣候、御改之節者不及申遣、当日当人本組戻り届ニ被參候間、拙者共方ハ不申遣候、

一、自火ニ而類焼無之候得者不及差扣候得共、尤伺書ハ差出可申候事、

一、地面貸置候者方出火類焼有之候節者、地主差扣之事、

一、残役・居役不殘類焼之節、勤役前類焼休相立不申候、寛政四子年七月廿一日類焼、遠藤備前守殿組先残役鈴木左内義下り休之節、増休三十日有之候事、

一、同役衆居宅致類焼候節茂同様休三十日、右休中者尤御礼登 城并惣出仕とも罷出ニ不及旨、寛政四子年番町辺焼失之節、同役衆多類焼有之候節、岡部出羽守殿筒井權左衛門江御物語有之候事、

一、御茶壺差副ニ而罷下り候者、先下り之面々且跡残り役代人相叶候節、先組同役衆方当人江代人相叶候段申来候共、本組御番頭江御礼書状者差立不申、本組御番頭方被仰渡申来候上ニ而、書状ヲ以御礼可申上候事、尤跡残役も同様之事、

『四』二条・大坂休入并出立日限之事

二条在番登休 二月十日より

二条登宿割 三月 小廿五日 廿六日 大廿六日 廿七日

両組御破損奉行 三月 小廿五日  
大廿六日

外御蔵奉行 三月 小廿七日  
大廿八日

先御番頭 三月 小廿八日  
大廿九日

先組兩頬 小三月廿九日 四月朔日  
大三月卅日 四月朔日

跡組兩頬 四月 三日

跡御番頭 四月四日 四月十五日  
同十七日 交代

跡残役二条出立 其年之大小二寄  
時日不同

先残役江戸出立 右同断、

同下り宿割 三月 小十九日 廿日  
大廿日 廿一日

先組兩頬 四月十三日 十四日

跡組兩頬 四月十五日 十六日

先御番頭 四月十二日立、同廿三日江戸着、

一、外御蔵奉行先組之先頬江戸附下ル、登組先頬川支等ニ而交代延引罷  
成之節ニ而も、御蔵奉行跡役之仁、定式着ニ候得共、定日之通り出立、

一、御破損奉行其組之跡頬江戸附罷下候事、

一、跡御番頭 四月十七日立、同廿八日江戸着、

一、二条下休明ヶ 六月十一日・十二日御番出勤、

一、取手返登 六月廿一日・廿二日出立、

一、御茶壺差副二条登り道中十二日、  
但其年之土用ニ寄、土用入り方四十一日前二当ル日江戸出立、

一、御茶壺大坂下り差副道中十三日、

但土用入り方十五日前二当ル日大坂出立、土用入り日三日前二当ル  
日江戸着、日割之事、

一、初御合力金為請取大坂江戸出立、

但五月十三日京出立、同十七日帰京、同十八日御金渡、尤春御借米

御帳紙直段ニ而渡ル、

一、後御合力金請取、

但十月朔日京出立、同六日帰京、同七日御合力渡、尤夏御借米直段

二而渡ル、

一、御金請取休日数 前五日 後五日

大坂在番之事

一、大坂在番登り休六月十一日より、

一、同登宿割 七月 小十九日 廿日  
大廿一日

一、両組御破損奉行 七月 小十九日 廿日  
大廿一日

一、外御蔵奉行仮役 七月 小廿一日  
大廿二日

一、先御番頭 七月 小廿二日  
大廿三日

一、先組兩頬 七月 小廿三日 廿四日  
大廿四日 廿五日

一、跡組兩頬 七月 小廿五日 廿六日  
大廿六日 廿七日

一、跡御番頭 七月 小廿七日  
大廿八日

一、跡残役大坂出立、一、先残役江戸出立、

一、下り宿割 七月 小十六日 十七日  
大十七日 十八日

一、外御蔵兩組とも八月八日大坂表代合出立、  
但先組先頬江戸附修行、尤一統交代延引ニ罷成候而も、代り仮役定式  
二着有之候得者、定日ニ出立之事、

一、先御番頭 八月七日交代出立、

一、先組兩頬 八月八日・九日

一、跡組兩頬 八月十日・十一日

御破損奉行者其組之跡頬江戸附出立、

一、大坂下り休明 十月十六日・十七日御番出勤、

一、取手返登り十月十六日・十七日江戸出立、

一、御加番十三日道中、  
老御加番 七月十六日 江戸 同廿八日大坂着  
八月三日 交代

三御加番 七月十七日 江戸立  
八月四日 交代

式御加番 七月十八日 江戸立  
八月五日 交代

四御加番 七月十九日 江戸立  
八月六日 交代

一、大坂初御合力、八月廿四日夏御借米御帳紙直段、

一、同役御合力、正月十六日冬御切米御帳紙直段、

『五』御加番江被下候御合力割合

- 老御加番 式万七千俵
- 弐御加番 式万八千俵
- 三御加番 壹万俵
- 四御加番 壹万俵
- 都合四人江六万五千俵被下也、

『六』二条在番在役数并役順

- 一、残役 下休十五日  
登休廿日 一、御破損奉行
- 一、御茶壺差副 一、外御蔵奉行
- 一、米払 一、御弓奉行
- 一、御鉄炮奉行 一、御具足奉行
- 一、宿割 一、御金請取

大坂在番在役数并役順

- 一、残役前同断 一、御破損奉行
- 一、御茶壺附 一、米払
- 一、外御金奉行 一、外御蔵奉行
- 一、御塩噌奉行 一、御蔵目付
- 一、宿割

但右在役之仁、父母之忌ニ相成候得者、右忌中代り罷出候事、

『七』騎射带佩致候者在番永残り致し候訳之事

- 一、騎射带佩御用残之義、寛政三亥年二月二条登り御組方何相濟候旨、四隅斗御用残相伺、其外稽古致候者伺不及召連罷登候様ニ被仰候之間、同年七月二日出羽守殿権左衛門江被成御咄候、急度相達候筋ニ者無之、寄々相咄候様被仰聞候、右ニ付騎射带佩共ニ稽古致候者、少しニ相成候而者如何ニ候間、稽古人数者大勢有之候間、宜く心得違無之様ニ被御申聞候、
- 一、騎射带佩稽古致し、宿病断等ニ而在番永残り致し候者、大の一統 上覽

二差出不申候義、寛政四子年正月御番頭方御伺御附紙ニて相下し候之由、出羽守殿筒井権左衛門江御達被成候事、

- 一、四隅五ツ杖之外御用残相成不申候ニ付、寛政三亥年七月相極候事、
- 一、御蔵奉行出役之者、御祝義御能拜見被 仰付候節者、組江附罷出申候、寛政四子年八月、

『八』若君様 御誕生御祝義御能之節、羽太庄左衛門義、当組江預りニ而組被附罷出候事、

『九』組頭諸御礼勤候式

- 一、跡目家督、
- 一、五百石以上継目御礼、
- 一、惣領願、
- 一、養子願、
- 一、屋鋪被下候場所見立可相願旨被仰渡候節、
- 一、屋鋪願拜領、
- 一、屋鋪替、
- 一、在番御暇帰府御礼之節、
- 一、悴 御目見、
- 一、病氣ニ付願之通御役 御免之節、
- 一、老衰ニ付願之通御役 御免拜領物有之候節、
- 一、其身ニ付候儀ニて御咎有之、右 御免之節、
- 一、縁組相手布衣以上ニ而、於 御城被仰渡候節、右拾三ヶ条兩 御丸御老中方・若年寄衆不残江罷越可申候、但麻上下之事、
- 一、縁組願、 但悴とも、
- 右被仰渡之御老中、御用番之御老中江罷越候事、
- 一、改名願 ○附置候者、五ヶ条平服之事、
- 一、養子差戻願、

- 一、父剃髮改名願、
- 一、月切駕籠願、
- 一、夏足袋願、 ○但平服、
- 一、遠慮差扣伺差出不及其儀旨被仰渡候節、
- 一、家来御仕置被 仰付候節、差扣伺不及其儀候節、
- 一、知行所公事差出、願之通裁許相濟候節、
- 右三ヶ条被仰渡之御老中江御礼罷越、但麻上下
- 一、忌明御届、御同役へ茂服紗・麻二而御番頭江罷越候、

## 『十』御番衆御礼勤候式

- 一、跡目家督、
- 一、五百以上右脱カ繼目之御礼、
- 一、惣領願、
- 一、養子願、
- 一、屋敷被下候間、場所見立可相願旨被仰渡候節、
- 一、屋鋪拝領、
- 一、屋敷相對替、
- 一、忤 御目見、
- 一、大的 上覽拝領物仕候事、
- 一、其身二対候儀ニテ御咎有之 御免之節、
- 一、縁組願、相手布衣以上二而於 御城被 仰付候節、
- 一、御供弓鳥射番拝領物仕候節、
- 一、老衰ニテ願之通御番 御免、 拝領物仕候節、
- 右拾三ヶ条兩 御丸御老中方・若年寄衆不殘為御礼參上仕候事、
- 但大的 上覽初而罷出候者、 上覽相濟候御礼、御用番御老中・当日御懸り之若年寄衆江罷越候、
- 一、大的 上覽初而罷出、 拝領物無之候とも、右者初而 上覽相濟候二付、御月番御老中・当日懸之若年寄衆江罷出候事、
- 一、二条・大坂御破損奉行御役扶持被下候段被仰渡候御礼、御用番并被仰

渡之御老中・所司代敷御城代兩御定番江罷越候、

- 一、養子差戻、
- 一、父之剃髮願、
- 一、月切駕籠願、
- 一、夏足袋願、
- 一、遠慮差扣伺差出不及其儀旨被仰渡候節、
- 但其身二対し候義左之通罷越、一類ニも等之義ニ候得者不罷越、
- 一、知行所公事差出、願之通裁許相濟候節、
- 一、家来御仕置被 仰付候節、差扣伺不及其儀候節、
- 一、御番遠慮 御免、
- 右拾三ヶ条被仰渡之御老中江罷越候、尤御番頭同役共江も罷越され候事、
- 但月越二相成候得者、御用番并被仰渡之御老中江罷越候事、

## 『十一』御番衆組切御礼式

- 一、嫡子願、
- 一、養子願、
- 但判元見届候節、兩人麻上下、組頭同道取手返二御礼、但シ御進達濟時之上下ニテ御番頭相組限、
- 一、小普請入願相濟、
- 一、屋敷拝領、
- 一、屋敷相對替、
- 一、縁組願 但忤ニも同様、近來者猪三郎例有之候事、
- 縁組願之通被 仰付候節茂、御番頭并同役共江斗麻上下ニテ被罷越候事、
- 右何れ茂御進達濟時之上下着用、御番頭并相組同役江斗、
- 一、取人・代人先組江相濟候節、
- 一、昼夜廻り申渡、
- 一、在役内意申渡、
- 右之時之上下ニテ同役四軒共相廻ル、

寛政八辰年二月十日方助廻り、石川伝太郎伯母忌ニ付、相土石野清三郎老入ニ而場所請取申候、尤助廻り申渡以後之忌場所請取候座、翌十一日御番頭并相組切罷越候事、

一、取人・代人本組御聞届之事、

右時之上下着、御番頭相組江斗、

一、乘輿断、

一、杖願、

一、忌明、

一、産穢、

但産穢明茂二十以下(日脱)ニ候得者、届御番頭并相組江斗参、月番同役江者手紙ニて申遣し、二十日以上之忌者五軒廻り、忌明之節当人病氣

ニ候ハ、口上書之事、

右者御番頭并同役四軒廻り、

一、取人・代人罷登上着之届、

右者御番頭并相組同役江書状差越候事、

一、代人ニ罷登り、在番先ニ而忌服・産穢候ハ、相組与頭江書状并届書可差越候事、

但永残之面々同様在番先江可申登候事、

一、御用残相済候節、

右者麻上下、御番頭同役四軒廻り、

一、大的 上覧射手申渡候節、

右時之上下ニて御番頭并相組江斗、

一、大的 上覧射手被仰渡、御用捨無之御当日被 仰出、雨天等ニて御延引相成候節者、重ニ而者前日被 仰出候、改泊り御番操替請取方江斗相勤可申候得共、寛政八辰年正月、松平下野守(康道)殿御組之節、御差支茂無之候得共、射手申渡候節より泊り操替之様被仰聞、大岡弥右衛門・窪田助左衛門・山崎喜内罷出候節より操替申候事、

一、御番引込三日迄者、出勤之節御番頭并相組江斗罷越、月番同役江手紙ニて申遣候事、

一、同断三日越候得者、同役四軒廻り、

一、月代願不及御礼、

但前々者願書相組同役江取置、御番頭へ口上書ニ而申達、直ニ被聞濟候処、松平下野守(康道)殿好ニて、書付之内医師何之誰月代仕候得者宜と申文言認入、右願書御番頭江差出候様被達候、山角岩次郎月代願之節方右之振合ニ相成申候、

一、看病断、

但父母者御番頭五日迄、妻子ハ三日限り、岡部出羽守(長貴)殿御番頭之節

方相定ル、

一、水馬水稽古相願御聞濟有之候節、

右之時之上下着、御番頭并相組与頭江斗相越、尤初而稽古被相願候

仁者、同役四軒共江可相越候事、

一、悴御番入願差出候帳江、御附上ケ相済候事、

右御礼麻上下、御番頭相組斗、

一、寛政七卯年十月十九日、松平下野守(康道)殿内室出産、女子出生有之、右飲

御番衆時上下ニ而、廿一日・廿二日両日之内罷越、

一、御番衆知行所百性久離願并久離免之願御聞届有之、奉行所江御達相済候節者、御礼不及候事、

『但久離願書村方之書面、願人之内ニ当人之父母無之候ハ、

兄歎・姉歎・伯父・伯母等之内ニ而、何れ当人方目上之続キ

之者老入無之候得者、断之節奉行所ニ而不都合之由、以後之

心得ニ記置候事、

一、養子差戻願、同役共判元見届、御番頭江持参差出被請取候節、其当人

翌日麻上下着用、御番頭江御礼罷越、同役江者相組切被相越候事、

但御進達濟御礼者、時之上下御番頭并相組斗、

一、御番衆家来并百姓等、御老中方江欠込等致し、御番頭方与頭江引渡、与頭ヨリ当人江引渡候節者、時之上下ニ而御番頭并相組同役江罷越候事、

一、病氣ニ而廻り退役御聞濟之節者、当人方御番頭用人中迄口上書ヲ以御礼可申達、相組同役江も同断、

一、姉看病断、御番三日相濟候、先格、

(昌賢)  
米倉長門守本組

寛政二戊午十月十九日断  
立花出雲守(種周)組断

浅香吉之丞

寛政八辰年二月九日断  
松平下野守殿(康道)組之節

戸田庄左衛門

一、騎射一統 上覧相濟候節、

翌日拝領物有之、西丸江罷出謁詞有之、御老中方・若年寄衆不残・

掛り御小納戸頭取、且其組番頭・組頭江不残罷越候事、

一、三月廿日、田辺清右衛門歩行願伺御聞濟被成候、為御礼米倉丹後守殿江  
名代ヲ以申達候由、

一、山崎嘉内御弓場始御用被仰渡候、為御礼御番頭江参上仕候、

一、寛政九年十一月、石川伝太郎悴次郎太郎たゐはい稽古仕度旨御番頭  
御断相濟候旨被御申達候、為御礼丹後守殿相組与頭江斗、時之上下二而  
罷越候事、

一、間宮彦六娘離縁願御届書、丹後守殿御用番江御進達之旨被仰下候節、  
為御礼可罷越处、病氣ニ付御用方迄口上書遣入、

### 『十二』同役并御番衆共御礼式

一、遠慮差扣伺差出不及其儀旨被仰渡候、右被仰渡候御老中江為御礼参上  
仕候、但其身二不抱親類之儀ニ付、遠慮差扣伺差出不及其儀旨被仰渡候  
節者、御老中江者参上不仕候、

『近例』寛政三亥年、大坂在番帰府後、右勤役中御扶持方渡之儀間違有之、

大坂御藏奉行差扣被 仰付候節、窪田小兵衛御礼廻りハ不及差  
扣候故、御老中・若年寄衆不残江参上仕候、

一、同役・御番衆とも其身ニ対候御答有之御免之節者、御老中方・若年寄  
衆不残江御礼参上仕候、

『近例』寛政七卯年八月六日、上田乙之助従弟池田巳之助、石川藤兵衛

従弟違小尾卯左衛門、戸田庄左衛門儀之従弟佐野十左衛門、揚  
座鋪江被遣候節、右三人之衆差扣等同候处、不及其儀旨太田備  
中守殿被仰渡候節、御礼之儀御番頭相組与頭江斗罷越、御老中

方江者不及罷越候事、

一、同役并御番衆親類之儀ニ付御答有之御免之節者、被 仰渡候御老中方江  
斗御礼参上仕候、

一、父永残ニ而在番帰府之節、悴 御目見相願候節御礼之儀、本組御番頭江  
斗罷越、御預り組御番頭江者届書差出、御礼二者不相越候、寛政四子年  
五月朔日、兩宮次郎右衛門当組江預り之節、右之通有之候事、

### 『十三』先格御番頭江申立候之覚

一、天明二寅年十二月八日、玉虫十左衛門永井美濃守殿江被参、用人中江  
被達置候、左之通、

一、遠 御成西丸とも当御番前日被仰下候様、尤月番江可被仰下候、御番  
衆当御番代り合刻限之儀相触申候、

但 御仏参等定式之儀者、不被仰下候共宣く御座候、

一、続吟味等之儀、急成儀者同役兩名ニ被成、式ヶ所江可被下候、尤急成  
儀ニ無御座候ハ、月番江四人連名ニ而可被仰下候、

一、評定所又者町奉行御役所江相番共之家来差出候儀者、相組之無御構月  
番江可被下候、

一、御手翰被下候節、罷出御答不申上候節、夜中ニ茂及候ハ、不差急儀  
者翌日御答可仕候、

一、御番衆恐悅伺 御機嫌等者、一相組方兩人ツ、先格参上仕候、

一、五節句御礼御番衆祝とも先格参上不仕候、

一、年始暑寒御番衆参上仕候、  
但年暮二者前々参上不仕候、病人者口上書等も差上不申候、

但忌中之者其儀無御座候、

一、御番衆方届等之儀差急不申候儀者、夜中申上間鋪、翌日可申上候事、  
一、御届等其外御組方差出候分、手紙ニ而相分候儀者手紙ニ而差上可申候、  
一、御前置出人并供奉出人兼而相知候儀、弥卜申儀不被仰下候共、揃書

前日夕方迄二差出可申候、尤弥ト申儀月番江可被仰下候、

但差掛り候儀者、被仰下候御答之節、御用人中江も紙相添、揃書御返事に差上可申候、

一、差出候書物御届書等之類、御泊所ニ而差出可申候、  
右之通用人中江十左衛門掛合申候、

『十四』

一、天明三卯年六月申合、二条下り出勤之節者六月十日・十一日之内、大坂下出勤之節者十月十五日・十六日之内、本組戻り御礼ニ参候様可申達候、尤其節判形も相調候事、

一、天明三卯年八月三日、永井美濃守殿御泊所ニ而御渡候書付、

『十五』、各在番之節、病氣ニ而日延之儀被申聞候節、五十日余承届候得共、以  
来者五十日之外者承届不申候間、（カ）転取兼候病氣候ハ、退役之儀可被相願候、  
但右之通ニ有之候得共、近年門奈半右衛門・羽太左京、五十日余日延被承届候儀有之候事、

『十六』、拾老番組取人・代人・代々人之面々借用金出入、町方願出候節、内  
濟被致候様組頭衆被申渡、右内濟取斗有無共在番組頭衆ヨリ本組与頭江可申遣候事、

『十七』、於在番先御番衆親類江对面之義、親子者三度、兄弟者老度可承届旨、  
兼而申合之通相心得可被申候、兄弟者老度之外、無抛儀者両度迄者承届、  
其余者決而承届申間敷候、

『十八』、御番衆在番江被罷登候節、日延願之儀、三仕切方上、無抛趣ニ候節者、  
月番之番頭丁簡ニ而両三日致用捨候得共、以来三仕切方上ハ用捨不致候、  
且又日延願候仁、先下り之儀勿論翌年取人・代人願承届申間敷候、併し  
居宅不殘類焼之仁、其様子ニ寄承り届可申候、其外者決而承届申間敷候、

但取人・代人・代々人之仁日延相願候節、度々残役方在組番頭江相届可申候、左候得者本組番頭方与頭衆江病体相糺可申候、

『一九』寛政三亥年九月御渡、御番頭被仰合心得之式

一、出火之節馬建場江罷出候節、夜中ニ候得者各方高張提灯式帳ツ、為御持可有之候、其段御目付桑原善兵衛江達置候事、

一、出火之節御番衆虎之間江掛り、并大広間御縁類迄火の粉被防、万事被心得候様、尤各相廻り被致差引候様、兼而其趣御申達可有之候、  
但夜中ニ候得者、御番衆弓張提灯銘々持可申候事、

一、火事之様子次第、西丸 御殿江も我等罷出、御番所江茂立寄可申候事、  
右之趣、今度同役衆一同申合候ニ付、各御心得御番衆江も御申達可有之候、  
亥九月

『二十』御香奠目録認方・仕立方之事

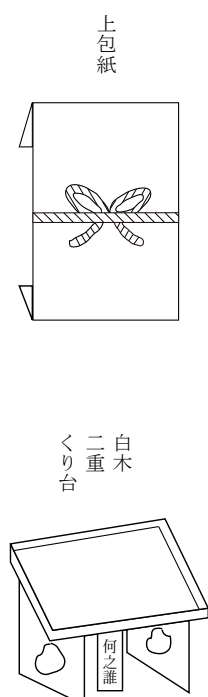
一、（備前守）孝恭院様御法事相濟候、惣出仕寛政七卯年二月廿五日、四日揃服沙小袖・半上下之旨、松平下野守殿被相達候、

一、（寛永寺）上野拝礼者熨斗目・長袴、布衣以上者布衣ニ而参詣之衆も有之、長ニ而参詣之衆茂有之、大名衆同様、

一、御香奠銀老枚相納申候、目録大高紙式枚重ね横ニ二ツ折、台ニ重操り、台認方左之通り、

一、右使者熨斗目・麻上下、供刀持足輕老入、御香奠入挟箱持老入、草履取老入、召連候、

一、銀子後藤包、上包奉書ニ而、包折方・水引掛ケ様・上書致方左之通り、



進上	白銀	老枚
以上		
何之誰		
名乗		

右目錄直字ニ認ル、  
組ニ奇  
献上ト認メ可然

御香奠仕立方・納方、右之通ニ候得共、近来 宮様御内勤之方江手  
寄有之 候方江一手ニ相頼、銀座包之儘ニ而別段上包も不致、役名・  
<sup>(姓)</sup>性名・実名・使者之名記し遣候、右取扱挨拶銀五匁方金五十足限  
り納濟ニ而、請取書來候事、

『二十一』宝曆四戌年十一月十五日、月番酒井飛驒守殿於御宅御番頭御寄合被仰

合候御書取

一、他役与相跨變事有之節、向後一日半日迄之内、届可申候積りニ付、唯  
今迄變事有之候組々頭方寄合之儀廻状差出、月番之者添及廻状 御城部  
屋并於宅寄合申談候得共、左候而者廻状順達之間有之候間、寄合延引之  
筋ニ相成候間、向後者變事有之段承届候者、吟味不相濟共變事有之、組  
之番頭方在府同役中江銘々以手紙不限昼夜宅寄合之儀可申遣候事、  
一、本御番当日他役与相跨變事有之段承届候得者、出勤刻限迄者吟味之儀  
取斗、變事之訳吟味之筋申渡置候趣、御役方之者月番之宅江差遣、御番  
明退出迄之内、取斗之儀相頼可申候、寄合之儀者明番之当朝者番頭宅江  
寄合可申候筈、尤其段者前晚泊出番之刻限、銘々方手紙ヲ以申達置候、  
左候得者御番明退出迄之内、吟味之筋月番江相届差図請候之様、与頭江  
茂早速可申遣候事、

但右之通御座候ハ、早速刻限断可致候事、

一、本御番出番以後、他与相跨變事有之段届有之候得者、早速留守ニ差置  
候役方之者月番之方江相届候様、兼而可申付置候、尤變事有之段、泊所

迄申越承届候得者、早速月番之方江、泊所方手紙を以御番明ケ退出之義  
取斗、并御番明ケ於宅寄合可申段、銘々江申遣給候様ニ相頼可申遣候事、  
一、月番之者本御番日、在番組并月番之者組之他役相跨變事有之節者、前  
条之通相心得、十五日を分ケ前後之月番江可申遣候、若病氣差合ニ而前  
後之月番相障候得者、跡月番先々月番之順を以可申遣事、

一、詰御番日他役相跨變事有之候節者、詰番退出より其番頭宅江寄合可申  
談候、尤其節銘々江以手紙可申遣候事、

一、惣而變事有之節、唯今迄者組頭者宅江相越承届候上、番頭江相届候、  
左候而者往返手間取候間、向後變事有之段組頭承届候得者、早速番頭江  
以手紙相届、組頭者變事有之宅江相越、遂吟味可申候、番頭方も御役方  
之者之宅江差遣し、吟味之義組頭まで差図可申候、吟味相濟候得者、番  
頭宅江組頭相越可申聞候事、

附在番之義、残役届候義も本文之通り手紙を以申越、残役者變事有  
之宅江早速罷越、吟味可有之候、尤品ニ寄組頭も差遣可申候、何れ  
ニも差図之義者、御役方之者差遣可申談候、

一、他役与相跨變事有之節者、一と通り遂吟味候迄ニ而、早速御届仕御吟  
味之義相頼可申候事、

附大御番衆一統他組相跨變事有之節者、双方番頭申談、遂吟味可申  
候、併し相滞候筋有之候得者、是又御吟味相頼可申候事、

一、御番衆於宅他方参り候者者、變事有之節者、一ト通り者致吟味、相滞  
筋有之候ハ、是又御吟味之義可申上候、他方参り候者ニ而も外江相懸  
る義無之節者、得と遂吟味可申上候、手負殺害人等有之節茂、右之趣に  
准し他江相跨候得者、早速檢使之義可申上候、

一、在番組留守ニて變事有之節者、父子勤候面々者致在府父子之内、頭よ  
り遂吟味、諸事取斗可申候、左候得者月番之者より一と通り之御届斗可  
致候事、

一、他役相跨變事有之節者、早速組頭或ハ残役差越、遂吟味させ候段、其  
支配とも江手紙を以申遣、右返答不承候共、組頭或ハ残役其變事有之候  
宅江差遣可申候、

一、大御番老統一手切変事有之節者、先ツ一と通り御届之義者一日一日半之内申上置候得者、遂吟味相決候上之義者同役中寄合申談、委細之義者猶又追而御届可申上候、

但与力・同心変事有之節も、右ニ准し取斗可申候事、

右之通之書付、御番頭衆被相渡候ニ付、左之通り伺書差出、

覚

一、当御番夜中御番衆変事御座候節ハ、帰番之私共江申聞次第、其宅江罷越吟味可申上候、万一私共兩人病氣之節者、宅吟味如何可仕候哉、帰番御番衆<sup>之内</sup>■<sup>之内</sup>老<sup>其</sup>人、宅江遣し吟味為仕、翌朝其宅江明番■<sup>之</sup>組頭罷越、猶又吟味仕申上候様可仕候哉、左候而者夜中吟味仕候、御届者難仕奉存候、其節者如何可仕候哉、

附札

帰番御番衆之内兩人申合、其宅江遣し為致吟味、翌朝御門明キ、同役中老人退出、其宅江直ニ御越、猶又吟味有之可被申聞候、併御番所老人に難成節者、代り合之上早々其宅江御越可有之候、

一、夜中吟味之趣、先日一と通り右兩人之御番衆より我等方江、直ニ御申聞候様御申可有之候、無左候而者手違ニ相成候之間、先承り置度候、

一、当御番日、昼夜とも御番衆変事御座候之節、私共兩人病氣罷在候而も、平臥仕候程之義無御座、月代難仕引込罷在候様成義ニ御座候而、御番ニ罷出候とも、長髪ニ而宅吟味罷越候様可仕哉、或者忌中ニて罷在之分者、吟味罷越可申候哉、

但病氣・忌中ニ而宅吟味罷越候得者、其節之兩人之外方差出候書付者、宛所外同役宛所ニ而書付請取可申候哉、

附

書面之趣之病体ニ候得者、御番ニ罷出候共、長髪ニ而右宅江御越吟味可有之候、尤忌中茂御越可有之候、当人并其外方差出候書付宛所も、右御越之方之宛所にて御取斗可有之候、

一、当御番日昼之内変事者、泊り罷出候者江申聞ケ次第、宅吟味罷越候様可仕候、左候而者泊り罷出候事難相成儀も可有御座候、左様成節者御番ニ罷出申聞敷候哉、

附札

泊り出番罷成越候得者、朝方被成御勤候同役中之内ニ而、右代り御勤可有之候、

右之通奉窺候、以上、

戌十一月

組頭四名

『三十二』取人・代人願順立之事

一、寛政二戊年三月六日、泊所ニて堀田撰津守殿、尾崎多宮・黒川与市江御達左之通り、

『・』残役 『・』御破損奉行 『・』御茶壺差添臨時

『・』御用相勤候者 『・』知行所皆 『・』無類之上

『・』知行所半毛以上損毛之者

右之分高引合ニ不構、順立之通相極可申候事、

『・』但取人とも可相極候

『・』大坂御金奉行 『・』同御藏奉行

『・』二条御藏奉行 『・』米払

右之分者残候者之高ト引合、式三俵迄之通ニ相成候分者、代人ニ相極可申候、其余者過ニ相成候者、惣人数高二而改メ勘弁取斗可申候、尤取人とも右之心得ニ而可相極候、

但右在役相勤候者之内、類焼又者知行所半毛以上之損毛之者、高引合ニ不構、此内之筆頭ニ相極可申候、

居宅不残類焼、知行所半毛以上損毛、

右之分前条在役同前取斗可申候事、

一、風雨・水附・地震等ニて家作建直候程之者者、其節之時宜ニ寄、前条

在役ニ准し相極可申事、

『・』二条御弓奉行 『・』同御鉄炮奉行

『・』同御具足奉行 『・』同御藏奉行仮役

『・』大坂御藏目付 『・』同御塩噌奉行

『・』同宿割

右之分者地願之上順立、地願同様高引合相極可申候事、

但取人者並高二て可相極候、

『・』地願之者 『・』取手返之者

『・』取手返在番三度続キ候者、

右之分者本人之高ニ引合候者を代人ニ相極、少し二而も高増ニ候者除之、

若順書之内引合候者無之候ハ、可致差人候、

但差人者並高二て相極可申候事、

『二十三』先組江代人内問合左之通

『日向半切 覚』

何之誰

何之誰

一、右之面々来夏御組江代人ニ罷登度相願候而も、御故障無御座候哉、御問合申候、以上、

何 十一月幾日

月番同役

何之誰

本組江代人願之振合左之通、

日向半切

書付

同役四名

覚

高何程

何之誰

高何程

何之誰

右之面々来夏二条御番高木主水正殿御組江取人・代人奉願候、

高何程

何之誰

高何程

何之誰

右之面々来夏二条御番市橋下總守殿御組江御取人・代人奉願候、

右何人之面々、勝手不如意ニ付、御奉公為取続、来夏二条御番御組

江罷登申度旨奉願候ニ付、為御差登被成下候様仕度奉存候、以上、

申 十二月

同役四人

『二十四』先格并例書覚

一、宮重作十郎弟半藏義、先達而清水中納言殿徒頭京極三郎兵衛方江養子差遣、其後及離縁十一ケ年相立、小普請組前田安房守支配山下与市高式百石之処江再縁取組、伺書差出候ニ付、当組江茂届書差出候処、岡部出羽守殿御礼之節不相成旨、作十郎江申達候之様被仰聞候、右者一旦御目見以下江養子ニ相成候間、御目見以上江差遣候事不相成旨、尤以下江遣候儀者勝手次第之旨被仰聞候、

一、明和九辰年大坂在番御暇之節、石川阿波守・永井伊予守両組中御番衆、七月朔日羽目之間ニ而、御目見有之、其節詰合組大久保主膳正組与頭三浦半左衛門、右御番衆差引いたし候、

但近來者御番衆御暇歸府御礼共、詰番組頭ニて差引之事、

『廿五』一、安永二巳年六月、大坂在番先ニ而石川阿波守組御番衆柳原縫殿助召仕

中間五助、米倉丹後守組方代人坂川吉五郎召仕中間何平江手疵為負、御吟味之上双方町奉行江相渡、何平義手疵養生之上、七月町奉行江相渡候事、

『廿六』一、安永三午年稻垣長門守二条在番之節、部屋住之御番衆父病死、未跡目不被 仰付前無之候得共、罷登候様仮御証文ニて取越米請取候由、

『廿七』一、安永三午年、二条在番森川紀伊守組与米倉丹後守組と替有之候、右者丹後守病氣ニ付、在番難登、大坂在番紀伊守組与組替被 仰付候、

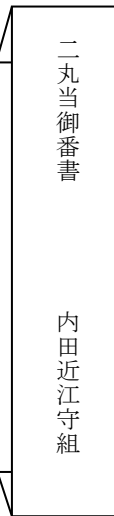
但近年此例度々有之候、右組替之節ハ二条在番ニ有之候得者、大坂在番先登り番頭と組替ニ相成ル、大坂之者者翌年二条登り先番頭と組替相成候由、

『廿八』、安永三年森川紀伊守組与頭杉浦藤右衛門病氣二付、二条在番日延致

し、右日延之内四月廿四日病氣差重跡目願致し度候旨、月番石川阿波守(總恒)殿御取斗被成候、是迄右先格者無之候、右阿波守殿御組之与頭取斗申候、尤残役祖父江孫太夫世話二而判元見届之節、阿波守殿組之与頭兩人孫太夫立合申候、御番頭御出無之候、右者実子有之候故二歟、

『廿九』、安政三年五月廿二日夜、小堀備中守組方松平石見守組江預り志村左太郎召仕中間友平、右左太郎屋鋪貸置申候西丸奥坊主野村盛庵召仕下女と相对死致候、友平者存命二て療治致候得者慥罷成、女者即死二て友平町奉行江請取、女者取捨二相成候、

当御番書認方并諸振合



『二右者』

御本丸御目付衆江  
差出候当御番書也、

日向半切、上包美濃紙、  
半枚折掛ケ、

- 一、右当御番書相認め、早出御同役中持参、御帳懸り御番衆を以与力御帳箱持参之節相渡候事、
- 一、御番頭御病氣之節者、助御番頭之儀申来ル当日、御番所江助御番頭方御紙上二て申来、当御番認方左之内二記有之、可見合事、

『日向半切』

二九当御番

番頭 内田近江守(正肥)

組頭 何之誰

同 何之誰

同 何之誰

同 何之誰

何月幾日

煩

同

何之誰

御目付中

二九当御番

煩 番頭 何之誰

助 番頭 何之誰

組頭 何之誰

同 何之誰

同 何之誰

同 何之誰

何月幾日

御目付中

- 一、御番頭御引之節者、泊明之同役方用方まで手紙二て、御番所相替義無御座候段申達候事、

一、忌中等も右同断、名之上二忌と認申候、

一、組頭病氣之節者、名之上江右之通煩と認、右之者者番頭二而も末之順

二認候事、

一、御番頭明居候節者、認方左之通り、



上包

二九当御番書

明キ組

二九当御番

明キ組

番頭 何之何守

組頭 何之誰

同 何之誰

同 何之誰

同 何之誰

何月幾日

御目付中

二九当御番  
番頭 松平石見守(兼總)  
助小堀備中守相勤可申出俄煩二付、  
(政務)

何月幾日

御目付中

右者安政三申年七月廿五日、松平石見守当御番之節、石見守煩二付小堀備中守助可相勤候出俄病氣二付、助高木主水正被勤候節、当御番書差出候出、御目付衆方談二而右之通認メ差出候よし、

二九当御番

番頭 白須甲斐守(政權)  
組頭 大屋甚左衛門  
同 居宅水附休  
同 原三郎兵衛  
同 小幡次郎八  
同 土井七郎左衛門  
立花出雲守組与頭(種岡)  
助 福王幸之進

何八月廿五日  
御目付中

西九当御番

番頭 堀田豊前守(正數)  
組頭 窪田太郎次郎  
同 米津梅干助  
同 佐々半左衛門  
同 大久保鉄十郎  
六月廿三日組頭被仰付引渡未相濟候二付未罷出

何六月廿三日

御目付中

西九当御番  
番頭 堀田豊前守  
番頭 居宅類焼二付休  
番頭 本多肥後守(忠可)  
介 同  
組頭 同  
同 同  
同 同

何七月幾日

御目付中

二九当御番

番頭 松平下野守(康道)  
番頭 松平但馬守(昌睦)  
組頭 同  
同 同  
同 同  
同 同  
此廿四日大御番頭被仰付組中引渡以前二付出番不仕  
勘(助九)

子十二月廿五日  
御目付中

西九当御番

番頭 松平下野守  
組頭 宮重伝六郎  
同 同  
同 同  
同 小長谷十郎右衛門  
今十八日組頭被仰付引渡未相濟候二付不罷出候

何月幾日

御目付中

西丸当御番

番頭 松平下野守

御十二日於駒場野  
被遊候二付、上覽

番頭 松平下野守

明十六日於駒場野  
鹿狩二付、上覽被遊  
候二付、夕七時方介

組頭 田沼能登守  
(意致)

右同断

組頭 坪内久四郎

右同断

同 久留源三郎

右同断

同 竹田藤三郎

右同断

同 金田小兵衛

西丸当御番

今十六日駒場野江  
御成二付、菅沼織部  
正(定助)、右御場所江  
罷出候間、組中共助

組頭 新庄駿河守  
(直親)

組頭 小幡次郎八

同 三浦藤左衛門

同 波多野左之助

同 小田切主計

卯二月十六日

御目付中

西丸当御番

今五日小金御鹿狩二付、  
菅沼織部正組共右場所江  
罷出候間、組中共助

番頭 新庄駿河守

同 三浦藤左衛門

同 波多野左之助

同 小田切主計

卯三月五日

御目付中

二丸当御番

番頭 加納大和守  
(久致)

組頭 渥美源太郎

大的上覽、射手為差  
引吹上御庭江被出、上  
覽相濟候迄出番不仕候

同 小西九左衛門

煩 同 石野弥兵衛

産穢 同 小宮山八五郎

太田志摩守組与頭  
(實同)

大的上覽相濟候迄

助 長田四郎三郎

何三月廿四日

御目付中

一、戊四月十四日、近江守殿俄煩之節左之通、  
(内田正肥)

矢部卯之吉様

戸田八五郎様

内田近江守

以手紙申入候、然者我等積氣不相勝候二付、今日日本御番俄助永井  
(直誠)  
大和守殿江相勤候之条、此段各為御心得申入候、以上、

四月十四日

一、又候左之通、

兩人様

内田近江守

以手紙申入候、然者我等不快二付、本御番俄助永井大和守殿可相  
勤候处、是又煩二付、森川下総守殿相勤候条、各為御心得申入候、  
以上、

四月十四日

一、助御番頭方左之通、

内田近江守殿

御組頭中

森川下総守

文化九申年拾番組之例

以手紙申入候、然者今日本御番内田近江守殿病氣二付、俄助我等相勤申候、御用茂候得者、御申聞可有之候、以上、

四月十四日

一、当御番書引替被差出候由左之通、

二丸当御番

煩 番頭 内田近江守

助俄煩 番頭 永井大和守

助 番頭 森川下総守

組頭 竹内十兵衛

同 三輪十左衛門

同 矢部卯之吉

同 戸田八五郎

戊 四月十四日

御目付中

西丸当御番

番頭 小笠原近江守(貞温)

組頭 黒川与市

同 諸星明之丞

同 徳力金十郎

同 大河内善左衛門

何 五月十六日

御目付中

養父方  
從弟女忌

二丸当御番書助

番頭明組

建部内匠頭

二丸当御番

明々組

番頭 建部内匠頭(政賢)

何 八月廿一日

御目付中

二丸当御番

服穢 番頭 石川阿波守(総恒)

番頭 高木主水正

組頭 萩原源右衛門

同 玉虫十左衛門

同 宮重伝六郎

同 大久保九兵衛

午 五月十七日

御目付中

二丸当御番

番頭 堀田豊前守

組頭 米津梅千之助

同 佐々半左衛門

同 窪田太郎次郎

同 明々老人

酉 六月十七日

御目付中

元家来御仕置相済  
遠慮伺中二付 御番  
不罷出候、

二丸当御番

番頭 小笠原近江守

組頭 諸星明之丞

同 蜂屋源八郎

同 徳力金十郎

同 黒川与市

屋舖御用地二相成内  
裏被下置候二付休、

組頭 諸星明之丞  
同 徳力金十郎  
同 宮重作十郎  
同 牛輿新五左衛門

何九月三日  
御目付中

西丸当御番

番頭 小笠原近江守

組頭

同

同

蜂谷源八郎

居宅類焼二付  
休

何七月廿六日  
御目付中

西丸当御番

番頭 小笠原近江守

組頭 諸星明之丞

同 蜂屋源八郎

組頭 黒川与市

同 徳力金十郎

屋舖御用地二相成  
代地被下候二付休  
養方伯母忌

子九月廿七日  
御目付中

西丸当御番

番頭 建部内匠頭

組頭 山岡半右衛門

同 鈴木清左衛門

同

小山新三郎

同 石野弥兵衛

大塚卜名乗候处、奉願相改申候、

何八月廿二日  
御目付中

西丸当御番

番頭 菅沼織部正

煩

卯三月廿九日  
御目付中

二丸当御番

番頭 内藤甲斐守  
(正範)

組頭 大岡十郎兵衛

同 宇佐美助右衛門

同 安藤惣右衛門

母看病 同 岡部四郎兵衛

何七月六日  
御目付中

文化九申年七月八日当御番左之通、  
但文化七午年五月十七日高木主水正殿老母看病之例有之、

二丸当御番

父看病 番頭 内田近江守

助 同 山口周防守

組頭 竹内十兵衛

同 三輪十左衛門

同 戸田庄左衛門

煩 同 矢部卯之吉

申十月八日  
御目付中

助 番頭 松平下総守  
(野力・康道)

組頭 佐原勘右衛門

煩 同 岡部源八郎

煩 同 田沢久左衛門

煩 同 森川助左衛門

助 小笠原近江守組与頭  
(貞温)

大河内善左衛門

二九当御番  
今八日八貫野江為鹿狩  
番頭 長谷部丹後守(勝富)  
建部内匠頭罷越候二付助

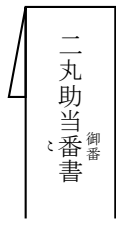
菅沼伊賀守組与頭  
右同断、御鹿狩建部  
内匠頭組中罷越候二付  
菅沼伊賀守組中助  
諸星明之丞  
德力金十郎  
同 同  
宮重作十郎  
同 同  
牛奥新五右衛門

西  
二月六日

御目付中

寛政十三酉年二月六日、建部内匠頭殿当御番之處、為鹿狩武州八貫野江  
罷越候二付、助御番頭長谷川丹後守殿二而、伊賀守殿組中助相勤候間、  
当御番書左之通相認差出、

但菅沼伊賀守殿二者詰番之助被相勤候二付、右助代長谷川丹後守殿  
相勤被申候事、  
上包美濃紙折掛、



菅沼伊賀守組

右二付、当御番判形改帳、左之通、  
人数五拾式人之内、勤三拾四人、  
昼御番十七人、夕御番十七人、相手代、

内

- 昼夜廻 六人 右同断
- 浅草御蔵奉行老人 右同断
- 二条代人 五人 右同断
- 大坂代人 式人 右同断
- 座織 三人 阿部新右衛門  
大久保彦太夫  
柳原
- 煩 壹人 花井

右之通紛無御座候、以上、

同年十二月六日

建部匠頭組中為鹿狩罷越候  
二付 菅沼伊賀守組中助

同七日朝御番拾人

諸徳宮牛

- 牛奥新五左衛門 判
- 宮重作十郎 判
- 德力金十郎 判
- 諸星明之丞 判
- 御助 長谷川丹後守殿

『三十一』 他組方助之事

一、勤人数組頭式人、御番衆拾八人方不足之節并俄助共前々方詰御番組方  
助相立候處、病氣差合等二而人数不足之節者、詰御番組方助相定、俄助  
ハ対組方助相立候様、寛政三亥年三月十八日丹羽長門守殿宅御番頭寄合  
之節被御申合候間、以来者右之通相心得候様、酒井隱岐守殿右組之与頭  
江御達有之、其後外組二而茂右同様御達有之候由、但当組ハ大坂在番中  
之義故、御番頭方右達無之候間、一向存不申罷下り候間、右之趣承り候  
間、右之趣二相心得罷在候處、同年十二月組々方頭相談之上、右助立之儀、  
組々ヨリ御番頭江伺書差出候處、翌子正月右伺書江附紙二而去年御達之  
趣者相止メ、以来者前々之通人数不足之節并俄助御番衆組頭とも詰御番  
組方助相勤候積り被御申合候間、其旨可相心得之御達有之候、依之當時  
者前々之通病氣差合二而、人数不足之節并詰御番組方助相立候積り相心  
得罷在候事、

但組頭四人之内、三人之病氣差合等二而老人勤二相成候節者、右老  
人勤之組方御番頭江助之儀申達候共、其節御番頭方詰御番組御番頭  
ヨリ、其組月番之組頭江助之儀被申達候、尤右老人勤組頭方も詰御  
番組之月番之組頭江、手紙二而助出勤之組頭性名承之、当御番書相  
認候、勿論本組与頭老人・助組頭老人都合式人二而御番詰切相勤候  
事、右体之節当御番認方、寛政二戌年八月廿五日、白須甲斐守殿当  
御番之節、例書左之通、

寛政四子年六月十八日、本多肥後守殿組当御番之節、当御番書寛伝五郎

水休之儀、是迄之通相認め差遣候処、暮時頃御本丸御目付中川勘三郎ヨリ寛伝五郎水休日数等書入遣候様申越候二付、当番書被相達候間、左之通認遣候事、

西丸当御番

- 番頭 本多肥後守(忠可)
- 組頭 小川喜三郎(末之)
- 同 小尾弥左衛門
- 同 中島卯右衛門
- 同 寛伝五郎

子 六月十八日

定式明休六月十五日方  
同廿五日迄日数十五日水休、

御目付中

一、御番衆拾七人以下二相成候節者、其組月番之組頭ヨリ御番頭江助之儀申達候、其節御番頭方詰御番組御番頭江助之儀被御申達候得とも、右詰御番組御番頭方其組之■番組頭江助之儀被御申達候、尤助取候組方詰番組月番之組頭江、助罷越候御番衆之姓名等承合可申候事、

〔丑〕一、俄助之儀者、何茂差掛る事二而例区々二候得共、近例左二書記置候、

一、寛政三亥年三月十七日、近藤石見守殿組当番之節、右組野間藤右衛門儀、家事不取締二付小普請入被 仰付候旨鳥居丹波守殿御書付ヲ以被仰渡候段、近藤石見守殿於宅御同人被申渡候、依之石見守殿并右組与頭差扣之程奉伺候二付、俄助対組酒井隱岐守殿被相勤候間、右組与頭兩人助相勤候様隱岐守殿被御申達候二付、夕七時過隱岐守殿組与頭鈴木清左衛門・石川太郎右衛門出番石見守殿組与頭与代り合申候、但隱岐守殿清左衛門・太郎右衛門出番一遅刻之ため御門断被申達置候旨、被申聞候由、然ル処御仕切前代り合相濟申候、

一、隱岐守殿出番御帳改之節、清左衛門未罷出候之間、太郎右衛門老人罷出申候、

一、清左衛門葛籠西丸追手御門外迄来り候之段、御夜詰過御門繼二而申来

候二付、御門断之儀御目付□□吉右衛門江太郎右衛門懸合候処、先格相尋申候得共、去年来右似寄之先格茂無之段申達候処、向方二而も評義有之候上、御番頭方断可然旨二付、其段多門隱岐守殿江申達相濟、五時過取入申候、但惣而断之義、御番衆之義者組頭方断、組頭之儀者御番頭御出番後二候得者、御番頭方断可然と成瀬吉右衛門申聞候、

一、御本丸江之当御番書引替之義、与力相招可申候処、御夜詰過二相成候間、御玄関明不申候二付、御長屋御門御断之義、御目付中被申達断相濟候上、与力武藤吉五郎を組頭部屋江相招、御本丸江之当御番書相渡候、但 御本丸江之御門断者隱岐守殿方御断有之候、西丸当番書者御目付江差出引替候、

右当御番書左之通り、

差扣奉伺候二付  
退番仕候

介

近藤石見守

酒井隱岐守

若林長十郎

深尾八太夫

大岡十郎兵衛

坂川吉太夫

右同断

三月十七日

当御番

酒井隱岐守組与頭

助 鈴木清左衛門

石川太郎右衛門

西丸当御番

御番頭

近藤石見守

酒井隱岐守

若林長十郎

深尾八太夫

大岡十郎兵衛

坂川吉太夫

差扣奉伺候二付  
退番仕候

介

組頭

同

同

同

右同断

煩 同

坂川吉太夫

三月<sup>(十七日)</sup>□□□□

御目付中

一、寛政三亥年三月廿八日、白須甲斐守殿組当御番日二候処、前日廿七日甲斐守殿 御目通「差」<sup>(貳紙)</sup>控被 仰付、且与頭石原三郎兵衛・大岡甚左衛門御役柄不相応二付、小普請入差扣被 仰付、依之甲斐守殿并右組与頭差扣之程奉伺候処、未夕御差凶無之候二付、俄助対組遠藤備前守殿被相勤之間、右組与頭相勤候様、備前守殿明ヶ御番二付、御多門江明ヶ番組頭部屋江被申越候二付、明ヶ番方直々助御番相勤申候、勤方本御番之通相替義無之候、

一、御本丸・西丸江之当御番書左之通、差出方は又本御番之節之通り、

差扣奉伺候二付  
出番不仕候、

介

右同断

明キ式人

三浦藤左衛門

小幡次郎八

遠藤備前守

白須甲斐守

三月廿八日

当御番

遠藤備前守組与頭

坪内久四郎

久留源三郎

伴野半助

竹田六郎右衛門

煩

西丸当御番

差扣奉伺候二付  
出番不仕候、

番頭

白須甲斐守

番頭

介

組頭

遠藤備前守

小幡次郎八

酒井隠岐守組与頭

鈴木清左衛門

石川太郎右衛門

右同断

三浦藤左衛門

明キ式人

遠藤備前守組与頭

坪内久四郎

久留源三郎

伴野半助

竹田六郎右衛門

何三月十八日

御目付中

『三十三』御番頭被 仰付候節、外御番頭同道二而御番所江被相越候事

一、御番頭被 仰付候節、御同役同道二而御越之節、御帳改之通而御番所江御番衆着座、組頭兩人殿上之間御板縁二出迎会積有之、御番頭虎之間江着座之事、御同役者時候挨拶御役被 仰付候、御番頭江者御怡申上、御番衆江御挨拶有之候得者、取合せ畢而組頭御番衆部屋御老覽有之候哉与申達、御一覽可有之旨二候得者、致案内虎之間渡口御番衆部屋懸御目二右相濟、獅子之間椽頬送り申候、

但御役被 仰付候御番頭麻上下、御同道之御番頭平服、尤御番所組頭兩人、御番衆拾人とも平服之事、

『三十四』御番衆急病人有之候節之事

一、御書院方二而者御番衆急病人有之、駕籠にて為致退散候節、番頭詰合無之候得者、組頭方御目付江掛合為致退出候由、御書院番組頭伝達有之候、右之通可相心得哉之旨、戊四月堀田撰津守殿江相伺候処、伺之通たるへき旨、附紙にて御達有之候、依之右之通相心得罷在候、然ル処荒増成事二而候間、組々相談之上寛政三亥年十二月、松平但馬守組与頭御同人江、左之通心得方書付懸御目候処、右書面之通心得之様被御申達候、依之組々一同、以来左之通相心得申候、

一、当御番之節、御番衆之内急病人有之候共、其段御目(付江カ)□□致面談、御番衆何之誰御番出勤罷在候処、病氣二付御医師江為見申度候間其段御申達、御医師参り候ハ、組頭立合病体為見大病二候得者、為致退出、養生可然旨申聞候者、御医師方も御目付江右病体申達、御医師同道いたし躰躑之間江罷越し御目付江達、何之誰大病二付退出為致候間、駕籠相廻し候様□□□断、且夜中二候ハ、差添候相番式人之御門断之義可申談候、若書付差出候様申聞候ハ、左之通り、

何之誰組  
何之誰

右誰義今日当御番致出番罷在候処、大病二付為致退出度之間、駕籠相廻候様并御門々御断可被下候、尤相番両人差添為退出候、以上、

何何月幾日

御目付中

何之誰

一、夜中二候者、右以来御番衆部屋明り断之義、御目付江口上二而断可申遣候、若書付差出候様申聞候者、左之通り書付可差出候、

御番衆之内病人有之、部屋江引取為致養生候間、御番衆部屋明り之義御断可被下候、以上、

何之誰組与頭  
何之誰

何何月幾日

御目付中

何之誰

右明り之義、其節組頭より可申達旨、寛政三亥年十二月、御目付池田雅次郎江松平但馬守殿(昌勝)方断相濟候、

一、右病人御番頭泊御出番以前二候者、手紙にて誰江為見候処、大病之由申聞候、依之退出為致養生度旨、御目付何之誰江申達候処、駕籠持人とも相廻り候二付、御番衆之内何之誰差添、只今致退出候、尚又其旨御番頭御宅江可申達候、

一、御番頭泊り出番後二候得者、駕籠并御門断之義、御目付江申達候段、御多門御番頭江申達、御門断相濟為致退出候者、猶又其旨御番頭江可申達候事、

一、昼夜とも病人退出相濟候段、御目付江可申達候事、

『三十五』組頭宅近火之節為代罷出候事

一、御番衆部屋病人用向相濟候者、明り消し可申候、尤其節者坊主衆を以火之番江申達、火之番立合明り消可申候事、

一、右駕籠かき候二付、新組之者名前・宿所承置、追而可致挨拶候事、

一、組頭宅近火之節、夜中大手江罷越、御門繼を以御届申方、二丸勤之節御達有之候通、可相心得旨、伺書江附紙にて御達有之候、右二丸勤之節御達申候者、寛政三亥年二月御番衆御申合之由、堀田撰津守殿書付御達有之候、左之通り、

一、出火之節組頭衆近火、又者風筋悪鋪差戻候節、昼之内二候ハ、代り之人被出次第差戻可申候、暮六時方過候ハ、代り二被参候組頭衆より御門繼を以て出届、番頭江被申聞次第、御城入為致差戻申候、

一、右代り者戻番組頭衆出可被申候、若病人等多く候節、又者戻り番之組頭江茂屋敷辺風並悪敷出火之節者、対組与頭四人之内為代申合可被罷出候、

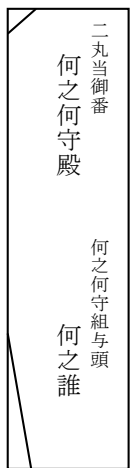
但昼六時過二代り被出候者、大手敷桜田か迄被罷出、其段早々

二丸番頭迄御門繼を以可被申聞候、

右者寛政二戌年正月廿七日、岡部出羽守殿宅にて同役寄合申合候、

案詞  
何之誰近所出火、風筋悪敷出火、二付、右為代私義唯今大手敷、桜田敷迄家来何人召連罷出申候、御門二入御断被成可被下候、以上、

旅  
封之



右之通当時相心得罷在候、但召連候供人数者侍(老)□□(草)□□(取)□□(巻)□□人・挟箱持老人、都合三人ニ□宜く候、

『三十六』明ヶ番之節葛籠持人朝五時過來り候之事

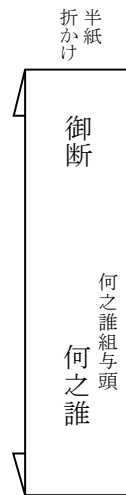
一、組頭・御番衆共明番之節、葛籠持人途中二而病氣等二て、朝五時過二來候節者、代り合前二候者朝番組頭代り合、後二候者当番組頭より御目付江坊主巻を以御門断之義申達、所相濟次第可差出候、若書付を以断可申様申聞候者、左之通、

何之誰組  
何之誰

右何之誰今朝明ヶ番二候処、葛籠持人途中二て病氣及遅刻之間、御門々無滞出候様御断可被下候、以上、

何月幾日  
何之誰組与頭  
何之誰

当御番  
御目付中



『三十七』御本丸江参り候葛籠間違二而西丸江來候節之事

寛政三亥年四月廿三日、近藤石見守殿組当御番之節、未刻頃御番衆部屋江御小性組大久保豊前守組堀仁十郎葛籠持來り差置、持人者帰候之由、御番衆申聞候二付、組頭深尾八太夫・大岡十郎兵衛より御小性組与頭高林弥十郎江之手紙、御本丸御小性組与頭部屋江為持遣候処、弥十郎方返書差越候二付、御目付成瀬安次郎江御門断書付以申置候処、即刻御門断相濟候旨、坊主衆ヲ以申越候間、其段御番衆江申達、其節葛籠持人迄宰領とも、御本丸方承候間、右葛籠宰領御番衆方相渡差出候、尤右之趣御多門江差越候節、石見守殿江申達候、右文通并御門断左之通、

高橋弥十郎様

深尾八太夫  
大岡十郎兵衛

以手紙啓上仕候、然者大久保豊前守殿御組堀仁十郎、葛籠西丸大御番部屋江持參致し差置、持人罷帰候由、御番衆方申聞候二付御掛

合申候、右之通相違茂無御座候哉、御報次第西丸御目付衆江御門断之儀可申達候間、葛籠請取人被差越候様奉存候、右之趣可得貴意、如斯御座候、以上、

四月廿三日

深尾八太夫様  
大岡十郎兵衛様

高林弥十郎

御手紙致拜見候、然者相番堀仁十郎葛籠ヲ西丸大御番方御部屋江持人持參差置、持人者罷帰候由、御番方被御申越候由、依之御掛合之趣致承知候、右者仁十郎葛籠二相違無御座候、則請取人差遣候様申渡候、乍御世話御門断之儀御目付江被仰達、宜く御取斗可被下候、以上、

四月十三日

御小性組  
大久保豊前守組  
堀仁十郎

右仁十郎葛籠持人心得違二而、大御番方部屋江持來候二付、豊前守組与頭高林弥十郎江及掛合候処、右之通無相違旨申越候、依之右葛籠御本丸江差遣候二付、御門々無滞出候様、御断可被下候、以上、

近藤石見守組与頭

四月廿三日

大岡十郎兵衛  
深尾八太夫

御目付中

『三十八』幸田左太郎家來 御城中二而俄病氣一件

一、寛政四子年八月廿四日、八番組御番衆幸田左太郎請取方江出番之節供二召連申候中間老入、中仕切御門二而急病氣二而大病二相成、御門可罷出体無之候二付、駕籠二而差出申度旨、并中仕切御門・大手御門出断等之儀、御目付深津主水江窪田太郎次郎申達候処、即刻駕籠参り御門断相濟候二付、差出可申旨、部屋裏口迄御小人目付相越申聞候間、其段左太

郎申達、左太郎侍差添、其外侍老人・中間式人駕籠江差添罷出候、

當組幸田左太郎供二召連申候中間老人急大病二相成候二付、御門可罷出体無御座候間、駕籠二而差出申度奉存候、依之駕籠為御差出、中仕切御門・大手御門出御断被仰達可被下候、以上、

堀田(正敷)前守組互頭

窪田太郎次郎

八月廿四日

大久保鉄十郎

御目付中

『三十九』寛政九巳年閏七月当御番之節、御番衆被為 召退出御門断一件

一、閏七月十六日、当御番田沢久左衛門泊方之処、相組曾根幸太郎明十七日四時御城江罷出候様可申渡旨、戸田采女(氏教)正殿御書付ヲ以被仰渡候、依之明朝五時過麻上下着登 城、蘇鉄之間二控罷在候様、幸太郎江可申達旨、織部(會前)正殿病氣二付、為差引市橋下総守殿召罷出候由、被御申聞候、織部正殿紙面、久左衛門出番留守江十六日申ノ刻出来二付、留守方早速 御城迄差越候処、最早途中二而六時過二相成候間、桔梗御門張番江、使之者持参御用之儀久左衛門江番頭菅沼織部正殿方被申越候状箱二候間、二丸大御番頭部屋迄相届候様、御門繼ヲ以相達呉候様申入候処、右当人ヨリ使之者名前承り、状箱請取段々差送り、戌刻頃二丸部屋迄相届候二付、幸太郎江織部正殿御紙面之趣ヲ以申達、織部正殿迄為御請参候二付、夜中退出為致候旨、御門出断之儀、且幸太郎召連候供人之儀等、助御番頭新庄駿河守殿江申達候処、彼是用人共掛合手間取、丑刻頃断相濟、供人茂被差越候、八時過幸太郎退出相濟候、御請之儀幸太郎帰宅之上、罷越候而者余り遅刻可相成、其上明朝早々罷出候儀故、直二御請罷出可然旨申達候、

御用向

田沢久左衛門殿

菅沼織部正

二丸  
大御番頭部屋江御届可被下候、

右状箱之儀、御夜詰過二相成候得者、状箱不相成、封状二而御門下通用之事之由、兼及承候之間、其心得二而封状二致し、若御夜詰後二相成状箱者不相成与申候者、出し封状二而入候様、使之者江申付差越候処、状箱之儘請取差送り相届申候、

田沢久左衛門様 菅沼織部正

以手紙申入候、然者曾根幸太郎、明十七日四時 御城江罷出候様可申渡旨、戸田采女(氏教)正殿御書付ヲ以被仰渡候、依之明朝五時過麻上下着用登 城、蘇鉄之間二扣罷在候様、幸太郎江御申達可有之候、尤我等儀病氣二付、為差引市橋下総守殿被罷出候筈二有之候、以上、  
壬七月十六日

猶以少々之不快之義者押候而茂罷出可然候、尤為御請今日中自宅江被相越候様、是又御申達可有之候、且外御同役中江茂者以別紙為御心得申達候、以上、

菅沼織部正様 田沢久左衛門

御手翰拝見仕候、然者曾根幸太郎明十七日四時 御城江罷出候様、可被仰渡旨、戸田采女正殿以御書付被仰渡候由、依之明朝五時過麻上下着登 城、蘇鉄之間二控罷在候様、幸太郎江可申達旨、尤貴方様御病氣二付、為御差引市橋下総守殿被成御出候筈二御座候由被仰下候、御紙上之趣承知仕候、以上、  
壬七月十七日

猶々少々不快之分者、押候而茂罷出可然旨、尤為御請今日中尊宅江罷出候様、是又可申達旨、且又外同役共江者以御別紙為御心得御達被成下候由、御端書之趣是又承知仕候、以上、

右返事者、幸太郎為御請罷越候節、用人中迄相届達被吳候様申談差遣、

新庄駿河守殿

御用人中

田沢久左衛門

森川助左衛門

以手紙致啓上候、然者曾根幸太郎明十七日四時御城江罷出候様可申渡旨、戸田采女正殿以御書付被仰渡候由、依之明五時麻上下着登城、蘇鉄之間ニ控可罷在旨、幸太郎江可申達候段、唯今菅沼織部正殿方被御申聞候、尤為御請今日中織部正殿江幸太郎義參上可致旨、是又被御申聞候、依之幸太郎只今退出為致度候二付、御門之出御断之儀、被仰達可被下候、御断相濟候ハ、被仰下候様致度奉存候、右之段宜御申上可被下候、以上、  
壬七月十六日

猶々幸太郎義退出之節、召連候供人之儀借用仕度御座候間、是又宜御取斗可被下候、以上、

田沢久左衛門様  
森川助左衛門様

御用人中

加藤次郎右衛門

以手紙致啓上候、然者曾根幸太郎様唯今方御退出二付、被召連候供人之儀、被仰遣承知仕候、御挟箱（貼懸）「持御」座候哉、左候ハ、御供三人御貸可被申候、御挟箱無之候ハ、兩人御用立可被申候、御城中之儀余慶之人數無之候間、此段御伺否早々被仰遣被下候様致度奉存候、且又御用御召二而御退出之御例茂御座候哉、為心得相同度候間、將又御門断等之儀茂被申達相濟候ハ、御案内可被下候、此段宜御申上可被成候、以上、

壬七月十六日

尚々曾根幸太郎様御屋敷所書御書付被下候様仕度奉存候、以上、

加藤次郎右衛門様

田沢久左衛門  
森川助左衛門

御手紙致拝見候、然者曾根幸太郎唯今方退出二付、召連候供人之儀御掛合申候処、挟箱持候得者、供人三人無之候ハ、兩人御貸可被下候由、御城中之儀御余慶之御人數無之候間、此段被仰聞候由、早々否可得御意旨、御紙面之趣致承知候、然ル処、挟箱者無御座候間、御人兩人御貸被下候様致度旨幸太郎申聞候之間、召兩人御貸不被下候、且又御用召二而退出近例茂有之候ハ、為御心得申上候様、被仰聞致承知候、然ル処御用召二而夜中退出仕候近例茂無御座候得共、菅沼織部正殿江為御請今晚中罷出候様、御申聞候間、御用之儀二付唯今方退出為仕度奉存候、差掛り候儀、早々右之趣申上候儀ニ御座候、此段宜御取斗御申上可被下候、將又御門御断り之儀相濟候ハ、御案内可被成候由、是又致承知候、以上、  
壬七月十六日

猶以曾根幸太郎宿所御承知被成度旨、本所南割下水御藏後二御座候、以上、

田沢  
森川

新庄駿河守

御手紙令披見候、然者菅沼織部正殿（定前）曾根幸太郎明十七日四時、御城江罷出候様、戸田采女正殿（氏敷）被仰渡候二付、幸太郎退出有之候間、御門断之儀令承知候、則可申達候、其外御申聞之趣令承知候、御門断相濟候得者、彼是可申入候、以上、

壬七月十六日

田沢  
森川  
御用人中  
加藤次郎右衛門

以手紙啓上仕候、然者曾根幸太郎様御門断相濟候得者、駿河守方御達可御申旨申上候得共、夜中之儀ニ茂御座候間、御返報彼是手間取候間、御門断相濟ハ、直ニ御供人差上可申候間、左様思召可被下候、此段宜く御申上可被成候、以上、  
壬七月十六日

加藤次郎右衛門様  
田沢  
森川

以手紙(貳紙)「致啓上」候、然者曾根幸太郎儀唯今致退出候間、此段宜く御申上可被下候、以上、  
壬七月十六日

田沢  
森川  
新庄駿河守

御手紙令披見候、然者曾<sup>根</sup>幸太郎唯今致退出候旨、令承知候、以上、

壬七月十六日

一、泊所江之文通使者、御台所之者江申達、御長屋御門番人方相届候様取斗候段、御台所之者申聞候、尤幸太郎中ノ口方御長屋御門罷出候、  
一、翌十七日、菅沼織部正殿御不快、為御見舞田沢久左衛門罷越、昨夜始末致演舌候、御助駿河守殿御世話ニ罷成、其上幸太郎供人も借用旁々、右之御礼挨拶有之候様致度旨、宜く右之趣申上給候様、用人共方申達候処、被致承知候旨、被御申聞候、

〔四十四脱カ〕  
安永八亥年十月十四日

当御番之節、外山甚之丞病氣ニ付駕籠断之上致退出候一件

九番組  
内山甚三郎及殿扣

水野宇兵衛写扣

十月十四日、当御番請取方<sup>内藏助</sup>甚三郎、泊方<sup>藤左衛門</sup>頼母、  
但高木主水<sup>(正源)</sup>正殿煩ニ付、

助  
北条安房守<sup>(氏興)</sup>

一、外山甚之丞儀、夜五時前頃方俄ニ言舌廻り兼、蹇踞類中之様ニ相見ハ、明朝步行ニ而退出之体無之候ニ付、御泊所江左之通手紙遣ス、

北条安房守殿  
御用人中  
武藤頼母  
長尾藤左衛門

以手紙致啓上候、然者御番衆外山甚之丞唯今五時頃、俄ニ気分相蹇言舌廻り兼、其上右之方手足不叶之様子ニ而相勝不申候、依之明朝步行ニ而退出可仕体無御座候間、駕籠断被仰達被下候様仕度奉存候、此段宜く御申上可被下候、以上、  
十月十四日

右手紙差遣候節、兩人共猶又御番所江参り様子見受申候処、弥右之通ゆハ如此申遣候、台子孫右衛門与申者相頼、与力番所江同心福井与兵衛江相渡候由、孫右衛門申聞候、

一、右之通ニ付、弥駕籠断相濟候ハ、近藤八三郎・高室五郎三郎甚之丞江差添被参候様、但明日朝番之衆も例方者人数多く被勤候様、八三郎迄達置候、

武藤  
長尾  
北条安房守

御手紙令披見候、然者外山甚之丞方不快之由、御紙面之趣令承知候、右ニ付則面談甚之丞様子承度候間、各御老人泊り所江御越可有之候、以上、

十月十四日

尚々迎人差遣申候、以上、

一、右二付、相組之事故藤左衛門殿上下着用、泊所江罷越用人富永半右衛門江逢申候処、甚之丞様子御内々御尋二付、委細被申達候、何れにも早々駕籠御断可被成由、被御申聞候段、半右衛門申聞候之旨、委敷被申達候由、急変如何与被仰聞候間、先急変之体も不相見候得共、弥相躰候儀も可有之候ハ、無心元被存候段被申候処、随分心附候様被御申聞候由、且又病人江差添候儀八三郎・五郎三郎両人手当テ致置、泊り御医師二様子見賞候事可相成哉、何れニ茂頼候方可然、其段も藤左衛門殿被相達候処、是迄御医師参り候例一向無之由、用方申聞候間、近例者拾ヶ年跡稻垣長門守殿組小長谷権九郎病氣、駕籠ニ而翌朝退出之由、御門断八時頃被仰遣候段、部屋留記ニ茂有之候、何れニ茂早々御門断相濟候之様致度旨、藤左衛門殿被申候処、随分手配可致由、安房守殿ニ而も十ヶ年以前之例其前之例も見合、被取斗候由、半右衛門申聞候間、尤退出之節安房守殿御家来被為差添候由、半右衛門咄し候旨、

武藤  
長尾

北条安房守

外山甚之丞様子為見届押附可罷越候、左様御心得可有之候、且此黒焼菓右病症ニ相応之由、折節所持申候間差進候、白湯ニ而御用候様存候、以上、

十月十四日

右来翰誰々兩名ニ而返報并菓之礼申遣ス、

一、無程安房守殿御番所江御出候由、其節御番衆佐橋織部・深尾主計・大沢金弥・石原彦太郎並居、其次ニ夜具ヲ着候テ甚之丞御玄関之方ヲ枕ニ伏し居、左之方ニ大小ヲ置、右之方ニ上下ヲ置候、御番所御規定之通御行灯壺ツ出し申候、安房守殿見届、猶又心附候様至極大病ト被見請候由、御挨拶早速御退散、此方共者甚之丞枕元少々離レ、甚之丞左右ニ罷在、勿論甚之丞側左右二八三郎・五郎三郎、右両人者白衣ニ而看病罷在候、

且又御菓之御礼兩人并当人茂忝候段申達ス、御出退散之節共、例之場所ニて此方御挨拶申候、

御玄関建居之間安房守殿御越之節、

御玄関前ニて右家来御徒目付泊所江案内有之候上、御玄関番罷出門方向ニ左之方御まい良戸片方開キ、御退散後直に建ル、此方ニ而者構不申候、

一、四ツ半時頃、御徒目付井出丈右衛門相越、唯今駕籠断相濟候間、押付中ノ口江駕籠可参旨申候由、八三郎申聞候、

一、九時頃、又御徒目付鈴木彦左衛門上下ニ而部屋脇ニ相待、此方共二逢度由八三郎被申知候間、藤左衛門殿白衣ニて被出候処、御目付日下十郎兵衛口達之由、御門々并駕籠断相濟候条、押付駕籠可参旨案内有之、但彦左衛門申聞候者、押付駕籠参り候ハ、先ツ病人を乗せ中之口ニ可差置旨、甚之丞宿所并差添之衆所等承候由ゆへ、右三人之宿所被達候旨、又彦左衛門申聞候者、押付ケ十郎兵衛方案内有之候上可差出旨、否次第、彦左衛門方早速為知可申候由、

一、右之通二付、八三郎其外之衆江茂相達、御番所江参り彼是世話いたし候、無程藤左衛門殿江致面談度由、彦左衛門申候二付被逢候処、駕籠参り候之間、勝手次第甚之丞退散為致候様、彦左衛門申聞候間、又藤左衛門殿自分御番所ニて相番衆江致差図、病人伏り被居候所迄持込駕籠江乗せり、大小相改候上駕籠江入、鼻紙袋者印形も有之候二付、八三郎懷中致候様相達ス、尤夜具等者相番衆被立合、葛籠江入明朝葛籠取江渡被申候様申達ス、右之通ニ而中ノ口江甚之丞を駕籠ニ乗セ出し置、尚又安房守殿より否相待候処、即刻左之通り、

長尾  
武藤

北条安房守

駕籠断相濟候間、病人勝手次第退散可有之候様可被致候、尤我等家来差添申候、左様御心得可有之候、以上、

十月十四日

北条

長尾  
武藤

駕籠御断相濟候間、当人勝手次第退散為仕候様、尤貴公様御  
家来御差添被下候段、御紙上之趣奉得其意候、以上、

十月十四日

一、右之通二付、八三郎・五郎三郎差添退出被致候様、勿論甚之丞宿所迄  
被送届、甚之丞子息二被逢、委細病氣之始未得と被咄候様相達、退出為  
致候事、

富永半右衛門様

長尾藤左衛門

外山甚之丞儀、唯今駕籠ニて為致退出候、尤御番衆近藤八三郎・  
高室五郎三郎兩人為差添同道仕候、此段宜く御申上可被下候、以  
上、

十月十四日

右手紙御台子孫右衛門江相頼、同心小倉利八請取候由、御返事者不參候、  
一、安房守殿右御世話之為御礼翌十五日平服ニ而、石原彦太郎安房守殿江  
被參口上被申置候様相達、尤右者甚之丞名代之積りニ候、  
一、主水殿正殿用人共迄、甚之丞一件申遣、委細者代合後被參候而、可被  
申達旨、藤左衛門殿一名ニ而被達、代合後主水正殿江被參、委細被達候、  
且又安房守殿江茂被參御世話之御挨拶被申達候事、

『四十老』組頭被 仰付候節、書状案詞等

一、二条・大坂在番之御番頭江之書状、小奉書ニ認メ上包美濃紙旅封し、  
一筆啓上仕候、時候御座候得共、益御勇健被成御座目出度御儀奉  
存候、然者私儀今般御役被 仰付不存寄難有仕合奉存候、右之段  
申上度捧愚札候、恐惶謹言、

何月幾日

何之誰  
ナトリ判

片苗字  
何誰様

参人々御中

一、同在番御同役江之書状、糊入上封半紙、

一筆致啓上候、弥御安全被成御在勤珍重奉存候、然者私儀今般不  
存寄御役被 仰付難有仕合奉存候、御同役ニ罷成候儀、何分宜被  
仰合可被下候、右之段為可得貴意如斯御座候、猶期後音之時候、  
恐惶謹言、

月日

何之誰  
ナノリ判

何之誰様

参人々御中

一、御番頭江返書認方之事、

(長谷川勝富カ)  
長 丹後守様

何之誰

御手翰拝見仕候、然者明幾日何々二付、何時罷出可申段、被仰下候、  
御紙上之趣奉得其意候、以上、

月日

右之通片苗名、状箱之上者諸苗字ニ認メ申候、遠国之状封之上茂諸苗字、  
内者片苗字之事、

但御誓詞御礼对客之節者、右刻限罷出可申候義認入可申候、惣  
而御返翰者御番頭直当テ、此方申遣候儀者、何れも用人宛之事、  
一、御書付被遣候節者、

御手翰拝見仕候、然者松平伊豆守殿被成御渡候由、大目付何之誰  
御達被申候由、御書付写別紙何通被下之、御番衆并御願人之面々  
江可申達旨、被仰下候、御紙上之趣奉得其意候、以上、

月日

一、続吟味之儀申来り相番中続無之節者、其段申達候事ニ有之候処、近来  
者続無之節者一向不申遣候積り、御番頭江兼而掛合相濟居候由ニ而無之  
趣者不申遣候、但続有之ニおゐてハ、其当人方遠慮伺書取之、相組与頭

持參可致候、万一病氣等ニ候ハ、以手紙遣候而茂不苦候之由、

用方宛

何之誰

以手紙致啓上候、然者明日御達御座候、何之誰江何々之続、私相組中吟味仕候処、何之誰儀何之続ニ御座候、依之遠慮伺書差出申候間、別紙壹通為持致進達候、右之外願人之面々迄続之者無御座候、尤私儀茂続無御座候間、此段宜御申上可被下候、以上、

月日

上包半紙折掛ケ上書

遠慮伺書

何之誰

覚

一、何統

勤頭(組) 何之誰

右私何統誰義昨幾日何之御答被 仰付候間、私儀遠慮之程奉伺候、以上、

何月幾日

何之誰

一、産穢并忌服之儀、前々当人方断状を以日数相伺候処、右日数组頭方致差図、右日数書付相認御番頭江致進達候処、寛政六寅年六月御書付出、銘々方日数書付ニ致シ差出被申候間、右親類書を以続并忌服日数等能々相改相違無之候ハ、手紙ニ而右書付御番頭江致進達候、  
一、同役不快ニ而御番御断申候節者、糊入ニツ折、裏面ニ相認メ、上包美濃紙折掛ケ、文言左之通、同役三人宛、

何之誰様  
同断  
同断

何之誰

一筆致啓上候、私儀明幾日、当御番可罷出候処、何々強差発、何々ニ而御座候間、出勤難仕御番御断申上候、此段何之何々守殿江宜御

申上可被下候、恐惶謹言、

何月

何之誰

ナノリ判

何之誰様

同断

同断

右書状月番之同役江為持遣メ、

一、御役被 仰付、三・四之内御番頭江箱肴遣申候、尤対組成ニ候得者、元組御番頭江も同様差遣候事、使者麻上下着、供足輕老人・草履老人召連、箱肴駒台ニ而、宰領足輕老人差副申候、目錄認方左之通、但奉書横ニツ折、

右目錄ハ略字ニ認ヘからず事、

進上

干鯛

壹箱

以上

何之誰

一、御礼対客之節、差掛り不快ニ候得者、用人中迄手紙ニ而断可申遣候事、  
一、誓詞之節断者、御番断之通、同番同役江申遣候事、

『四十二』 供奉出人差引心得方之事

正月元旦・二日御礼之事

一、元日当御番・明ケ御番・御供番、右三組除之、残ル五組元日御礼登 城、但元日御礼残り者二日登 城御礼之事、  
一、当朝六時前、烏帽子・素袍着登 城、組頭躑躅之間ニ揃、御番衆蘇鉄之間ニ相揃、詰番組与頭御書院番与頭江掛合虎之間請取、組頭・御番衆一同右御席江罷越、且当日揃書、組限ニ御番頭中之口部屋江持參差出寄之節、組頭大広間布衣之次江附御番衆四ノ間江相揃御礼相済、虎之間江引、御流頂戴西ノ丸御納戸衆ノ次組頭組順、次ニ御番衆組順、右御流頂戴相済、一統組切ニ御番頭江申達退出之事、

正月出人差引之事

一、当日朝六時烏帽子・素袍着用登城、組頭躑躅之間江揃、御番衆蘇鉄之間当日揃書組限中ノ口御番頭部屋江持參寄せ之節、大広間・四之間江罷越、別紙繪図面之通着座、寺社御札相濟組切御番頭江申達退出之事、

但前々帯刀之儘御席江相詰候処、近来御玄閑二而刀侍二為持、

小サ刀斗二而殿中江罷出候、且当日御番頭病気差合等二而登

城無之組二而者揃書詰番組御番頭江差出、帰宅後其組御番頭江無

滞相濟候段、手紙二而申遣候事、

上野(寛永寺) 御参詣之節供奉之事

一、御当日明六時前、烏帽子・素袍着、上野中堂右之方回廊江組頭・御番衆共相揃行列罷出候、御番頭江組切揃書回廊おみて差出、御番頭出勤無之候節者、大目付衆回廊江被相廻候節差出、其後御目付衆ヨリ例之場所江相廻候様案内有之、

御装束所別紙繪図面之場所に罷出控居、同所御門方御轅二而被為成候節平伏 御目見、夫方御茶瓶、跡御目見衆江引続供奉 御靈屋江被為

入候内、別紙繪図面之場所に罷在、夫方次之御靈屋江御参詣、供奉前同断、但別紙繪図面之通り場所江披き候事、手廻し操越可申候、還御之節供奉前同断、御装束所御門被為入候節平伏 御目見、右供奉相濟、

御番頭又者大目付衆江掛合退散之事、  
但御番頭行列御出勤無之候節者、帰宅後無滞相濟候段、御番頭江手紙二而申遣候事、

一、御年回御法事御行列 御参詣之節、供奉勤方前文同断之事、

但雨天二而御雨道被為成候節者、供奉無之候二付、回廊揃ひ場

所二扣居、御番頭又者大目付衆江掛合退散之事、

『文化四戊辰正月十三日申合供奉、』

寺社出人揃書案文

見出し 揃書 何之誰組与頭 何之誰

覚

組頭名

御番衆

同

同

合何人

右之通罷出相揃申候、以上、

何月幾日

何之誰

正月十一日 御具足御祝儀頂戴之事、

一、御当日詰番組方組頭兩人五時熨斗目・麻着用登城、躑躅之間江罷出御番頭中ノ口御部屋江罷越、兩人登城之旨申達、其後菊之間御杉戸際

二相扣居御目付衆寄せ候節、雁之間・菊之間御襖開キ有之、御役衆段々被相詰、布衣之次に着座、御目見相濟、紅葉之間羽目方布衣之次二着座、御祝儀頂戴相濟、右御礼御老中方謁有之候節、菊之間御縁類江罷出右相濟、御番頭江申達退散之事、

但御番頭御病氣御差合等二而詰番之節者、帰宅後無滞相濟候段、御番頭江手紙二而申遣候事、

御番頭江手紙二而申遣候事、

『四十三』御弓場始之節出役之事

一、当日六時熨斗目・麻上下着用、半蔵御門大番所江罷出、布衣之次江着座罷在、例之場所江罷出候様、御目付衆方御小人目付ヲ以案内有之、諸役人衆引続吹上半蔵口方詰所次之間布衣之次江着座、又候御目付衆方案内有之、刀者右詰場所江差置、御場所江相廻り被為成候節、上覽所左

り之方御幕張之内、布衣之次江罷在、大的 拜見十々之者時服被下、右畢而 還御之節、右拜見之場所二而平伏、御掛り若年寄衆御退出後、一

統退散之節、御番頭大御番方江罷出候、射手明幾日何時、御本丸江登城有之候様可申達旨、被御申間候間、其段射手江申達退散之事、

但御番頭拜見不被罷出候節者、帰宅後無滞相濟候段、手紙ヲ以御番頭江申達候事、

申達候事、

一、右御弓場始雨天ニ而御延引后日之節者、服紗小袖・麻上下着用之事、右射手之面々退出迄者手間取、小笠原鑑次郎よりも翌日登城之儀達有之候間、御番頭方達之趣認、半蔵口外右射手供之者江相渡、右之通取斗候事茂有之候事、

『寛政五五年正月十一日、御弓場始メ雨天ニ而御延引、同十六日

上覽有之候節、見物之面々平服ニて罷出候様申来り、福王幸之

進殿裏付上下にて被罷出候よし、

一、申二月 日当組二条在番之節、御番頭ヨリ被相達候書付、左之通り、

文化六巳年三月申合、

御番衆 御城江差出候様、御老中方・若年寄衆ヨリ御達有之候節者、

泊御番罷出候旨、出番之上泊組頭中江申達、明幾日何之誰組何之

誰何時 御城江罷出候間、翌日当御番之組頭老人 御本丸江罷出候

様、翌朝交代之節可申通旨可申達候、

右之通申合有之候処、当申正月猶又左之通申合候、

一、御弓場始之節、御番衆射手相勤候ハ、一統騎射同様取手可申候、

一、一統騎射御弓場始メ之節、番頭或者見物望之者無之、御場所江罷

出候者無之節者、御目付衆方為差引被罷出候組頭衆江幾日何時 御城

迄罷出、番御掛り若年寄衆於 御場所被仰渡候段申聞候ハ、組頭

方本組之番頭江其段相届、在番頭方御番之者江申渡候ハ、前条之趣

幸御番之者方其節組頭江申達候、

右之通り猶又申合候間、江府同役中申越候之間、書面之趣兼而御心

得可有之候、

申二月 内田近江守(正肥)

紅葉山 御参詣之節供奉之事

一、御当日明ケ六時、烏帽子・素袍着用登城組頭者躑躅之間、御番衆

者蘇鉄之間相揃、当日揃書組切ニ御番頭中之口御部屋江差出、御番頭御

行 列不被罷出候節者、大目付衆部屋口迄罷越、坊主衆ヲ以申達、御行

列被出候大目付衆江差出御挾箱出、御玄関方組頭御番衆罷出、腰掛ケ

前両御番之次江附キ 御轅ニ而被為 成候節、其所ニ而平伏、夫より当

御番之次江附供奉 御宮 御参詣之節、両御番之次江附平伏、還御之

節、供奉前文同断、御玄関より入御之節、両御番之次江附平伏、御目

見右供奉相濟御番頭又者大目付衆へ申達退出仕、但右披キ場等別段絵

図に有之候事、大納言様 御同参之節、西丸供奉ハ被罷出候御鳥居前、

右之方御本丸供奉ハ御参詣之節西丸供奉ハ左り之方と向ひ合披之、尤前日夕七ツ時方御請之事、

但御番頭不被罷出候ハ、帰宅之上手紙ニ而無滞相濟候段、組切申

遣候事、

一、四月十七日 御祭礼 御参詣之節勤方前同断、

但雨天之節、御雨道 御参詣之節、供奉勤方之儀、先達而組切ニ御

番頭江伺書差出候処、其節ニ至り御目付衆差図可有之旨、附紙を以

被相達候、若雨天ニて御雨道被為 成候節者、御番頭又ハ御目付江

懸合可申候事、

増上寺 御参詣之節供奉之事

一、御当日明六時、烏帽子・素袍着用御番・御番衆宿坊月界院・良源院之

内、御番頭方申来候方江相揃、当日揃書組切之御行列被出候、御番頭江

於宿坊差出、御番頭出勤無之節者、大目付衆江差出、御目付衆方案内有

之、御装束前別紙絵図面之場所江罷出控居、同所之御門方 御轅ニて被

為 成候節平伏 御目見、夫より御茶瓶、跡方御目付ニ引統供奉 御靈

屋江 御参詣 勅額御門ニて 御轅居り候節、別紙絵図面之場所ニて平

伏、御靈屋内通、通御ニ而絵図面之場所江操越、次之 御靈屋 御両所

江 御参詣之節披キ場等絵図面之通、御参詣相濟 還御之節、絵図面之

場所ニて 御装束所御門被為 入候節平伏、右供奉相濟御番頭又者大目

付衆江申達退散之事、

但大御番頭不被罷出候節、諸事前文之通り、

一、御年回御法事御行列 御参詣之節、供奉勤方前文同断之事、

但雨天之節御雨道 御参詣之節、供奉勤方之儀、前文同断之事、

『文化六巳年六月十四日、

惇信院様御法事宿坊間違有之、月界院ニも相知兼候段申之、暫く彼

是相尋候得共、相知不申、其内表門前通、天陽院玄関ニ而御徒目付

着当所ニ相見候間、右宿坊承り候処、此方之由ニ而一同夫江相越候事

有之候以来ニも右着当所有之候方、宿坊と心得候得者宜哉と被存候、  
尤右宿坊之事者番頭より被達候得共、右体之儀有之候間記し置、

〔四十四脱カ〕  
月次講釈登 城之事、

一、当日詰番組与頭兩人、時之上下着用、四時登 城御番頭中ノ口御部屋  
江兩人罷出候段申達、躑躅之間ニ罷在、御老中方御廻ニて菊之間入口御  
杉戸際布衣ニ引統扣居、御目付衆寄ニ而、雁之間江罷越布衣ニ引統着座、  
講釈相濟、躑躅之間江引、御番頭江申達退出之事、

但二月初講釈之節者麻上下着用之事、御番頭病氣差合等ニ而、助詰  
番之節者帰宅後無滞相濟候段、御番頭江手紙ニ而申遣し候事、

『四十五』御能 御前置差引之事

『但朱書之分者諸組御同役相談之上、七番組ニ而書入候、』

一、御当日明六時、組頭熨斗目・長袴、御番衆熨斗目・半上下着用登 城、  
組頭躑躅之間御番衆者蘇鉄之間揃、御番衆者帯刀之儘罷在、即刻御台所、  
組頭者二ノ間、御番衆者三ノ間江罷越、右相濟組々揃書御番頭中ノ口部  
屋江持参差出、夫方大広間江罷越掛り御番頭被相越、

『御番頭被相越候以前、出人御番衆稽古之儀、詰番組・月番組与頭  
差引有之、其後掛り御番頭被相越、稽古見分有之候様可申達候事、

一、前々御徒方代り合相濟、其後大御番方代り合有之、引上ケ候節  
茂御徒方引上ケ候上ニ而大御番方引上ケ候処、近来者御能都度之  
御徒頭江懸合大御番方 御前置代り合相濟、其後御徒方代り合引  
上ケ候節、大御番方引上ケ候後、御徒方引取候様、御徒頭江詰番組・  
月番頭・与頭申談候事、

一、御前置稽古有之、右相濟懸り御徒頭江掛合 御前置代り合之義申談置候、  
御能始以前 御前置御番衆御落椽江附ケ、夫より御階子下敷革江着、

『御落椽江附候儀、御老中方御揃ニ而、並附キ御錠口ニて敷革江下  
ス、御階下敷革江別紙絵図之通着座候事、御前置御番衆代り合之  
節、敷革方右之方江披キ、左之方代り合申候事、

一、御能始方翁始迄 御前置代り合之儀、面箱ニて代り合申候事、

一、御能始前方翁始前迄 兩組  
一、翁始前方脇能相濟迄 兩組  
一、脇能間方式番目相濟迄 兩組  
一、式番目間より三番目要客 兩組

一、広蓋相濟候迄 兩組  
一、御中入後 兩組

一、御落椽附四番目祝言相濟候迄 兩組

『御中入之節、御番衆引上ケ候儀、御同朋頭御椽ヲ引候ハ、御番  
衆ヲ引上ル、御中入後御落椽江附候儀、御門跡并公家衆御饗応  
御湯ニ而御落椽江附キ、大目付・町奉行・御目付御椽江出座ニ而  
見合、御番衆敷革江下ス、祝言相濟御番衆引上ケ 御中入前二同、  
且又御能相濟詰番組・月番組老人宛居残り、敷革与力引払候段、  
御番頭部屋江申達候之上、退散之事、

右之通 御前置相濟、其組之与頭兩人・御徒頭次々着座、罷在 御前置  
御番衆代り合等之式、別紙絵図面之通、但昼御台所江罷越候義、休足之  
内見斗相越、右 御前置相濟、御番頭被申達御番衆江及差図退散之事、  
但御番頭病氣差合等ニて不被出節ハ前同断、

『組頭差引出役之義、六組之節者 御前置御番衆四組方出候間、右  
組々方組頭兩人、都合八人、右之内四人者加出候間、御台所不  
被下千人前 御料理有之候節者、千人前頂戴之事、尤御番頭より  
達無之候間、弁当 持参御番頭部屋二階下借用相用候事、

但八組之節者、六組方御番衆罷出之間、右組々より老人宛加出兩  
人、都合八人加出、兩人者月番組方老人、前後月番組之内方老人、  
右兩人御台所不被下候間、前文之通右組当御番・明御番ニ有之候  
得者、加出兩人之義者御番頭達有之次第之事、

組頭兩人出之事、

一、寛政五<sup>(マ)</sup>亥年九月二日、日光御門跡御饗応之節、御前置御番衆

六番組・拾番組二而罷出申候、

一、御番衆増人式人・加人式人都合四人、七番組より罷出候、差引組

頭者六番組、拾番組方四人出候事、

一、公家衆御馳走式御祝儀、御前置之節者組頭熨斗目・長袴、御番衆半袴着用之事、

一、日光御門跡御饗応御能之節者、組頭・御番衆とも服紗小袖・半袴着用、右 御前置両組方組頭四人、御番衆増人・加人とも式十人、勤方前文同断、

『一、享和二戌年方式組出候節、老組方与頭三人出六人二成、』

一、文化八末年二条在番中九月廿七日、江戸表同役寄合之節、評義有之候由、御能 御前置之節、組々方差出候揃書、是迄区々相成居候二付、此度右認方評儀之上相究、部屋江も張出被置候段、御同役竹内平左衛門殿より申来候、案左之通、

見出し 組頭  
御能出人揃書 同

御能  
御前置出人性名

御番衆 名

同

同

同

同

同

加人敷 御番衆

増人敷 同

合何人

右之通御座候、以上、

何月幾日

組頭兩人

『四十六』春秋大的 上覽之節差引之事

一、御当日明六時、時之上下着用、半蔵御門大番所江罷越、組切射手之面々揃承り置、御番頭被相越候之節、其段申達候、其後御目付衆方、御小人目付を以案内有之、半蔵御門口方一統御庭江入、詰所江刀差置場所江罷出、御目付江懸合下射有之、奥之衆見合有之、御禄稽古有之、御払拍子木二而 上覽所後芝場江廻り 御成掛ケ一同御目見相濟、大的 上覽始ル、一手二而 御免之旨、御番頭射場江被相越被申聞、御目付より達有之、其段御番衆被申達、大的相濟、十々之者拝領物有之、其段射手之面々江御番頭被達、御礼勤先格之通申達候様、組頭江被申聞候二付、御当日服二て、御本丸・西丸御老中方・若年寄衆不殘、組切御番頭・組頭江拝領物御礼罷越候様申達、但初而 上覽相濟候者者、右御礼御用番御老中御懸り、若年寄衆相勤、拝領物御礼者取手返二相勤、組切御番頭・組頭江前条之通、且拝領物無之共、初而 上覽被相勤候者者、右初而 上覽之御礼御用番御老中方御掛り、若年寄衆且御番頭・組頭江も被相越可申候事、但 御代替初而 上覽之節、一同麻上下着用之事、二条在番登組御暇後 上覽有之候節者、右両組与頭不罷出候二付、月番組与頭差引右二付、登り組射手性名書付、月番組頭江差遣候、且騎射帶佩御用残之面々、大的 上覽罷出候節者、月番組与頭差引之事、御番頭病氣差合等二て不被罷出候節者、帰宅後手紙を以無滞相濟候段、組切二御番頭江申遣候事、

『四十七』嘉祥御祝儀登 城之事

一、御当日当御番・明ヶ御番除之殘四組より合二而、御番衆五拾人組頭休組共、六時不殘染帷子・長袴着用、明六時登 城、組頭躑躅之間、御番衆蘇鉄之間江揃、休組除之在府組揃書、組切二御番頭中ノ口部屋江持参差出、御祝儀頂戴、西丸御納戸御番衆之跡江引続、組頭組順御番衆頂戴相濟、御番頭江申達退散之事、

但御番頭御出無之候ハ、前条之通り、

一、嘉祥御祝儀出人之儀、老組方十二・三人之事、尤人数者御番頭方申来次第、但組順之儀者三日目詰番組先、其跡組順休入組者跡ニ罷出候事、

一、引キ方之儀、矢張御板椽通り引申候、御流之節者落縁引キ候事、

『四十八』 玄猪御祝儀頂戴登 城之事

一、御当日詰番組与頭老人、御番衆当日御番組除之、残り五組方五十人熨斗目・長袴着用、夕七ツ時登 城、組頭躑躅之間、御番衆蘇鉄之間揃、諸組御番衆揃承之、揃書御番頭中ノ口部屋江差出、御目付衆寄ニて大広間御板椽通、西丸御納戸衆之次ニ引統罷出、其次ニ出御白書院於 御前御祝儀頂戴、右相濟御番頭江申達退出之事、

但御番頭助詰番ニ候得者、帰宅後無滞相濟候之段、以手紙御番頭江申遣、詰番組之外者御番衆方無滞相濟候段、其組之組頭江届有之、組切ニ其段手紙を以御番頭江申遣候事、玄猪御祝儀、未々亥ニ有之候得共、大坂下り休明方茂出、七組ニ罷成候、其節者七組ニ而、五拾人御祝儀頂戴罷出候事、

一、玄猪出人差引之儀者、同役当御番より三日目詰番日方老人罷出、尤出方相極候ハ、其段部屋江名前張出可申候、尤外組ニ而も拾人ツ、御番衆名前認メ、玄猪之以前部屋江張出可申事、尤当日無滞相濟候段者、月番同役共江出人筆頭方可申越様可申達事、尤無滞相濟段、近来御番頭江不申遣候事、

一、詰番組与頭方於 殿中差出候惣組揃書之事、嘉祥之節之通、詰番組御番衆ヲ先江認、其跡組順ニ認出候事、尤頂戴物出順茂右之通之由ニ而候、

一、文化十四年九番組方朝日忠三郎差引罷出候節、認方右之通之由ニ而候、

一、右之節、六番組青木又四郎御席ニて不調法有之、差扣伺候由、右者翌朝本組高木伊勢守殿方伺出候事之由、

『右御祝儀頂戴之御席、初而之者も有之候間、頼坊主衆被申聞、其以

前御席仕礼拜見為致候事、

『四十九』 御入人差引登 城之事

一、小普請御入人有之節、右御入人有之、但与頭老人当日五半時平服用登 城差引罷出候段、御番頭中ノ口部屋江罷越申達ス、夫より蘇鉄之間江罷越、大御番方江御番入被 仰付候面々姓名・高・宿所等承り、為心得認置御番入被 仰付、御番頭組割書付被相渡、其面々江当組ニ被極候段申達、右御番入之御礼両丸御登中方・若年寄衆不殘御番頭被相勤、夫方組頭誰方江被差越候様申達、其節御番頭・組頭宿所書付銘々江相渡、且西丸江右御礼御番入之面々退出方直ニ組頭同道登 城御番入之面々、蘇鉄之間ニ被罷在、組頭ヨリ今日大御番江御番入被 仰付候面々、為御礼登 城之段、姓名書付坊主衆ヲ以御目付江差出、於大広間御奏者番謁有之、右相濟退出之事、

但御番頭病気差合等ニ而登 城無之候節者、差引罷出組頭ヨリ無滞相濟御番入之面々御礼勤之儀、先格之通申達候段、申遣候事、

一、大御番江部屋住御番入被 仰付候節、其組々ニ不拘月番組与頭老人為差引登 城、差引之式前文同断、但御目付方寄せ之儀被申聞、被為召候面々菊之間御縁類江寄被仰渡候節、御杉戸外御衝立之際罷在被 仰付、相濟組割御礼勤、且西丸江同道登 城之式前文同断、尤父子と茂同道之事、一、与頭差引之儀者、月番方近来兩人ツ、罷出候事、文化十四年十月、部屋住御番入有之候節、三番組相当詰番組ニ有之候処、内田近江守殿六番組高木伊勢守殿方七月差替月番被致、十月御番頭者、伊勢守殿方其組同役江被相達、六番組方罷出候、右之通ゆへ差替有之候得者、其番頭者組方罷出候事与相見申候、

『五十』 御番衆初登誓詞差引之事

一、二条・大坂在番初登御番衆誓詞、当日差引組頭老組老人宛平服用用、御番衆麻上下着用、六時評定所前相揃、御目付衆方御小人目付ヲ以案内有之、同所御玄関ヨリ上り、組頭御番衆席々着座、御番頭差凶有之、誓

詞之面々稽古有之、其後御老中方御出席之節、右席之前御通行有之候間、其節平伏誓詞相濟候上、御番頭御番衆江被逢、御礼之後御用番并御出席之御老中方・御番頭・組頭江被罷越候様、申達退散之事、

但御番頭病氣差合等二て出席無之節者、罷歸り候上無滞相濟候段、手紙ヲ以申遣候事、

『五十一』一統騎射 上覽之節差引之事

一、御当日明ケ六時、月番組与頭老人平服着用、竹橋御門外江罷出、布衣二引統着座、矢来御門脇幕張江射手之面々揃候間、大御番方出候面々者揃場江罷出候段、名札侍ヲ以差引組頭江大番所江届有之候、其段御番頭江申達、御目付衆ヨリ御小人目付ヲ以案内有之、一同 上覽所江罷越、其節射手幕張入口方大御番方射手之面々へ致挨拶、布衣次江着座、上覽相濟御番頭明幾日、服紗小袖・麻上下着用、何時登 城有之候様、射手之面々江可申達旨被申聞、退散之節射手溜り江罷越、大御番方射手之面々江可申達事、

但御番頭病氣差合等二而不被罷出候節者、帰宅後無滞相濟候段、御番頭江以手紙申遣、月番組之外者其組方出候射手之面々方組頭江届

有之候二付、無滞相濟候段、其組之御番頭江申遣候事、

一、罷出候御番衆之組二不抱、月番組ヨリ組頭老人差引罷出候事、番頭差替月番二有之候得者、被差替候其月之御番頭ヨリ其組江被達差引罷出候事、

但文化十四年十月三日、三番組壹体月番組之処差替相成、十月

御番頭高木伊勢守殿月番被相心得候二付、伊勢守殿組方為差引竹村太郎右衛門罷出候事、

『五十二』上野 増上寺 拜礼之事

一、上野 正月三日迄、増上寺正月五日迄、熨斗目・麻上下着用、七月上野・増上寺共、盆中染帷子・麻上下着用之事、

一、御盃屋拜礼之節、二天門外二而下乘、雨天之節者長柄持召連 勅願御

門二而刀侍二為持、清草履にはきかへ、右御門方内供無之、雨天之節手傘、御手水鉢二而清メ、御唐門二而草履ぬき、御牌殿御箱檀之上別當着座之前二而致拜礼候、退散之事、

一、御禁忌日毎月 御忌日 御盃屋江参拜之式、前同断之事、

一、御年回御法事之節、拜礼長袴着用、二天門外二而下乘、雨天之節長柄持召連候、草履はきかへ 勅願御門二而刀侍二為持、長袴（カ）緹解キ御手水鉢二而清メ、拜礼之式、

但御法事之節者 勅願御門方内御薄縁雨障子掛り候間、はき物・手傘等二不及候事、

右御年回御法事有之節、御香奠白銀老杖献上、使者熨斗目・染帷子・麻上下着用、刻限其外其節之御書付之趣二而取斗候事、右香奠御目付衆謁役僧、披露役人ヨリ請取書差越、

右香奠仕立方前文二有之、

一、上野 御宮・増上寺 安国殿参詣之式、前文之振合前日六ツ時方清メ之事、

『五十三』二条・大坂在番御暇御番衆差引之事

一、当日月並御礼登 城之節、詰番組与頭江在番組与頭より揃書写請取置、御目付衆方寄候節、御納戸構江御番衆并悴 御目見之者、例格之通寄せ置候事、

『五十四』琉球人来聘之節出人差引之事

一、当日六時、烏帽子・素袍着用登 城、御番衆者蘇鉄之間江揃、組切二揃書御番頭中ノ口部屋江持参差出、夫方月番組与頭御目付衆江掛合、組頭御番衆刀置候場所請取、何れも刀差置寄候節、大広間四之間江相詰候、右相濟御番頭江申達退出、且月番組与頭右刀置候場所致断迄引渡申候、且書面之節右同断、但御台所被下候間、組頭二ノ間・御番衆三ノ間、代り合罷越候事、

但當御番明ケ御番除之、組頭、御番衆共百人、組頭老組方二人宛、

其外御番衆組々方出候事、御番頭病氣差合等二而登、城無之候者、  
帰宅後無滞相濟候段、手紙を以御番頭江申遣候事、

『五十五』 武術 上覽之節差引之事

一、御当日平服着用、御門明キ罷出、蘇鉄之間江罷出、兩人相待罷在候、  
尤刀者御玄関二而侍二為持候事、

一、無程近藤・山角兩人并打太刀之者罷出候二付、中ノ口御番頭部屋江罷越、  
他組同役一同ニ揃書持参、尤組切ニ書付差出ス、今日詰御番内藤甲斐守(正範)  
殿二付、右用方江相渡ス、

見出し

書付

戸田庄左衛門

覚

打太刀

近藤誠六郎

矢嶋留三郎

山角貞之丞

打太刀

山角藤十郎

右四人共相揃登、城仕候、以上、

四月廿四日

戸田庄左衛門

一、無程丹後守殿登、城二付、蘇鉄之間ニテ御待請、何れも無滞罷出候旨  
申達候、

一、上覽之面々稽古相始候二付致同道候、柳之間御廊下方御白書院御広椽  
江案内いたし候、御目付被致差図、稽古相濟直ニ寄セ申候、

一、上覽之節、拙者とも柳之間上御廊下ニ罷在候、

一、当御組誠六郎・貞之丞兩人、上覽相濟候故、右相詰候場所方引、柳之  
間溜ニ罷在、滞無之哉之段承り申候、尤、御好等可有御座哉之程難斗候  
二付、道具等仕廻不申候様申達候、

一、老統劔術相濟、引続鎗術・柔術相濟申候、

一、右相濟候内見合、拙者とも二ノ間御台所江罷越、御台所頂戴之事、

一、老統御好等無之旨、御目付衆達有之候、

一、上覽之者菊之間江相廻候様、打太刀之面々ハ勝手次第退散致し候様達  
二付、其旨当組打太刀之面々江申達ス、

一、上覽相濟候面々、菊之間御縁類江相廻候様、懸日御目付衆達し、何れ  
も右場所江相廻り候之処、今日芸術、上覽相濟候二付、拝領物被、仰付  
候旨、松平伊豆守殿被仰渡相濟、又候柳之間江引取、柳之間御縁類ニお  
いて小長谷和泉守・松平田宮・渡辺久藏渡之、

但羽二重縮緬龍門之内式反宛之事、

一、拝領物相濟何れも退散之義、丹後守殿江承候処、勝手次第、御礼廻り  
之義者、兩御丸御老中方・若年寄衆江不殘、尤西丸方溜罷出可申候様相  
達ス、但御礼廻之儀者麻上下着用之事、尤御番頭江者今日中、組頭江者  
一兩日中御礼可罷越候段、是又申達退散之事、

但御番頭登、城無之、前々条之通候事、

『五十六』 弓御用被出候組々江達之事

一、弓御用被出候順書相渡候事、

一、御成之節其前、日詰番之御番頭方申達候事、

一、御鷹野先弓御用被、仰付候段、詰番之番頭方申達候、前以急病差合等  
之節者、御門繼御本丸御目付衆江切紙を以可被申達候、并本組番頭江者  
神文状を以断可被申聞候、尤右神文状相組之与頭衆まで被差出候而者、  
延引相成候間、直ニ番頭江差出可被申候、

但御目付衆江之断状、御玄関前御徒目付当番所迄可被差越候、右断  
状ヲ請取候御目付衆之姓名承届、尤断状相渡候御徒目付之姓名も  
承、罷帰り候様使之者江可被申付候、御番衆断状左之通り、

上書

御本丸溜御番

御目付中

何之誰

以剪紙啓上仕候、明幾日御成二付、私儀弓為御用御供罷出候筈二御

座候処、俄頃差合御供難罷出御座候二付、御断申上候、以上、

月日

上包美濃紙封じ

右之通急病差合等之節者相渡候、射手御番衆順番之仁江早々可被越候、併御供揃刻限間二合不申候時刻二相成候ハ、代り之仁江被申越不及、右否ハ本御番江可被申越候事、

一、御供被出候節、御供揃一時早々、御城江可被罷出候、自分御玄闕江上り蘇鉄之間江罷出、坊主衆を以当御番御目付衆江、誰組何之誰今日弓為御用罷出候旨、并弓持之御小人之義被仰達被下候様、以書付可被申達候、右之段御目付誰江申達候段返答承之、相頼候坊主名を茂承り置被申候事、一、召連候人数、侍老人・鍵持・草履取・弓持連可被申候、将亦挟箱ハ不相成候間、着替等持参之儀者両御番方御供弓之仁江可被聞合候、

一、御供先二而者惣而御目付中可被致差引候条、差回数第二可被相勤候、一、自分并家来着服之義者、両御番御供弓被相勤候仁江承合、同様二相心得可被申候、

一、御供仕廻候ハ、相組之与頭江相届可被申候、尤翌日為届番頭宅江可被参候事、

一、御供被出候仁御供被仕廻、銅御門 通御二候ハ、与力番所迄右届可有之候、平川口・半蔵御門方 還御二候ハ、以書付御門繼銅御門与力番所迄可被申越候事、

但御夜詰前二候ハ、銅御門迄家来可被差出候、鳥射留候有無可被御申聞候事、

一、出順之御番衆病気差合等二而不被罷出候得者、重而弓御用之節跡江戻し不申、段々先江順々被相勤候筈二候間、其旨可被心得候事、

一、御供弓之仁、御場所二而両御番之跡二附御供可被致候事、

一、御船江乘被申候節、弓キも入可被申候、尤其節御目付衆江談可被申候事、一、初而弓御用被相勤候節、為御礼 還御以後直二加納遠江守江斗罷越可被申候、二度目方者不及其儀候事、

一、於御場先初而 上意有之節者、為御礼加納遠江守江可被相越候、二度目方者不及被相越候事、

但御菓子・御酒被下候節、御礼之儀茂右同断、且又両様とも着服者

御供之儘にて可被罷越候、

一、御供弓之仁、御成前日当御番二候得者、御番用捨可被致候事、一、御供弓代り之仁、御成前日当御番二候得者、御番用捨可被致候事、

戊正月

御鷹野、御成前日御供弓出順之者江、詰番之番頭方直々以手紙申遣、代り相心得候者茂、其本組番頭方申渡候得共、以来者代り相心得候者江茂詰番方直々以手紙申達候、御供弓被罷出御供仕舞届之義、大手 還御之節者 御城中ノ口部屋迄参、詰番之者江相届可被申聞候、平川口・半蔵・矢来御門方 還御之節者、是迄之通相心得、銅御門与力番所まで届可被申聞候事、

右之通被相心得御申達置可有之候、以上、

十二月廿四日

御成江罷出御目付衆江届書左之通り、

今幾日 御成先弓為御用罷出申候、弓持并刀持御小人之儀、御達可被下候、以上、

何月幾日

大御番何之誰組

何之誰

当御番

御目付中

与頭方窺書

覚

御成之節御供弓罷出候者、御用無滞相濟候御届、大手 還御之節者中ノ口御部屋迄其段申上候、矢来・平川・半蔵 還御之節者、西丸御泊所江御届申上候様、先達而御達之趣相心得罷在候、且右 御成当御番日二有之候得者、前文之通り中ノ口御部屋詰御番頭江御届申上候上にて、本組御番頭江茂早速可申上、西丸私共部屋まで当人罷越、御届之義申聞候間、其段私共御泊所江委細可申上候、若 還御遅く、御仕切過二相成候得者、大手通 還御二御座候得者、中ノ口御部屋江御届申上候故、還御之節者、西丸御泊所江御届不申上、直二御宅江参上、委細御届申上、矢来・平川・

半藏 還御之節者、中ノ口御部屋江御届不申上候儀故、還御之節何レニ  
茂西丸御泊所江御門次ニて御届可申上候、  
右之通奉窺候、以上、

亥十一月

四人

御番頭方之附紙如此、

御成当日本組当番之節者、中ノ口部屋詰番之同役江相届、本組番頭江届  
之儀者、西丸其許方部屋迄以書付届被申聞、其段其許方泊所江可被申  
聞候、若 還御遅く、御仕切過ニも相成候得者、大手通り 還御之節者  
中ノ口部屋江相届、西丸泊所江茂御門継を以被申聞、宅江罷越候二者不及  
候、尤翌日為御礼宅江可被相越候、平川口・半藏・矢来御門 還御之節者、  
中ノ口部屋江届不申候事故、本組当番ニて無之共、西丸泊所江御門継を  
以可被相届候、未夕御門ベリ以前二候ハ、西丸江届として可被相越候事、

西丸御泊所江御門継を以差遣候書付左之通り、

私儀今幾日何筋 御成ニ付、御供弓罷出無滞、

何鳥射留敷、  
射留無之敷、

右之段御届申上候、尤御掛り并御供若年寄衆江為御礼参上仕候、

以上、

何月幾日

何之誰

何 何守様

美濃紙  
封下  
上書

何之誰様

何之誰組  
何之誰

覚

一、御成之節、御供弓御用無滞御勤候ハ、右御届、大手通 還御ニ候得者、  
中ノ口御番頭御部屋江御越し、詰御番頭江御届、夫方御掛り并御供之若  
年寄衆江御礼御越候上、本組御番頭江御越御礼御届可被仰達候、且平川口・  
矢来・半藏 還御ニ候ハ、詰御番頭江御届無之候故、西丸拙者とも部  
屋江直ニ御越、当御番同役共江御届可被成候、右同役方当御番之御番頭江  
御届可申候、尤御掛り并御供之若年寄衆江者、御礼御勤之上、本組御番  
頭御宅江御越御礼可被仰達候、還御遅く御仕切過ニ相成候節者、西丸御

泊所当番之御番頭江御門継を以御届可被成候、尤御掛り并御供之若年寄  
衆江御礼御勤候上、本組御番頭御宅江御越御礼御届可被仰達候、

一、御成当日当御番ニ候得者、大手通り 還御之節者前文之通り、中ノ口  
詰御番頭江御届、夫方西丸拙者共部屋江御越御届可被成候、拙者共方御  
番頭江御届可申上候、且平川・半藏・矢来御門 還御之節、中ノ口詰御  
番頭江御届無之候故、直ニ西丸拙者共部屋江御越御届可被成候、拙者共  
御番頭江御届可申候、右同様共御掛り并御供之若年寄衆江御礼御勤候上、  
御番頭御宅江御越御礼可被仰達候、

一、還御遅く御仕切過ニ相成候得者、西丸御泊所御番頭江御門継ニて御届  
前文之通御心得、其夜御番頭御留守江御越ニ不及、翌日御越御礼可被仰  
達候、尤御掛り并御供之若年寄衆江御礼者当日御越可被成候事、  
右之通御心得可被成候、以上、

亥十一月

明幾日、何筋 御成ニ付御供弓相勤候様、詰御番頭方申来候ハ、早速  
本組御番頭江相届可申候、尤相組与頭衆江も可申遣候事、

一、御供弓相心得候内、病氣之節者、兼而相組与頭衆江茂其段申達置候事、  
一、召連候家来侍・鑓持・草履取者、御成跡御同勢跡より一所ニ相廻り候、  
尤腰弁当為持候事、

一、射留有之候得者、差添之奥之衆方御目付衆江引渡申候、夫方御目付衆  
差図有之、御供仕候御供弓仁、式段江附キ御供之事、其節御目付衆江懸  
合置、還御之節も 御船江被為 召候得者、直ニ越し前之船ニて 御上  
り場迄参り候事、

『五十七』御番衆宅近火之節当御番差戻候取扱之事

一、享和元酉年十月十九日、当御番之節、夜八時頃より、飯田町辺方出火  
有之候処、今晚泊方河内猪三郎屋敷近火ニ付、退番仕度旨申聞候間、其  
段則助御番頭堀近江守殿御泊りニ付、陸尺喜十郎相頼差遣候、手紙左之  
通り、

堀近江守様  
御用人中

小長谷十郎左衛門  
戸田彦左衛門

以手紙致啓上候、然者丹後守殿御組河内猪三郎義、飯田町上住居仕候処、居宅近辺出火二付、退番為仕度奉存候間、大手通御門々出御断被下候様仕度奉存候、此段各様迄得御意候、宜御申上可被下候、以上、

十月十九日

小長谷十郎左衛門様  
戸田彦左衛門様

堀近江守

御手紙令披見候、然者丹後守殿組河内猪三郎、飯田町上住居候処、居宅近辺出火二付、退番為致度段、右二付御門々断之義被御申越令承知候、右断相济候得者、押付従是可申達候、以上、

十月十九日

右之通返翰二而申来、無程左之通り、

小長谷  
戸田

堀近江守

唯今被御申聞候河内猪三郎御門々被出候断相济候間、勝手次第罷出候様、御申達可有之候、以上、

十月十九日

尚々大手通差出候断申達候間、左様御心得可有之候、以上、

堀近江守様

小長谷  
戸田

御手翰拜見仕候、然者唯今申上候河内猪三郎儀退番之儀、御門々御断相济候二付、勝手次第退番仕候様被仰下候、御紙上之趣奉得其意

候、以上、

十月十九日

尚以大手御門通罷出候様御断相济候間、左様相心得候様被仰下候、御端書之趣奉得其意候、以上、  
右二付猪三郎即刻退番いたし候、

一、今晚出火 御城江茂風筋悪く、御老中方其外御役人登 城有之、

一、今日帰番半右衛門并御番衆五六人被致出番候、六時過火鎮り申候、

『五十八』当御番書追加

天明二寅年十月廿四日当御番

九番組

二丸当御番

病氣二付大坂在番婦  
御目見未相济不申候、

番頭

本庄伊勢守(道利)

助 番頭 北条安房守(氏典)

北条安房守組与頭

伊勢守組大坂在番婦  
御改二付相济候迄

永田四郎三郎

同

同断

久留源三郎

寅十月廿四日

御目付中

今廿四日、本庄伊勢守殿御組大坂在番婦り御改二付、相济候迄拙者共之内兩人并御番衆片類為助致出勤候様、北条安房守殿方被仰越二付、四郎三郎・源三郎罷出申候、尤右当御番書之儀、安房守殿方御目付中江御間合茂有之候由二付、右之通相認め差出置、御改相济御出番之節、猶又御引替有之候様、安房守殿方是亦被仰越候二付、右之通取取置申候、

二九当御番  
御番頭  
本庄伊勢守  
御番頭  
北条安房守  
組頭  
長尾藤左衛門  
同  
武藤頼母  
同  
内藤甚一郎  
同  
三橋鉄五郎

助

寅十月廿四日

御目付中

明和八卯年十二月廿三日当御番

式番組

二九当御番

番頭  
永井伊予守(尚伴)  
組頭  
小林角左衛門  
同  
飯高市十郎  
同  
川村権七  
同  
多田三八郎

卯十二月十三日

御目付中

今七半時過当組荒尾久太郎御番 御免、小普請入差扣被 仰付候二付、永井伊予守殿并拙者とも今日差扣伺候二付、当御番書認直し、与力番所江差遣し引替相濟申候、

二九当御番

番頭

永井伊予守

荒尾久太郎儀御番  
御免、小普請入差扣  
伺申二付、御番不能出候、

番頭

助  
小堀備中守(政弥)

右同断  
組頭

小林角右衛門

右同断  
同  
飯高市十郎

右同断  
同  
川村権七

右同断  
同  
多田三八郎

小堀備中守組与頭

介  
加茂宮太郎左衛門

介  
右同組与頭  
松平六左衛門

卯十二月廿三日

御目付中

天明三卯年五月十七日当御番

九番組

二九当御番

番頭  
本庄伊勢守  
番頭  
永井美濃守  
組頭  
長尾藤左衛門  
同  
武藤頼母  
同  
内藤甚三郎  
同  
三輪鉄五郎

紅葉山御参詣  
還御迄之内、伊勢守  
服職二付、

卯五月十七日

御目付中

七月六日当御番

六番組

二九当御番

番頭  
松浦出雲守(正勝)

都筑藤助惣領都筑彦兵衛儀出奔二付、宅為吟味罷越候二付、出番不仕候

右同断

組頭 望月八郎左衛門

同 向坂庄兵衛

同 梶惣兵衛

同 江間平左衛門

卯七月六日

御目付中

九月十五日当御番

式番組

二丸当御番

番頭 永井伊予守

組頭 小林角右衛門

同 尾崎多宮

同 朝比奈喜三郎(十九)

同 森川庄七郎

永井伊予守組江預り牛輿取負出奔二付、急宅吟味罷越候、出番不仕候

右同断

卯九月十五日

御目付中

『五十九』御成之節御番衆代合之事

一、寛政九巳年正月、遠藤備前守殿被相達候御番頭一同申合達書之内、御

規式并遠 御成之節、二丸御番所代り合刻限左之通、

五ツ時御供揃 六ツ時代り合

五ツ半時御供揃 六ツ半時代り合

一、遠 御成

六ツ時方六ツ半時迄御供揃、定式五時代り合

五時御供揃六半時早メ代り合

五半時御供揃五時早メ代り合

四番組

一、未五月十六日、当部屋寄合之節、御同役中申合左之通、

紅葉山・上野・増上寺御三ヶ所御成之節、御番所代合刻限之儀、先格之

通り与御番頭方達有之候得者、詰番所六時代り合可申旨申合候、右之趣

寄々御組之御番頭江致口達可申旨申合候、

但御番所代り合刻限之儀、不洩様以来申送り、帳江留置可申候、

右之趣六番組御組方御心添二付、猶又張出申候、

四番組

『六十』二丸組頭部屋有明断之事

一、以前之通り、私共部屋夜中有明御断被下候様仕度奉存候、

『合承知候』

一、西丸勤之通、私共部屋昼夜共家来差置申度奉存候事、

『重承知候』

右之通相窺申候、

辰十二月

四人

『六一』文化元子年十月、当組窪田小兵衛儀、老衰其上久々相勤候二付、泊御

番之儀者御用捨二而、請取方江斗致出番候様、遠江守殿被仰渡候、尤右

者庄左衛門殿申達候二付、右之通り被仰渡候、

但右為御礼、時之上下二而御番頭・同役江被参候事、

『六二』建部内匠頭殿御組方御預り興津八左衛門養女取戻御進達相濟候節、為

御礼麻上下二而御番頭・同役江被参候事、

但一通り離縁等御進達有之候節者御礼二不及候事、

『六三』文化元子年十一月、式番組同役柳原九右衛門義、親類御詮議之儀二付、

揚座敷江被遣候二付、九右衛門義 御目見遠慮被 仰付候処、二丸当御

番之節、表之御番所前 御成有之候節者、組頭兩人御番所江例罷出平伏仕候得とも、九右衛門儀者 御目見遠慮二付、差掛り 御成有之候節者如何可仕哉卜、伊賀守殿江相伺候処、其節同役者老人御番所江罷出候者不苦卜、伊賀守殿被 仰聞候事、

『六四』一、明組之節丸之内出火有之、寄場江罷出候節者、月番組之寄場江罷出候事、但月番組当御番日二候得者、对組之寄場へ罷出候事、

『六五』文化二五年

覚

公家衆并日光御門主御馳走御能、其外御祝儀御能之節、御前置御番衆差引之同役共近来相増候、加出之方江者御台所御断相濟不申、朝夕共自分弁当用意仕、御番頭御部屋二而弁当遣心申候処、其後五人前御料理御座候節者、右御料理被下、自分弁当者朝斗用意仕候、然ル処去ル子年九月五日、日光御門主御馳走御能之節、竹中遠江守殿・堀近江守殿両御組方出入御座候節、差引之同役共加出之分迄御台所御断相濟、朝夕とも御台所江相廻申候、依之以来可相成儀二候得者、出役仕候人数本出・加出共御台所御断相濟候様仕度奉存候、此段御組之同役共一同申談候上奉伺候、以上、

中沢惣右衛門

三枝甚四郎

木造清左衛門

石原十郎右衛門

『右之通相伺候処、以来本出・加出共、朝夕共御台所御断可成旨被相達候事、』

『六六』文化二五年

覚

一、惣出仕二付廻勤御座候節、当御番日二御座候得者、近来翌日廻勤仕候、

右翌日若十七日之外、御精進日二御座候而も、矢張廻勤可仕候哉、

『丹羽氏昭』式部少輔殿附紙

翌日御精進日之節者、即廻勤及候、

一、右翌日廻勤可仕候処、若病氣差合等二而、難罷出御座候得者、其段御番頭迄申上候様可仕候哉、

病氣差合等二而廻勤難致候得者、屈可被申聞候、

右之趣、是迄心得方治定不仕候二付、御組之同役共申談候上、此段奉伺候、以上、

己二月

中沢惣右衛門

三枝甚四郎

木造清左衛門

石原十郎右衛門

文政十亥年二丸寄合書拔

一、恐悅伺御機嫌等二而惣出仕有之候節、当御番之御組御同役、翌日御用番江罷越候儀、此度御番頭一同被仰合、向後罷出二不及候之旨、新庄越前守殿四月月番之廉ヲ以可申達候之間、六番組方御通達有之候、右之趣以来為心得記置候之方可然与、今日申合記置申候、

亥閏六月廿日

太田八十八

『六十七』文化二五年

一、二条・大坂在番之節、取人為代人罷登り候御番衆定式休明出立之砌、容易二日延不相願事二候処、近来多分休明出立之節、自分病氣看病等申立、追々日延相願候、以来可相成丈日延願不申候之趣可被申渡候、且又右之面々出立前日延相願、又候自分病氣看病等二而、先下り相願候仁茂

有之、如何之事二而、向後者天明三卯年七月申合有之候之通、出立前日延相願罷登候仁者、先下り之儀相願候共、決而承届申間敷候、是迄区々相成候二付、猶又申合候、

但右之趣、天明之度申合候節茂、組頭中江申達置候上者、仮令御番衆方願出候共、難承届儀与、直二組頭中江其段可被申間候筈之処、其儀無之兼而申渡置候向も有之、如何之事二候、向後右体之義者得与被相弁被申間候様、組頭中江急度可申渡置候、

『六八』

一、二条・大坂江為取人罷登候御番衆之内、帰府後御改以前本組江未差戻候内致病死候得者、下り番頭二而跡目願等取扱、其後御改相濟候者本組戻之姿二而、其当日方跡目被 仰付候迄之内、万事本組番頭二而取扱可申候、若又本組番頭在番二候ハ、月番頭二而取扱可申候、尤御改相濟候当日下り番頭方本組番頭又者月番頭江其段以手紙申遣候、

『六九』

一、組頭衆并御番衆子供御番入相願候節、番頭逢候而様子見申候上、右願之儀申上、御帳江茂附上ケ可申段、明和八卯年三月申合有之候処、近来区々二相成候二付、向後者御番入相願度者有之候ハ、先其番頭逢候儀申上、番頭逢候上、御番入願書為差出様子見請候上、御番入相願御帳江茂附上ケ可申候、尤右之趣兼而組頭中江も可被申渡置候、

右者文化二五年十一月廿三日、月番於高木主水正宅月次寄合之節、建部内匠頭・松平丹後守・永井大和守・細川長門守・丹羽式部少輔・巨勢日向守・溝口辰藏、主水正出席申合候、

文化十四年十月六日、近江守殿猶又左之通り被相達候事、

口達之覚

一、組頭衆并御番衆息御番入被相願候合候得者、番頭逢申上、逢濟候上二而右願書被差出候様、前々文化二五年十一月、為心得組々江相達有之候処、其後区々二茂相成候哉二付、猶又右之趣各御心得、御番衆中江通達可有之候事、

西十月

『七十』

一、二条・大坂在番道中二而、御番衆病氣之節、江戸表江差下候砌、差添御番衆箱根・碓氷御関所手前下り候節者休日数五日、右御関所手前下り候節者休日数三日、休為致出立候与申合候、但右之趣組頭中江申渡置候、右者文化二五年六月廿一日、同役中申合之、

『七一』一、本番之番頭御用有之、朝之内致登 城候節心得、助之儀当番書江者認出不申候様、組頭衆并与力共江茂可申渡置候、右者文化二五年八月十五日、同役中申合之、

『七二』一、二条・大坂在番登り下り候節、前々方道中二而御茶壺行合候節者、先達而相知候儀ゆへ、建場二而見合罷在宿之内、又者野間二て行合候節者、乗物居置御茶壺通り過候而、罷通候而者、旅行差支二茂相成候間、御茶壺行合候節、片寄被召連候者笠為脱候様、去ル十五日御目付中川勘三郎江申達置候、但道中ノ道狭キ場、山坂等二而者、乗物留被置候様、且乗掛等者道中道広キ所二而片寄、御茶壺通過候之様、可被致候、

『七三』一、御番頭明組之節、番頭御番前日、明幾日御番、拙者其御組江御番罷出候与申事、明組之月番同役江申来候事、若其沙汰前夜迄無之節者、明組御預り之月番頭江明組之月番同役方承り二遣候事、

『七四』以手紙致啓上候、去月太田志摩守殿江御目付松平伊織方、二丸当御番之者、出火之節火事羽織着用之曲尺合、并寄七場江相詰候者、着服之儀、書付ヲ以問合有之、下ケ札ヲ以被答候書面之写被達、右之趣相心得、御組々江茂追々御通達申候様、志摩守殿被御申聞候二付、右写別紙迄通掛御目二申候、且又寄場江相詰候者、先々之通火事装束之下江股引被用候様、可心得旨為念用方ヲ以被御申聞候、此段及御通達候、以上、

十月九日

中沢主税助

御組々

御同役中

御目付衆方之書面

御城内近所出火之節、当番之面々火事装束着替、又者平服之上江火事羽織等着用之御曲尺合、且又非番二而寄場江被相詰候分者、着服差引茂可有御座候間、其訳巨細御認御差越有之候様致度候、尤組頭衆・御番衆并与力・同心着服之儀も是又致承知度候、依之御達申候、以上、

九月

松平伊織

下ケ札

一、出火之節、二九当御番拙者共組頭・御番衆、御殿向江煙懸候程二相成候者、平服之上江火事羽織着用之心得、尤火事之場所に寄、其節之様子次第見斗、番頭及差図候事も可有之候、

但拙者共出番刻限以前出火模様二寄、致登 城候節者、宅方火事装束二而罷出候、

一、非番之節寄場江相詰候節、一同火事装束相用申候、

但同心共之儀者对之羽織為着申候、

(文化三年)  
寅九月廿九日

月番

太田志摩守

『七五』御番頭申合書

一、二条・大坂登道中木曾路相成候節、御番衆并取人・代人病氣等二而日延、跡方登候共、中仙道差登可申候、取手返之分者東海道登候様可申渡候之事、

同

『七六』一、本番之節番頭御用有之、朝之内致登 城候節心得、助之儀当御番書江者認出不申候様、組頭并与力共江も可申渡置候、

『七七』一、番頭被 仰付御引渡之節、十二番組本庄近江守殿跡森川兵部少輔殿御

引渡之節、右組鎮目半次郎事、子父看病断相立申候、

但御引渡之節、本組下り休中永残之仁御預り、組当御番日二而も御引渡之方江罷出候事、

『七七』廻り方初而被 仰付候趣、其後度々被仰渡候御書付等写、廻り先二而捕者仕御座候届書等、

寛永六年十月七日、夜廻り初而被 仰付候、

御書院番

八人

御花畑御番

七人

大御番

十五人

都合三十人被 仰付候、

一、廻り之儀、火之元廻り被 仰付候而、夜斗相廻申候処、其後寛文二年十二月二日、御書院番・御小性組・大御番老組六人ツ、昼夜廻り被 仰付候旨、於 殿中御老中阿部豊後守殿被仰渡昼夜廻申候、尤雪雨降候節者、廻り候儀延引可仕候旨被仰渡候事、

但此時分者 御城江被為 召被 仰付候由、

一、雨雪降候節者、廻り不申候而茂御用捨ヲ以、従前々勤二相成候を以、其断御帳二書載可申候、廻り之刻限天氣能廻候者者判形仕、雨雪降り廻り不申候ハ、右之通断書可致旨、延宝二年寅二月晦日、御番頭戸田相模守殿於御宅御同役方御寄合之上極り被仰渡候後、雪雨降候節者相廻り不申候、

御書付

一、夜廻之面々廻場ニおゐて火事出来候節者其場江罷越、不審成者有之候得者相改、様子ニ寄召捕候事、

一、惣而火事場ニおゐて火消之外火事場江も不參、立廻り候者有之候得者、追払可申候、若盜賊ヲ仕候者慥ニ及見候ハ、討捨に為致候事も不苦候事、

一、火事場江風下之者、火の粉消候様可申付候事、

右者延宝五丑年正月、御老中方被仰渡候旨、御番頭酒井伊予守殿被仰渡候、一、宝永六巳年十月、夜廻初而被 仰付候後、慶安二年壬九月廿八日、於

御殿久世大和守殿被仰渡候趣左之通、

- 一、夜廻り之者老入ツ、二而、両方被分先ニ寄合候様、廻り可申候、
- 一、式人之内老入煩有之候ハ、廻り所不残廻り可被申候、式人共煩仕候者、其次之当番操越可被申候事、

一、夜廻等之節、境目之儀、絵図面ニ而被仰渡候事、

- 一、明暦三酉年、大御番方廻老組六人ニ相定り、六組之節者仮廻り老組方式人ツ、都合四十八人ニ相極申候、

一、寛文二寅年十二月二日、今日御老中方被仰合候者、毎年冬方春迄之内火事繁々候間、弥精入夜廻兩人ツ、廻可被申候、出火火附体之者有之候由、被及聞召候之間、再篇茂廻可被申候、慥ニいたつら者で見届不被申候共、不審成者於有之者穿鑿可被致候、少しも卒爾之儀有之共、其段者不苦候由被仰渡候、

一、挑灯ニ紋附を為持廻り候者、辻番人又者火消等も油断有間敷候間、紋無之挑灯為持道廻り歩行候様、可被致候様被仰渡候、

一、雪降候時も仮廻二而も氣遣ニ存候程に風吹候刻者、夜廻り之衆不残廻可被申候様被仰渡候、

一、寛文三卯年三月、御老中方被仰渡候者、方々ニて立門ニ立、或者町等ニ而茂いかつなる体不作法者と見たる面々、夜廻り衆江申渡、右之通り之者有之候者、辻番江申付追払可申候、其上ニ而違背之者有之候得者、射て寄からめ捕候而茂不苦候旨被仰渡候、勿論辻番之者致油断、不作法之体及見候得者可為曲事事之由、相断可罷通候事、

寛文七未年二月六日

定

- 一、不限何方ニ 御城外被為 成候節、承出し次第、役所当番ニ不限廻可申候事、
- 一、惣而 御城外江茂折々見廻り可申候事、
- 一、御曲輪之内大火出来候得者、非番たりとも可相廻候、外曲輪ニ而大火之時も可罷出候、少々之火事ニ而も 御城へ風悪く候者、可罷出候事、

右之御書付久世大和守殿被成御渡候旨、戸田淡路守殿御達有之候、

寛文八申年十一月廿五日久世大和守殿被仰渡候趣、左之通り、

覚

一、上意之趣者、当月・来月・正・二月火事繁く有之候間、弥無油断廻可申候事、

一、風吹候時分者非番・当番共罷出可申候事、辻番油断之体相見候者有之候者、其屋敷之者呼出し断可申候、其上ニ而許容不申候得者、番頭江可申達候、

一、先年茂被仰渡候通、怪敷者有之候ハ者捕可申候、仮捕そこない候而も不苦候、

一、怪敷者相改、捕候程ニも無之者有之候得者、辻番ニ申付為送可申候、自分怪敷者と存、怪き者ニ候得者、懷中をも相改可申候、

一、附火いたし長屋杯焼立候得者、其近所之辻番所之方江掛り可被申付候事、夜廻り之者自分用所ニ而罷通候とも、辻番油断ニ相見申者有之候ハ者相改メ罷通可申候、怪敷者見出候得者、廻り番之時之様相改可申候事、

一、怪敷者捕候様ニ跡々被 仰出候得とも、只今以捕不申候由、油断ニ被為 思召候、向後弥入念見廻り可申候事、

一、寛文十二酉年五月八日、於 御城久世大和守殿牧野佐渡守殿江被仰渡候趣左之通り、

夜廻昼廻被申渡候衆江申渡候覚

一、夜廻昼廻之時分、何ニ而も不審ニ相見候儀有之者、判形之節其所具ニ書付可申候事、

一、夜廻り之時分長屋小屋行申、大二火見候者、其家之門番江相断可申付候、辻番油断ニ候ハ、是又断被通候事、

一、自今以後夜廻り昼廻各別ニ不致、夜廻中方昼廻可被致候事、

一、大御番・御書院番・御小性組切ニ被致、番割山之手神田組分ケ、老組方式人ツ、三組ニ而夜廻昼廻可被致候、昼ハ夜廻之御番間ニ老度ツ、廻り可被申候事、

一、煩有之候ハ者、組頭并仲ヶ間之者方江誓文状ニて、不參無之様相勤可

被申候之事、

- 一、宵廻り晝廻りハ一夜代り可被致候事、
- 一、元禄十五年十一月廿二日大地震ニ付、同廿九日大御番頭戸田土佐守殿(忠定)御宅ニ而被申渡候ハ、此度老組方老人ツ、増廻り被 仰出候、新規廻之義故、日々不絶廻候様被申合相勤候様ニ、同十七申年正月晦日増廻り今日限ニ而 御免、翌朔日より勤可仕旨、戸田土佐守殿被申渡候事、
- 一、宝永六申年三月九日、廻り前々之通、式組六人ニ被 仰出、遠廻も三月末ニ組割抱果相立、四月朔日方勤候場所等只今近ニて通る也、
- 一、享保十五年三月、水野和泉守殿(忠之)江番頭衆方差出候書付左之通、
- 一、大御番方遠廻り、古来王子板橋可廻候処、(徳川家)殿有院様御代道方 御成無御座候間、右場所迄相廻候ニ不及旨被 仰出、近頃ハ道方之 御成茂被為 在之ニ付、古来之通王子板橋迄相廻候様可仕哉、奉伺候、

三月九日 月番 諏訪若狭守(頼秋)

御附紙

御成之節、古来之通可被心得候事、

- 一、同年三月廿三日、水野和泉守殿(直道)江溝口撰津守殿・諏訪若狭守殿(頼秋)・森川下総守殿被相越被申達候者、大御番方昼夜廻り前二四拾八人相廻候処、此度御沙汰も御座候ニ付、先規之ことく八十人相廻候様可仕候哉、尤廻り之節十手用意仕候様ニ可申渡、我之段相窺候処、御人増ニて不及十手用意之義者、勝手次第可致ニ被仰渡候事、
- 一、同年五月、王子板橋廻り被仰渡候、王子ニ而者金輪寺、板橋ニ而者問屋呼出し性名書付相渡候由、右増廻り之儀者小菅 御殿出来し御泊鷹野被遊節、其後 御殿御焼失ニ付、御泊鷹野相止申候故、増廻りも相止申候事、
- 一、道廻之節、中野宝仙寺江各面記候事、享保年中被為 略付候而、被仰出候由、小石川・雜司ヶ谷廻り者各面記候所元来無御座候、尤中野江御成之節、廻り各面帳面 御覽有之候よし、
- 一、享保十一年午年、小金野御鹿狩ニ付、御番衆被申合候趣左之通、諏訪

若狭守殿・板倉下野守殿(勝浮)組方昼夜廻り勤方、

- 一、昼夜廻り道廻老組方式人ツ、相極廻相勤可被申候、勝手ニ被申合可被相廻候事、
- 一、廻り場相替候義有之時分、御成所日者番所組頭衆江向寄次第届可被申候、
- 一、安永五申年四月、日光 御社参 御留守中、近廻三拾六人無非番毎日相勤、道廻拾式人無非番毎日相勤候事、
- 一、天明六午年、牧野越中守殿被越御渡候御書付写左之通り、
- 一、組々御番衆之内、定廻り并仮廻り之面々唯今迄無慢怠相廻候事ニ候得共、近來世上騒々鋪候間、尚又申合無油断相廻候様可被申渡候、尤小身之面々ハ供連茂省略いたし、又者病所等有之、馬上ニ而難相勤分者步行ニて相廻り候而も不苦候、且廻場之内辻番人呼出し声を懸ヶ候時分、辻番組合頭取被相達、頭取之面々方御目付江相達候様、辻番頭取之面々江申渡置之間、辻番人名前承候而、廻之御番衆名前等為申聞候様可申渡候、尤廻り先ニ而怪敷者有之候得者召捕、其所之辻番又町並二候ハ、自身番江預ヶ置、其後町奉行迄可被相届候、辻番江者其場所之頭取方月番之町奉行江遣候様可致候、左候得者町奉行方請取候心得ニ而可被差出候間、頭支配江不及届、引渡候様可致候、捕違之分者不苦候、但自身番所方町奉行江差出候事者、平日之通取斗可申候事、右之通可被相心得候、委細之儀者御目付山川下総守江可被渡候、

六月

寛政三亥年六月出ル御口達之趣左之通、

- 一、昼夜廻之仁怪敷者召捕候節、是まで両町奉行江引渡候得共、已來者両加役江も引渡候様、松平越中守殿被仰聞候之由、御目付中川勘三郎被相達候、

寛政四子年正月、松平和泉守殿被成御渡候御書付写、

- 一、御番衆廻相勤候面々、唯今迄怪敷者有之候得者召捕候処、以來者博奕打候者をも見懸ヶ候得者、心付ヶ向寄之町奉行・火附盜賊改之内江引渡候様可被申渡候、

御目付桑原善兵衛達書写

御番衆昼夜廻之節、前々辻番所之内、向寄二而式、三ヶ所ツ、定メ置、何御番何之誰と申儀承置、毎月末ニ至り拙者江相届候処、近來色々相成不届、辻番所ニて相届候敷、有之候間則別紙辻番所六ヶ所帳面致進達候間、御番衆廻り之節、此通之辻番所被斗性名被申聞候得者、右辻番所頭取方月々拙者方江相届候間、猶又此段為御心得御達申候、

召捕者致候節、番頭・組頭江届候覚

覚

私儀今幾日敷、昨夜敷、何廻之節、廻り先二而召捕候囚人

何町敷

誰

何歳

右之者何所ニ而召捕、直ニ其所何之誰頭取辻番所敷、又者何町自身番江相預申候、右召捕申候囚人雜物等、右之面々家來敷月行事五人組敷江相預、一札取置申候、囚人雜物左之通り、

一、何品

一、何品

一、何品

右之通候、以上、

何月幾日

何之誰

右之通相認メ、御番頭并与頭江届差出候事、尤町奉行所江差遣候送状并自身番、或ハ年番頭々取家來方取斗候、一札茂持参い多し御番頭用人江為見可申候事、

文化四卯年、昼夜廻り山角貞之丞、是迄廻り方心得方茂有之候得共、区々ニ相成候間、以來右之通相心得可申哉之旨、帳面差出候間、同役とも一覽之上存寄無之旨申聞候間、則貞之丞江右之趣申達、已來ハ先日右之通被相心得候様、尤右之いつれ非常之儀、其時之時宜ニ從ひ被取斗候様ニ被申達候事、

昼夜廻心得方

一、昼夜廻御番衆御役出御番替、病氣、死去、御引替相願候節、代被仰渡候御番衆初而昼夜廻相勤候者ニ候得者、供連等も御座候間被仰渡候、從

翌日日敷三日相休候上廻相勤候事、

但右休中仲ヶ間助相勤申候、

一、昼夜廻り御番衆父母妻子大病ニ付、難見放候節者当病之節ニ准し、廻り日三日ハ相手助ニ仕、其後病人同篇ニ候得者、父母者廻り日五ツ、妻子ハ三ツ看病御断申達候事、

但看病者仲ヶ間助相勤申候、且看病之日限相立、当人病氣ニ候得者、

廻り日五ツ病氣御断申上候二而、快氣不致候得者退役相願可申候事、

右之趣寛政七卯年九月、伺相濟候得共、病体ニ寄仲ヶ間申談作嘘も有之、可然旨其節御月番齊藤彦右衛門及被申聞候事、

一、昼夜廻り相勤候者、廻り先二而火之元寄方附、若怪敷者見請候節者、様子相尋申口不相分不審ニ候節者召捕、其所之辻番又者町並ニ候得者自身番江相連、組合辻番ニ候得者頭取年番家來呼出囚人相預ケ、右家來方左之通預り書付取可申候、

覚

何町何丁目

家主何店

誰

何方

此者今幾日御廻り先二而被召捕候二付、何方頭取何之誰組合、辻番所江御預ケ被成継奉願候、尤何之誰方相連御月番町御奉行所江御届申上請取候、同心衆被越候得者無相違御渡可申候、為後日如此御座候、以上、

頭取何之

何之誰家來

何之誰印

何月幾日

大御番何之誰様御組

何之誰様御内

何之誰殿敷

御家來中敷

囚人雜物有之候節、別紙左之通

雜物

一、何々

一、何々

右幾品継手請取候、同心衆被罷越候ハ、引渡可申候、以上、

何 何月幾日

前同断

宛所

前同断

自身番江同人預ケ候節者、町奉行所江送状相認メ可達、月番御役宅江召連候様月行事時役共江申渡、是又請取有之候事、右送状左之通、

日向

大御番

当番何廻

何之誰組

何之誰

今幾日拙者昼敷廻り先何町何辺ニ而怪敷者見当候間、様子相尋候処

申口不相分紛敷御座候ニ付召捕別紙ニ有、其御役所江差出申候、右

之趣然者番頭江茂申達候、以上、

何 何月幾日

何之誰

囚人雜物有之候得者、別紙書面之内江入可申候、左之通、

覚

拙者廻り先ニ而召捕候囚人

何町何丁目敷

家主誰店ニ居候、

誰

何方

雜物

一、何品

一、何品

都合幾品

右之通御引渡申候、以上、

何 何月幾日

何之誰

右日向半切ニ認メ、一所ニ封し入、旅封上書左之通、

町奉行  
御役宅

大御番何之誰組

何之誰

自身番方取候一札左之通、

一札之事

無宿敷

誰

幾ッ

右之者御廻り先ニ而被召捕、被 継手奉請取候、只今敷御月番町御奉行御役所江被召連候様被仰渡奉畏候、万一取逃候者、何様之越度ニ而茂可被仰付、為後日仍而如件、

何 何月幾日

何町何丁目

月行事印

五人組印

何之誰様御組

何之誰様

御家来中様

雜物有之候者前文同断、右書面之内江認入夜之可申候事、

右之振合ヲ以取斗候間、即刻御番頭并月番組頭江御届、左之通被認持参

御届可申候事、

半紙日向

覚

私儀今幾日当番何廻之節、廻先ニ而召捕申候囚人、右之方何町ニ而怪体見受候ニ付様子相尋候処、申口不相分紛敷御座候ニ付召捕、其所何之誰頭取辻番敷、何町自身番敷江囚人并雜物共相預、誰家来敷月行事五人組敷預候、一札取参申候、右雜物左之通、

何町敷

誰

幾ッ

雜物之品

一、何品

一、何品

都合幾品

右之通御座候二付、此段御届申上候、以上、

何月幾日

何之誰

右之通相認メ御番頭并月番御組頭江持参差出候事、尤自身番或者頭取家  
来方取候、一札も持参御番頭用方江為見候事、御相組与頭江も手紙ヲ以  
荒増先御届申候而可然候、

但頭取家来自身番方取候書付一札写二茂差出候得者宜く候得共、手  
間取御届ケ延引候而者不宜候間、時宜二寄可然候事、

右之外非常之儀御座候節者、時宜二寄召連二而御届申上候儀可有御  
座候、都而差掛り候節、其場所方直二御届罷出候節者、廻り出勤之  
段二而御届罷出候而茂可然哉候、

一、廻り先ニおみていかつ成体不作法者見受候節者、其所辻番江申付追払、  
其上違背之者御座候ハ、馱ニ寄捕候義も不苦候事、

一、辻番人油断之体不作法之体及見候者、可為曲事旨相断可罷通、若右体  
之儀相見候者其屋敷之者呼出し断可申候、其上二而許容不申候ハ、御番  
頭江可申達候、左候ハ、御目付江茂相違候事之由、  
但御目付江相届候儀者時宜二寄取斗可申候、

一、博奕打候者茂見当候者召捕候事、

一、夜廻之時分長屋小屋以下大二火見ヘ候者、其家之門番江相断可申候、  
一、廻相勤候者、私用ニ而通之節茂廻り番之通諸事相心得候儀不苦候事、

右五ヶ条之趣者、先年御書付出候事之由及承候、町並自身番茂右二  
准し可然候、

『七十八』

一、文化四卯年三月廿日、大的 上覽之節、射手性名前後二相成候二付、  
御番頭并小長谷十郎右衛門・戸田庄左衛門 御目通差扣被 仰付候旨、  
四月二日当御番之節、王子筋 御成有之候処、大隅守殿右 御目通差扣

中二付、当御番・加番無之、介建部内匠頭殿被相勤候旨前夜達有之候処、  
当御番書振合無之候間、左之振合認大隅守殿江庄左衛門持参、用方ヲ以

相伺候哉、右之趣二而可然旨被御申聞候二付、右之趣相認差出可申候処、  
天氣相二付前夜 御成御延引相成候間、当前之通大隅守殿当御番被相勤

候間、左之当番書者差出不申候得共、已来右様之節之ため御番頭江も為  
見置候事故、左二記置候、且 御城二丸銅御門通 通御二者無之候得共、

御道替二相成候節、俄二助建候而者間二合不申候間、遠 御成之節者当  
御番助合二相成申候、

一、組頭茂四人共 御目通差扣二候得者、他組方助とも可相成候得とも、  
此度者兩人ハ差扣無之候間、組内二而振合二相成候事故、当番書者認入  
不申候、

二丸当御番  
今日王子筋江  
御成二付、  
御目通差扣中故出番不仕候、

番頭

本多大隅守

番頭

建部内匠頭

組頭

小長谷十郎右衛門

同

戸田庄左衛門

同

門奈半右衛門

同

坂本伊織

卯  
四月二日

御目付中

『七九』

一、文化四子年十一月廿七日、大隅守殿江同役兩人被招候二付、月番伊織  
并庄左衛門罷出候処、左之通書付此度御同役方被申合候よし、尙通之方  
者御番衆江急度相達、以後跡登之節、其都度二猶又相達候様被御申聞候、

書付左之通、

一、二条・大坂在番取手返并代人・代々人其外残役等都而、番頭同道二無之、跡方被罷登候御番衆、旅中おゐて病氣等二而旅行難被致候節者、勢田駅方関東之方二候得者、其駅二而致療治、江府江戻り致養生候上、在府月番江相伺得差図、被立戻候儀者先格茂有之候事二而、右伺等有之砌者、病体次第承届申候儀二候得共、右体之先格有之候通、容易之儀二被心得伺被申越被立戻候而者難相濟候事二候、少々之不快者押而旅行可致義勿論之事二候、実々旅行難被致儀、可成丈ヶ者此表江立戻り被申間敷事二候、此段心得違無之様二被存候、

但病氣二候通此表江伺等不被致、我等共差図茂無之内、旅中方被立戻候儀者有之間敷事二候、

右之趣、御番頭中江不洩様御申達可有之候、

西十一月

別紙相達候通、二条・大坂為在番御番衆老人立跡方被罷登候節、旅中二おゐて病氣之届此表江立戻、養生被致度旨伺等被申越候て、先格之儀二候間、病体次第可承届候得共、是迄度々茂無之儀、其上右体之願伺等有之候得者、承届可申段改候而相達候儀も無之候間、是迄組々心得方色々二茂可有之哉ト存候、別紙申達候通、老人之旅行之砌、病氣二候得者其駅二而致静養、弥旅行難成難儀二及候得者、此表江伺我等共差図次第被立戻候儀、此度改メ而相達申候二付而ハ、窺さへ被致候得者被立戻候儀候、客日而相成候事ト被心得候而者其心得違と相成候、病氣候者取申大切之御番二被罷登候儀、可成丈ヶ立戻り被申間敷事二候間、以来老人二被罷登候、御番衆江者立前日敷前々日、各方宅江被相振、旅行前々方之心得方者勿論之儀、其身病氣、亦者同道人病氣之節心得方得ト御申含可有之候、尤在府中病氣二て立前々日迄茂致静養、押而出立之仁も有之儀二候間、左様之節右番之衆江被申含、右之趣御申含可有之候、

一、老人出立之節、旅中二而病氣之節者当人方此表江伺等二申越義勿論之事二候、同道人有之節者其仁附添、其駅に逗留看病被致世話、当人并附添之仁方茂此表江伺有有之候、三人以上同道之節者病人江老人付添、残

者定日之通り可被罷登候、

一、前段二申達候、老人之出立之仁江申含候儀者、本組二而御申達可有之候、先残役等出立之節者月番二而差引之事二候間、其月之月番組江可被申達候、右之趣各御心得、御番衆中心得違無之様、御取斗可有之候、

西十一月

〔八十〕  
二丸御番方部屋御行灯断之事、二丸御留守居徳力金十郎方二番組榎原九右衛門江、内々心得のため借用有之候二付、左二留置、

見出し小札

御同朋頭中

水野中務(忠篤)

二丸御玄閑遠侍并部屋之御行灯、有明之外半夜分者六半時二坊主衆立合候而、前々方改為引來候処、大御番部屋江者半夜御行灯も出間鋪義与、大久保八郎右衛門被心得候よし、坊主衆組頭始メ心得方致承知度段、八郎右衛門被申間候間、左之通心得罷在候段、前々御達書写、当月九日差出候処、大御番衆部屋之儀者書面二無之不明二付、猶又相札申間候様被申間候間、再応書留相改候処、左之御達書之外二者相見不申候得とも、寛政八年十二月之御達書二、御徒頭部屋二有之候通与有之候得者、大御番衆部屋江茂六半時迄ハ御徒方部屋江差出候通、半夜御行灯差出候義に可有御座候、且又二丸二而御行灯出候場所取極帳面茂、寛政二年以前大御番部屋半夜老ツ与留有之候、然ル処前文之趣札二付、如何相心得可然哉御問答仕候、御附紙二而被仰聞候様仕度奉存候、以上、

卯七月

御同朋頭

寛政戊辰(二年)四月十一日

御同頭中江

一、二丸御徒番所

有明老ツ  
半夜老ツ

一、同御徒頭部屋

有明老ツ

一、同御徒方部屋

半夜老ツ

右之通御差出可有之候、依之申達候、

神保喜内

寛政八辰年十二月十五日

御同朋頭中

一、此度大御番頭二丸相勤候様被仰渡候二付、是迄御徒部屋二有之候通、大御番組頭部屋江矢張有明有之候様存候、依之申達候、以上、

横田重郎兵衛

佐久間左京

十二月

下ケ札

書面之通与、横田十郎兵衛・佐久間左京相達候通、御徒頭部屋二有之候通被相心得、是迄之通御徒方部屋御行灯半夜分老ツ、大御番方部屋江差出可然儀卜奉存候、

右書面之宗十郎殿被遣、則大久保八郎右衛門殿江掛御目申候、以来左様御心得可被成候、以上、

卯九月廿二日

栄春

『八二』、十二月十五日、式番組二而榊原九右衛門殿被心得、是迄正月元日、二

日御番所代り合刻限区々二付、太田志摩守殿用方江泊所二而被問合候処、

元日、二日代り合刻限之儀者定式明七時交代之旨、先格留二有之候由答候由二而候、

『八三』

一、寛政十二庚申年十一月五日、二丸泊所二而菅沼伊賀守殿江差出候由左之通、

見出し

書付

諸星明之丞

徳力金十郎

宮重作十郎

牛奥新五左衛門

寛政三辛亥年十月十三日、松平但馬守殿御組同役共江被仰達、御組之

同役共江申達へく候旨、御口達之趣左之通、

御組之同役共在番御暇且在番帰り御目見之節、并平日差引二而御本

丸江登城仕候砌、銘々挟箱御長屋御門外江差置、式日二者御門番・

御詰番組同役中右之場所二差置、其外二者同役共者前々之通、銅御門

外二差置申度旨、御組々御番頭江同役共より申上置候二付、九月御月

番米倉長門守殿・御目付中川勘三郎江御懸合被成候処、差支之儀無之

旨勘三郎及挨拶候二付、右之趣御組々同役共相心得可申段被仰達候、

右之通私共相心得罷在候、以上、

諸星明之丞

申十一月

徳力金十郎

宮重作十郎

『八三』  
寛政十三酉年正月二日新五左衛門留

拙者共下乘迄供連之儀、支配向江取調申達置候得共、先是迄之通可相心得旨、昨日御目付羽太庄左衛門・小山新三郎殿江被申聞候由、御同人被申聞候間、此段御承知可被下候、以上、

二月二日

中川惣左衛門

近藤石見守殿右御組同役共江被達候、御番頭御申合書、

『八四』

一、組頭衆煩差合二而三人二相成候得者、朝方兩人ツ、可被詰候、兩人煩有之候得者、残り兩人二而詰切可被致候、三人煩二而老人残二相成候者、其日之詰番組之与頭助二罷出候様可致候、

但当日二至り組頭俄介之義者、当番之番頭方其日之詰番之番頭江、

手紙を以直二助之義可申達候、尤助立廻状者唯今迄之通、月番之方

江可遣候、左候得者從月番助立可致、廻状俄助之事二候間、詰番之

月番頭月番方廻状無構組頭江助之義可申渡候、

右者享保元申年九月廿三日、相談之上相極候事、

一、組頭不殘煩差合等二而、助合之時分二他組之組頭斗二而勤候事二候間、

此節者当日之詰番之組頭方式人、前日之詰番組之与頭方式人、都合四人助相勤候様可致候、右両組与頭病気差合等有之、兩人御助難出砌者、詰番之順跡江操り助取可申候、猶又煩差合多候得者、右之順を以一組式人、或者老人ツ、二而も、兎角四人都合致候、当組之組頭助相勤候様可致候事、但永助之節者、初助相極候組之与頭者除之、助不相続之様、月番之者可相心得候、

一、組頭衆煩差合二而、老人相殘候介之義者、享保元年申九月廿二日申合有之候通、可相心得候事、

右者享保十九寅年十月十一日相定候事、

右書付七番組江近藤石見守殿被相達、拾番組江者右組方通達いたし、右両組者右之通相心得候之處、其以後老番組方御同役四人助之義も有之、又者兩人二て相濟候義も有之、区々ニ付右書付之趣、組々方御番頭江以來心得方告達二而可致問合段申合候、

但七番組・十番組右両組江者、前文之通り先達而達有之候二付、不及問合候事、

右寛政十一未年十月十九日申合有之候、

『八五』

一、此度御番頭明ヶ詰番二相成候二付、以来御能出人等之節、詰番組方之出役等も無之候間、是迄詰番組御同役心得方之義、矢張当御番方三日目御組二て、唯今迄之通相心得取斗可申哉之事、

一、御同役病気差合等二而、老人勤と相成候節、他組助之義明番方助相勤候趣二も可相成候間、是迄当御番方三日目、御組方最初助立相心得候様致度候事、

右之趣、二条・大坂御同役江も申登せ、返事来着次第、御組々方御番頭江可申達候事、

御番頭附紙

『書面出役之義者、是迄詰番組方被罷出候義ハ、書面之ヶ条二不

限、当番三日目之組与頭方可被致出役候、

右文化四卯年六月五日申合有之候事、

文化八未年七月、二条在番中江府御同役申合有之候由左之通り申来候、

申合之事

『八六』 御玄関通当 御殿江被為 成候節、御番所人数之義、心得方区々ニ相成候間、以来組頭兩人御番衆拾式人詰合候様申合候、

未七月五日

小宮山八五郎

同断在番中方申来候、左之通、

『八七』 水稽古肝煎之義奉願候書付

三浦勘右衛門

覚

大御番方水稽古肝煎之義、最初筒九新助・和田千太郎等江被仰渡候處、其後稽古中絶二て、肝煎之義退転仕候得共、稽古中世話為取締老人被仰渡被下候之様仕度奉願候、乍然在番等も御座候事、肝煎被仰渡候ハ、在番罷登候節は在府之者之内江助被仰渡候様、此段一同奉願候、以上、

未六月

三浦勘右衛門

右之趣、老番組御同役中方申来候二付、存寄無之段及挨拶、左候得者右御組被申立候由二有之候、委細ハ在番中其所之留二認メ置候事、

『八八』之

一、文化八未年、二条在番当組江駒井藤右衛門、取手返罷登道中二而病氣有之、小田原駅二而七月廿四日方同廿六日迄、同駅二保養いたし、快候上罷登候、其節別段伺等無之、其駅方書状差出候迄二て事済候、猶其節之留帳二委細認置申候、

『八十九』 水馬水稽古世話役之儀、先達而被申立候二付、此度御番頭江相達候書

付左之通、

周防守殿被相遣候書付

組々水馬并水稽古罷出候節、是迄世話取締之者無之候得者、万一心得

違之義も出来候而者如何二付、水稽古罷出候者、四人迄者老人、五人方九人迄者式人、拾人方以上八三人、世話取締之者、其節ニ水馬掛り之者方相達可申候事、

七月十二日被申渡候覚

三浦勘右衛門

右大御番方水稽古世話取締、加納大和守組青木右近申合取斗可申事、

右之趣壹番組并七番組方申来候、委細者其節之留ニ有之候事、

『九十』 文化九申年正月十五日、近江守殿用方を以被相達候、左之通、

此度嚴敷御儉約被 仰出、御台所品数をも被減、都而御省略二付而者、面々ニ茂無油断儉相用候様御沙汰二付、是迄泊り御番之節、各ニ夜食進候処、以来八年頭初御番・納御番之節斗夜食進、平日当御番之節ハ進申間敷候事、

但在番登前納御番・帰出番初ハ夜食進可申候、

右之趣、此度江府同役中申合候由、被申越候之間、為御心得相達置候事、

『九一』 一、同断在番中江拾番組御同役方申合書左之通り、

御同役被 仰付候節、祝義遣物之儀者是迄之通定式差遣可然候得共、

右之仁盆暮遣物之義者区々ニ候間、以来六月以後、十月以後被 仰付候御同役者、其盆暮半減差遣し可申様今日申合候事、

申正月十九日

石野孫兵衛

一、酉六月三日、七番組当番申送帳之内、

『九二』 一、友松殿逝去二付、今日為伺御機嫌出役有之、御番衆拙者共平服着用之事、

右者三番組御同役三輪十左衛門殿取調被置候留記、杉原伝右衛門殿方借用、嘉永六丑年御役初而罷登候一条、在番中冬写留申候事、

嘉永六癸丑年十二月

美濃部鉄之助

『九三』 今度西丸勤相成候二付、非常之節心得方之義二付、嘉永六丑年十二月廿七日、二条在番中兩御番頭方以廻状被相達候別紙之写左之通り、

達書

一、御城近辺出火之節、火事羽織着用之義者、当番之御目付方相達候筈二付被得其意、猶時宜次第御目付江被問合候様被致候、

但火事羽織被致着用候ハ、其段泊所江可被申聞候、

一、夜中出火二て御老中方・若年寄衆西丸江登 城有之候歟、又者番頭見廻候義及案内候之節、当番之御目付着替以前二候ハ、平服ニ而御番所張可被申候、

但御老若方西丸江登 城之節者、泊所江相達候様可被致候、

一、風並等悪く節者、御番衆者虎之間より獅子之間江懸ケ、并大広間御縁類通り、火之粉防万事心附ケ可申候、各方ニ茂被相廻差引可被致候、右之外、是迄ニ丸勤之通心得可被申候、

『九四』 西丸勤之節

嘉永七甲寅年十二月七日、拾式番組当番日、改元被 仰出、安政と成、惣出仕有之候二付、請取方服紗小袖・麻上下着用、御番所例弁代合之事、

『九五』 弘化五丙午年同役野田市左衛門方借写

大御番頭采配所持之事

下ケ札  
此朱書ハ実家  
留帳之内見出し  
二而不案内成者  
認差出候事ト  
相見候、御餘可然  
可奉存候、  
善之丞  
弘介様

文化五辰年八月、奥御右筆秋山松之丞を以御尋之由二付、同十五日同人を以て差上候控、同九申年二月、大目付井上(利恭)美濃守方被申聞候間、此度大御番頭より無急度問合之処、御用多ニ而取調兼候間、其許ニ而相糺候様被申聞、旧記ニ而取調差出候控、

采牌振様と申儀者流儀二者無御座、  
公儀御定と申儀も決而無御座候者、当職之人心二  
振様可有之儀と奉存候、

弘介様

善之丞

大御番頭采配相用候儀者、天正十八年小田原江御出陣之節、大御番頭之内  
松平十三郎病氣二付、同組組頭鳥居久兵衛假二采配免許、荒川某七病氣二  
付、同組組頭菅沼藤十郎指揮、又其節差掛り番頭子細有之節者、組中差引  
被 仰付候事と相見、右等の由来方大御番組頭江采配 御免と相見申候、  
尤小田原 御陣之節、初而采配 御免と申儀二茂有之間敷、定而其以前も  
右様之儀者間々有之儀と相見候得共、古キ事二て相分不申、然者彼是之処  
より采配 御免と申儀候、左候得者実々大役故、大御番組頭二限四人二相  
定り、尤大御番十式組者 御旗本之内御先備二て、右組頭四人之内兩人者  
軍使二而、御先手之弓鉄砲頭者番頭之下知二て、於其場故障出来候得者、  
直二軍使為代合与力・同心引廻し申候、関ヶ原御陳之節茂 御旗本之御先  
備者、大御番頭高木主水正・阿部備中守相勤申候、右之趣を以考候得者、  
大御番組頭四人被 仰付儀 御治世全く 御武威相極候道理二相叶ひ候義  
と御座候、然者組頭者小身二候得共重キ御役二而、京・大坂在番中頭二者  
大身も有之、万一異心有之時者、以之外大事二及候間、其時者組頭共其職  
を押候御役故、昔方諸御番方と違、組頭四人有之候由申伝、然者采配所持  
仕候事二御座候、

『九六』武術 上覽之節組頭煩多二て他組方助取候節之心得方

武術 上覽之節、組頭御人揃二而茂当番書江差引之義、認入候茂有之、御  
組々区々二而ハ不宜候間、以来煩或者差合等二て忒人勤二相成、外御組よ  
り当御番助勤相成差引二罷出候節者書載差出置、当番書引替可申候、  
一、三人勤二て忒人差引罷出候義、二丸当御番忒人有之候者、差引之義書出  
二及申間敷候、

右之趣、弘化四未年十月、在府御組二申合相極置候事、

未十月

八番組

但九月廿六日、当組当御番之節、七番御組之例見合認出候得共、  
外御組二是迄之所取調候処、認書無之方多分二付、九月月番組  
之廉旁々二付及御相談、如此取極候事、

『九七』安政二卯年五月十九日、馬揃 上覽二付、九番組当御番為助立、三番組

頭組とも致出番候、当御番書左之通り、

五月十九日

当御番

三番組

西丸当御番

今十九日、遠山安芸守  
組中馬揃 上覽罷出  
候二付 組中共助

番頭

大久保因幡守

組頭

杉原伝右衛門

同

伊勢平五郎

同

飯室次郎兵衛

同

真野半助

卯五月十九日

御目付中

一、御本丸江差出候当御番書、御目付遠山金四郎請取、

五月十九日

遠山安芸守組中馬揃  
上覽罷出候二付助

大久保因幡守

杉原伝右衛門

当御番

伊勢平五郎

飯室次郎兵衛

真野半助

一、当 御殿江差出候当御番書、御目付駒井左京江相渡申候、

『九八』安政二卯年七月、遠山安芸守殿被御申立、昼夜廻り之者水馬相始候二付、

代り被申渡候九番組新例

見出し

書付

覚

昼夜廻

右忠左衛門儀、水馬水稽古相始候二付、右稽古中昼夜廻御用捨被仰渡候様仕度奉存候、依之申上候、以上、

杉原忠左衛門

四名

卯七月

伊丹左兵衛

大津勝太郎

堆橋舛五郎

津野庄十郎

見出し

書付

覚

昼夜廻

当分杉浦忠左衛門代り

萩原現次郎

右者忠左衛門水馬水稽古中、昼夜廻御用捨二付、代り現次郎江可被仰渡候哉奉伺候、以上、

伊丹左兵衛

大津勝太郎

堆橋舛五郎

津野庄十郎

卯七月

右二付、部屋張出しの写、

水馬水稽古相願候二付、  
右相濟候迄廻り方用捨、  
七月三日遠山安芸守殿  
被申渡候、

杉浦忠左衛門水馬水  
稽古中代り、同月同日  
御同人江申渡候、

杉浦忠左衛門

萩原現次郎

『九々』七月六日

当御番

忝番組

西丸当御番

二条在番掃りの御礼、  
未申上候二付不罷出候、

番頭 九鬼式部少輔  
(陸部)

番頭 遠山安芸守  
(長高)

組頭 駒井内記

同 伏屋兵左衛門

同 石川多宮

同 西山喜六郎

卯七月六日

御目付中

一、西丸 御殿江差出候当御番書、同振合二付略之、

『百』嘉永七甲寅年七月十九日

慎徳院様一回御忌御法事御中日御菓子被下候之節、拾忝番組当御番西丸詰

合より頂戴二罷出候例左之通り、

一、今十九日九半時、小笠原加賀守殿方以手翰御達之儀有之候間、同役忝

人・御番衆三人中口裏部屋迄罷出候様被御申越候間、同役忝人・御番衆三

人 御本丸江罷出候処、檜之間江相廻候様被御申聞候間、御番衆共同御席江

相廻候処、御法事二付御菓子被下候段、被仰達候二付、難有旨御取合申上、

御礼之義者加賀守殿方大目付衆江被御申達候間、別段御礼二及不申候段被

御申聞候、御菓子者於柳之間頂戴いたし候、尤御徒目付方請取申候、

但 御代々様御年廻御法事之節、前々御中日之御菓子被下候儀二付、

御中日二当御番二相当り候ハ、請取方之者前以相心得居 御本丸江

相廻り候節之供為待置、大平状箱様之品并大風呂敷共用意可致候、御

番衆も供斗ハ申合残置候様前以達置候方都合宜く、二丸之節と違ひ、

西丸二而者外通り御本丸江相廻り候間、猶又前以心得置候方宜事、

『御菓子戴候人数ハ、請取、泊とも御同役四人御番衆御帳勤人数丈々

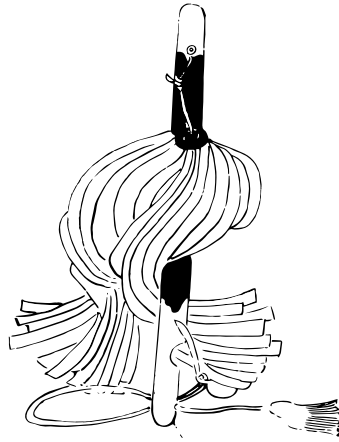
取調、人数書老通持参さし出候、可然事、

『百一』

采席可仕立作法十一箇条之事

甲流之伝法也、

- 一、采<sup>ツクシ</sup>旆<sup>シ</sup>幹ノ長サノ事、
- 二、采付緒通シ穴之事、先ノ方ヨリ七分中ナルヘキ事、
- 三、緒通ノ穴ハ下方ヨリ三寸中、
- 四、上下ヲ真鍮力或銀ニテモ張り、上下ノ穴ニ二重鷲目有、木ハ勝軍木ニテ作之、
- 五、輕子ノ事、



- 六、紙敷之事、七枚カ九枚、十一枚カ十三枚ナルヘシ、私曰、是ハ輕子ニ附如ク紙也、末ヲ細ク<sup>コマカ</sup>瑣<sup>カ</sup>ニ是を裁シ広狭不定、人ノ好ニ由ベシ、
- 七、采付ノ緒ハ紫革力藍皮力、或ハ薰皮<sup>クスヘ</sup>ニ而モ不苦、一寸三分充ニテ結也、

八、腕貫ノ緒ハ三尺五寸也、色ハ紅力青力黄力萌黄力黒皮ニテモ不苦、人の好次第也、

但紫色ハカリハ嫌フ、

九、結様ハ柄ヨリ三寸二分置テ結也、緒ノ余ハ短方一寸式分也、私曰、腕貫ノ偏ヲ長メ置事、是締嚙相引ノ糸ニ結付テ、壁<sup>ヒ</sup>ハ取逃シテ、采旆ヲ取落スコトアリトモ、地ヘ落スマシキカ為也、

十、采旆ノ色ハ赤白ニノ色也、但朱旆ハ本大将ノ外是ヲ不可持、平人ハ白采旆ヲ所持スル也、

十一、白采旆幹ヲ黒ク塗、朱旆ハ木地ノ幹ヲ用也、私曰、近代ハ采旆ヲ金銀ノ紙、或白熊・赤熊ヲ用ル人多シ、上古無之、略儀也ト知ルヘシ、又或曰、

異国ニテハ白熊・赤熊ヲ附ル事本儀と云ヘリ、然トモ日本ニテハ紙ニテ切ヲ本トス、口伝アルベキ儀也、

木村敦高<sup>(高教)</sup>之編年集成之抜書、

『百二』 天正十八年二月六日

小田原御陣

組五十騎ツ、

- 松平忠左衛門重勝
  - 松平善四郎康安
  - 松平助十郎勝信
  - 松平十三郎勝玄
  - 荒川次郎九郎
  - 水野清六光忠
- 内十三郎所勞ニ付、其次与頭鳥居九兵衛飯二<sup>(二)</sup>施ヲ免許セラル内、荒川又病腦ニ依テ、与頭菅沼藤十郎定頭組中ヲ指揮ス、

右小林明左衛門写留相送ル、

天正二十年三月五日

大御番頭朝鮮国御陣之節、肥前国名古屋江供奉、其節一組与頭四騎ツ、

内 式人 黄麿  
式人 青麿

右之通組頭者色替之麿相用申候、依之当時勤年数ニも不抱、与頭方御物頭被 仰付候御作法之事ニ候、

一、朝鮮国御陣之節、

大御番頭

- 菅沼越後守忠頭 元藤十郎 元久三郎
- 渡辺山城守正綱 元勝四郎
- 水野対馬守忠高 元善四郎
- 松平石見守正親 元忠左衛門
- 松平大隅守重勝

水野市正忠重  
元清六郎

右六組二而伏見御番勤之、

秀忠様大坂御陣之節茂右之六組二而相勤候事、  
(徳川)

## 『百三』

一、近藤石見守殿所持書付之由

士大将討死之節者、与頭采幣を取候事故、前々より与頭方直二番頭江被仰付候条、大御番組頭連も三御番之御備二候間、布衣以下之組頭方茂御先手被 仰付候事、右之御作法二付御書院組頭・大御番組頭在番之節者、色替之采幣用意有之候事、其格法を以騎馬勢未之節、与頭茂色替之采幣相用申候由、右内藤甚左衛門殿留帳借用写置、

一、采幣

大御番頭者侍大将二付、白采 御免之旨、古代番頭討死致候節、組頭指揮無之候而者難成直々組頭江白采 御免之旨、両御番組頭茂白采者相成不申、御鹿狩之節、色絵之采を持候之由、色絵之采者野采之由、小金御鹿狩之節、大御番組頭采持度旨申立候处、難相成色絵之采持候者苦敷有之間敷由二候得共、白采持候例を失ひ候而者如何二付采持不申由、小山新三郎咄二申候、前書之申伝之趣ハ、御武器掛り福嶋伝兵衛之由、及承候事、右大岡権左衛門殿書留之由写し置、

『百』杉原正名私ニ考ふるに、大御番組頭采幣を持候事者、布衣と取替之由、古く申伝へ二者候得共、未夕碓といし候記録等も見当不申、猶又大岡権左衛門殿之書面之趣二而者、古代番頭討死之節者直二組頭江白采 御免二而持候由、左候得者、たとへ番頭討死有之候共 御免無之前者白采持候事者相成申間敷候、子金御鹿狩之節、組頭采持度候よし申立候处、色絵者苦敷有之間敷候由二候得共、白采を持候例を失ひ候而者如何二付、持不申候旨、是者組頭ハ白采を常ニ持候心得二而、色采を持不申哉二相聞へ候得とも、前条之趣二而考候へハ、常々白采持候事二者決而有之間敷、御免之上ならでハ持候事ハ相成不申、既二天正十八年小田原御陣之節も番頭兩人病腦に依而、右組頭江飯二施を免許せられ、又同二十年名古屋御陣之節も一組与頭四騎ツ、青麿・黄麿持候得者、常ハ色采二

而可然事者勿論之事二候、左候得者、子金御鹿狩之節、白采持候ニ差障候由二而、色絵之采も取持不申候様ニも相成可申、諺ニいふ所之蛇もとらす蜂もとらすといふることく、後々二者両様共持候事之難成相成へき歟、又近藤石見守殿之留之趣二而も、組頭在番二者色絵之采用意可有之者勿論二者候得とも、戰場ニて番頭之采を請候事故、組頭者色絵之采を腰にさす歟、又ハ采掛之銚江結ひ、采ニて指揮者致し不申候事と被存候、しかし番頭討死有之、指揮之者無之節者、白采 御免無之前者色采二而筆頭之与頭指揮致し、右組頭又候討死いたし候ハ、二番目之組頭采を取可申哉、四人共色采之用意可然なり、又考ふるに、組頭四人共采幣を持候而も番頭討死無之前者、実ニ無用之品ニ候得者、組頭之目印ニも相成、殊ニ要易ならざる采を持候事ハ、組頭之面目ニなり候事、且者番頭指図ニよつて、誰ハ西之方を防ぎ、誰者東之方を働ケト指図有之候へ者、四人の者共相分レ、番頭も其所二者被居申間敷候節者、色会之采ニて指図も致し可申哉、白采も御免之節者用意致し候も可然哉、右者全く私之考ニて治定之事ニハ無之、猶後々之是正を待もの也、

天保八丁酉年三月下旬

杉原正名識

近頃近藤忠道より送り侍りし書留、正敷組頭者白采被持候事ニて、前条之留書并考ともミな不用ニな□ぬ事とハなりぬ、左之留書を見て知るへし、

## 『百四』福嶋伝兵衛方御答書写し

『文化五辰年八月、奥御右筆秋山松之丞を以御尋之由二付、同十五日

同人を以差上候扣、

同九申年二月、大目付井上美濃守方大御番頭衆江無急度問合之処、御用多ニ而調兼候間、其許ニ而相糺候様被申聞節、旧記ニ而取調差

出候扣、

大御番頭采牌相用候儀者、天正十八年小田原江出陣之節、大御番之内松平十三郎病氣二付、同組与頭鳥居久兵衛飯二采牌免許、荒川某も病氣ニ付同組与頭菅沼藤十郎指揮ス、其節差掛り子細有節者、組中差引被

仰付候事と相見へ、右等之由来方大御番組頭江采牌 御免ト申儀ニ而も

有之間敷、定而以前茂右様之義も間々有之義と相見へ候得とも、古キ事

ニて相分不申、然者彼是之処方采牌 御免と申儀候得者、実ニ大役故大

御番組頭ニ限り四人ニ相定り、尤大御番拾貳組者御旗本之内御先備ニ而、

右与頭四人之内兩人者軍使ニ而、御先手之弓鉄砲之頭者番頭之下知ニ而、

於其場故障出来候へ者直ニ軍使代合せ与力・同心引廻し申候、関ヶ原御

陣之節茂、御旗本之御先備者大御番頭高木主水正(忠次)・阿部備中守相勤申候、

右之趣を考候へハ、大御番与頭四人被仰付候義、御治世全く御武威相極

候、道理ニ相叶候義と御座候、然者与頭ハ小身ニ候得共、重キ御役ニ而京・

大坂在番中頭ニハ大身有之、万一異心有之時ハ、以之外大事ニ及候之間、

其時者与頭共其職押候御役故、昔より諸御番方と違、同役四人有之由申

伝候、然者采牌所持し可仕事ニ御座候、

一、采牌製作之義者、古代金銀之采牌杯色々相用候様子ニハ候得者、慶安

二丑年御改正之砌より朱采牌・白采牌之武品ニ相定り、朱采牌ハ程村紙

共一枚を両面朱ニ而染、幅五、六分ニ裁候而相用、串ハ木地、長サ老尺

式、三寸二仕、勝軍木ニテ造之、上下ニ金力銀ノ鉄具を用ユ、右朱采牌

者 上様并官領職之所持スル事ニ御座候、

但大身成人ニ而も御旗本ニ附候節者、白采牌を可持事、御旗本を離レ

一手之働ノ蒙 命を候得者、御陣代且一方之大将故、朱采牌可持事、

右慶安御改正之旧記ニ相見申候、

『百五』安政三辰五月十八日

当御番

四番組例

西丸当御番

番頭 室賀美作守(正卷)

組頭 小野勘解由

同 朝比奈昌之助

同 根岸又四郎

同 石川市左衛門

武術、上覽罷出候ニ付、相濟候迄出番不仕候

辰五月十八日

御目付中

一、西丸 御殿江差出候当御番書、同振合ニ付略之、

西丸当御番

番頭 室賀美作守

組頭 小野勘ケ由

同 朝比奈昌之助

同 根岸又四郎

同 石川市左衛門

武術、上覽相濟出番仕候、

辰五月十八日

御目付中

一、前条之如く御本丸之方当番書引替、西丸当御番書も同断引替、坊主衆を以申遣ス、

一、御番方武術 上覽罷出、御同役中差引として御本丸江罷出候者、請取

方ニ而出役致候共御同役中にて助合左略いたし、御場所相濟泊り方江出

番無差支儀故、当番書引替ニも及間敷哉、併し御同役煩等有之式人勤之

節二者、他組助も取候事故、引替之心得可然、

但武術 上覽秋有之短日之節二者殊ニ寄御明り出候後、一同退散之

儀も有之候由、短日之時分二者前条左略之取斗無之、引替之心得可

然候敷と存候、後日為見合記置候事、

五月十九日

当御番

八番組之例

武術、上覽二付為差引御本丸江罷出番仕候、

石黒作右衛門

武術、上覽相濟出番不仕候、

右同人

一、右者八番組ニ而、御番方為差引御同役出之節之例也、

但此時分御同役欠ケ無之、四人勤也、

在府諸御組々申合、組限り御番頭江左之願書差出候間、当組九月廿二日当番ニて泊所江差出ス、十月朔日、月番彦四郎江從伊予守殿御通帳拜礼之義、

御掛り松平和泉守殿江被相伺候処、願之通可申旨被達候、右二付御礼之廉無之、

『百六』 拝礼願事

覺

同役四名

上野御法談所(寛永寺) 温恭院様(徳川家定) 御靈前江 御忌日之節、私共并御番衆御預人之面々一同為冥加拝礼罷出度奉願候、依之此度申上候、以上、

逸見堯之丞

松前七郎右衛門

浅岡彦四郎

美濃部藤左衛門

午九月

安政五年秋五番組・十三番組二而、代人順延張出被申候処、御茶壺附順延不宜卜、月並寄合之節、組々二て被申候二付、杉原伝右衛門殿左之通り張出被申候、写取、

『百七』

文政四巳年四月朔日、御礼過於 御城部屋二戸田和泉守(光弘)・松平(康英)・酒井飛騨守(忠盛)・新庄越前守(直計)・酒井大和守寄合申合候、加納(久敏)大和守病氣二付出席無之、

一、二条・大坂在番之節、御番衆之内御茶壺差添候者、道中供連并其外入用筋外在役之仁共違ひ、格別物入多二而難洩之趣相聞候二付、再取手返代之義、以来左之通承届可申候、

御茶壺附

本組在番

同 取手返代人

同 再取返代人

右之通取人・代人・代々人迄相極可申候、尤取手返之者、是迄之通再取手返し之者も右御茶壺附之肩書を以相願候ハ、承届、順立之儀も御茶壺附、取手返者之次方同再取手返之者順立可致事、

但出立之者、即日延願致し候者ハ先下り之義者勿論、翌年代人願之義も承届申間敷と兼而申合有之候得共、右御茶壺附之者者無擔承届可申候、

一、大坂在番方御茶壺差添下り候仁、再取手返代人可相願処、二条本組在番二付、右本組在番之翌年御茶壺再取手返代人相願候得共、承届可申候、右二条在番之節在役相勤、是迄之通代人相願候御者、御茶壺附代人者先江送り、右在役之代人を相願候而も可承届事、

一、御茶壺附代人可相願順年之処、知行所損毛或者屋敷類焼二而、代人相願候儀者是迄之通二候、右二付御茶壺附代人先江送り相願候而も可承届事、右之趣、組々御番衆江も可令申渡置候之事、

右御茶壺附代人両度相濟申候義、御番頭衆江申合年月も相立候事二付、代人順立等取調、見合之為部屋江張出し置可然、御組々御衆許二付、張出し置申候、以上、

午八月

三番組

嘉永六丑秋 御代替之節、大的 上覽之節、着服之義二付、御目付衆達書并御番頭方之達書とも左之通り、

『百八』

近々於吹上元馬場大的 御代替後初而 上覽二付、射手之面々服紗小袖・麻上下着用、頭組頭者服紗小袖・裏附上下着用之積り相心得可申旨被仰渡候、依之御達申候、以上、

十月 大久保彦左衛門

御番頭衆方之達書

近々大的 上覽之節 御代替初而二付、御自分方裏附上下二て御出可有之候、射手之御番衆服紗小袖・麻上下二而相勤候様、御申達可有之候、以上、

十月廿日

室賀美作守(正榮)

安政五年十月廿四日、当御番明々御門明キ、六番組御同役大木市左衛門殿方以紙面、明廿五日大的 上覽被 仰出候処、十番組御用残り大草孫三郎四番組江預り候処、六番組掛り組二付御同役兩人差引として被出、請取方老入勤相成候間、介之儀林肥後守殿江申立候二付、月番浅岡彦四郎江被申達候処、差掛り間部屋被申越介罷越候、姓名承り申度旨二付、美濃部藤

左衛門可罷越旨及即答、  
『百九』

西丸当御番  
番頭 林肥後守  
組頭 大木市左衛門  
同 伊藤又一郎  
同 正木祐三郎

大的 上覽御用残  
射手為差引吹上御  
殿江罷出上覽相  
濟候迄出番不仕候

大的 上覽射手為  
差引吹上御殿江罷  
出上覽相濟候  
迄出番不仕候

父忌 同 庵原文左衛門  
松平伊予守組与頭  
美濃部藤左衛門

午十月廿五日  
御目付中

大的 上覽  
相濟候迄介

一、当御番書右之通二而、西丸 御殿江差出候方茂前条之振合二而、認方  
ハ前々の如く二付略之、  
一、大的 上覽相濟、大木市左衛門・正木祐三郎出番仕候二付、当御番書  
御本丸・当御殿ニも引替申候、左之通り、

番頭 林肥後守  
組頭 大木市左衛門  
同 伊藤又一郎  
同 正木祐三郎  
父忌 同 庵原文左衛門

大的 上覽差引  
相濟出番仕候

午十月廿五日  
御目付中

一、西丸 御殿江差出候方も前同様二付略之、

『百十』

一、御同役被 仰付候節、祝儀遣物之儀者、是迄之通定式差遣可然候得共、  
右之仁盆暮遣物之儀区々二付、以来六月以後十月以後被 仰付候御同役  
者、其盆暮半減差遣候様、此度申合候、  
申正月十九日 石野孫兵衛  
右申合年曆茂相達申候儀二付、為見合張出置キ可然御衆評二付、張出置  
申候、以上、  
未正月 三番組

安政五年 御代替 将軍(徳川家茂) 宣下被為濟候御祝儀御能、同六年二月見物被  
仰付候節出候御書付写  
『享二』太田備後守殿御渡候御書付写式通

御留守居衆  
大御番頭衆

大目付江

今度 将軍 宣下相濟候、為御祝儀来ル廿一日・廿五日御能有之、見物  
被 仰付候間、詰衆・御奏者番・同嫡子・菊之間縁類詰・同嫡子、其外  
高家・御留守居・諸番頭・諸物頭・布衣以上之御役人、且又 御目見以  
上之御役人・寄合御番衆・小十人組・儒者・医師共二五時可有登 城候、  
御能見物之儀、来ル廿一日半分、相残分廿五日可被罷出候、小普請之面々  
者月次ニ出仕いたし候分斗罷出可申候、  
一、表向出礼無之、交代寄合右同断二付、兩日之内可有登 城候、  
一、右御礼之義ハ来ル廿七日詰衆・御奏者番・同嫡子・菊之間縁類詰・同  
嫡子登 城、掃部頭(非伊直徳)・老中(可被相廻候)、其外之面々者不及登 城候、  
掃部頭・老中・若年寄中江可被相廻候、  
右之通可被達候、

二月

大目付江

二月廿一日・廿五日御能之節 御中入無之候事、  
右御書付出候後、伊与守殿方之手翰  
(予)  
(松平信武)

松前七郎右衛門  
浅岡彦四郎  
美濃部藤左衛門  
本間四郎左衛門

松平伊予守

以手紙申入候、然者此度 將軍 宣下相濟候、御祝義御能見物被 仰  
付候節、永井信濃・我等并両組中共二条表江之御暇後二者候得共、見  
(直幹)  
物罷出度段願置候処、願之通御能之節見物可罷出旨、御覚書を以被仰  
渡候、依之各御心得御番衆中江も御申達可有之候、以上、

二月十九日

二月十三日、掛り津田美濃守殿方之廻状写從伊与守被達候、左之通り、  
(正人)  
以廻状致啓上候、然者今日詰御番土岐丹波守江、伊沢作州・御目付松  
平久之丞・神保伯耆守三名之書付、伯耆守被相達候由、掛り拙者方へ  
被差越間、則写別紙相廻申候、右書付之趣二付、御同役中之儀者御能  
見物日限未相知申候間、御番順二認め相達可申と存候、依之別紙相廻  
申候、且又各御組方被罷出候組頭衆并御番衆人数之儀、御書付明日中  
拙者方へ可被遣候、御預人も右見物人数江御書加可被遣候、御藏奉行・  
書替奉行大御番方出役之面々、先格之通り大御番江附キ可差出候、尤  
残役者相除可申廻状致候之通候、無滞御順達留り之御方方可被成御返  
候、以上、

二月十三日

大御番頭衆

此度 將軍 宣下相濟候、為御祝義三度目四度目御能之節、諸役人之分一  
役より半分宛兩日二見物被 仰付之間、各方并組頭組共人数兩日二割合御  
認め、明後十五日迄二拙者共方まで御差出可被成候、以上、

三月十三日

伊沢美濃守  
松平久之丞  
神保伯耆守

○二月十三日、伊与守殿方月番藤左衛門方被送候節、当組拜見罷出候面々同  
役四人、御番方四十一人姓名書、即夜中さし出ス、  
但此度部屋并厄介見物願無之事、

○同廿日

將軍 宣下相濟候、御能明廿一日当組御同役并御番衆熨斗目・長袴ニテ  
五時登 城、拜見候様伊与守殿方以通帳銘々被達候、

○二月廿一日、熨斗目・長(袴脱之)ニ而五ツ時前登 城、又御番衆四十老人之内拾老  
人当病之面々頭書いたし、揃書を出ス、今日見物四番組・八番組・六番組・  
式番組二候、右四組、

但廿五日之方へ老番組・九番組・十二番組・三番組と四組罷出申候、

○御同役中二者柳之間ニテ御料理被下候、御番方者蘇鉄之間ニテ同断、

但部屋住并厄介等罷出候ハ、檜之間ニテ千人前戴き候事、

○右御礼御同役中服紗小袖・麻上下ニテ、同廿七日丸之内不殘御礼相動候事、

○右同断御番衆者同服ニテ、同廿六日・廿七日両日之内頭々宅江罷出候事、

○部屋住厄介有之候ハ、当人者不罷出、其父兄方御礼頭々申達波之間、

○御番衆刀者断濟ニテ、虎之間江入候事、尤元日・二日之体ニ、虎之間休足所

溜り二者不相成、唯刀置候迄也、御同役中者人足部屋之方へ刀上ヶ置候事、

万延元申年八月  
二九張出し之写

三番組(安祥)  
戸川伊豆守組

勝屋銀次郎

右銀次郎、外国奉行支配書物御用出役二候処、病氣ニ付 御免被 仰付  
致帰番候処、出役三ヶ年相動候二付、先格之通百日休、戸川伊豆守殿被  
申渡候、

文久元酉年、三番組久保新之丞殿心附ニ而、諸組ニ相談之上、同年十一  
月四番組月番中津田越前守殿江被伺附紙濟、同組与頭朝比奈昌之助殿方  
部屋へ置一紙添被差出候、伺書左之通り、

見出し  
伺書

小野勘ヶ由  
朝比奈昌之助  
石川市左衛門  
高田九兵衛

高田九兵衛

覚

一、私共之内、転役又者病氣・産穢・忌中等二而、当御番出勤可仕者無御座候節者、他御組方助立之義、本御番三日目之御組同役共助相勤、其後引続同様之節者、本御番方四日目、五日目方申順二助立可申、尤御番老度或者両度他御組方助立相成候処、其後出勤仕御番老度も相勤、又候前条同様可相勤者無御座候節者古復仕、本御番方三日目之御組同役共助立可申積り、且又 召人等御座候御者、本御番方三日目之御組差引相当之処、右様出勤仕候者無御座候節者、御月番組同役共之内、為差引登 城可仕候、若又御月番組当御番二相当候歟、又者病氣・産穢・忌中等二て出勤仕候者無御座候節、忌上十五日者前月之御月番、下十五日者翌月之御月番、組同役共之内出勤可仕、猶又御番頭於御宅被仰渡等御座候節者、御対組同役共罷出候様仕度奉存候、

附紙 書面之通可被相心得候

『のり(か)』  
一、御番頭御転役等二而明御組中 御城近辺出火御座候節者、御月番組之御馬建場江罷出、御月番組当御番日二御座候節者、御対組御馬建場江罷出候先格之処、若し御対組御月番組二て当御番日二御座候節者、前条出火御座候御者何とて御馬建場江罷出可申哉、

附紙 書面之趣前後之月番寄場江上十五日  
下十五日之分ケ可被罷出候

右之趣心得方区々ニ付、此度諸御組々同役共評議之上、此段奉伺候、以上、

小野勘ヶ由

朝比奈昌之助

石川市左衛門

酉十一月

## 解題 神宮文庫蔵「大番職制」

杉谷 理沙

### 史料の概要

神宮文庫蔵「大番職制」(写、五門四七二)は、江戸幕府大番組の職務に関わる様々な事柄について記録したものである。作成者・作成年等いずれも不明だが、文中に記された年代の下限が文久元年(一八六一)であることから、少なくともそれ以降に作成されたか、あるいは書き継がれてきたものと考えられる。<sup>(1)</sup> これら書き写されている事例は、一七〇〇年代末〜一八〇〇年代半ばの出来事が殆んどを占める。なお、本史料は『古事類苑』の一部が翻刻されている。すなわち、本書は大正三年(一九一四)に古事類苑出版事務所から神宮文庫へ移された六八〇〇冊のうちの一冊である。<sup>(2)</sup>

本史料は全一一項目からなり、冒頭に惣目録が付され、その後本文が続く。惣目録の事書と本文の事書・文言とは必ずしも一致しない。また、連続する文書の途中で別の目録番号が配されている箇所が見られ、本文を写した後で目録番号を付し整理されたと考えられる。目録番号は朱筆で記され、また本文中にも朱書の箇所がある。これは本史料の編者が補足情報などを書き入れたものようである。

本史料は、実際に差し出された書状や届出類の写し、ことの顛末をまとめた覚書、事例別届出の雛形、別の典籍の写し等からなる。引用元は同一ではなく、様々なところから大番の職務に関わる文書類を書き写している。例えば、九五(目録番号による。以下同)は、弘化五年(一八四八)に野田市左衛門(二番組頭<sup>(3)</sup>)から借り写した、組頭による采配使用の由緒について記す。朱書によれば、写し元の文書は文化五年(一八〇八)に奥右筆へ渡されたものの控えで、同九年に大番頭が大目付に尋ねたが、多忙のため代わってこれを調べるようにと命じられた某が作成したものであるという。さらにこの朱書は「実家留帳之内」から見つけたもので、勝手がわからないため書いたが、削除しても良いと「善

之丞」が「弘介様」へ伝えている。このように、書写を何度も重ねたものが記録されていることがわかる。

以上の経緯で成立した本書は、「明良帯録」<sup>(4)</sup>などの職掌解説書から知られる職務内容以上の、実務レベルでの大番衆の働き方や手続き方法等々を伺い知ることが出来る好史料であると言えよう。<sup>(5)</sup>

### 大番組の構成と職務

江戸幕府の大番組についてはすでに前号までで説明しているため、<sup>(6)</sup>ここでは簡単に述べておく。江戸時代の役人の大分類には「番方」(武官)と「役方」(文官)があるが、大番組は番方に属する。江戸幕府の直轄軍団のひとつで、老中支配。全一二組からなり、各組番頭一名を筆頭に、組頭四名・番衆四名・与力一〇騎・同心二〇名で、幕府の職制のうち、最も大人数で構成される。<sup>(7)</sup> 彼らは江戸においては主に江戸城二之丸・西丸の守衛を担い、江戸の市中見廻りも行った。また二条城・大坂城の守衛のため、二組ずつが一年間各城へ赴任し在番をつとめた。番頭には石高一〜二万程度の大名や五千石以上の上級旗本が、組頭・番衆には数百石程度の旗本が就任した。番衆の中には在番中御鉄炮奉行や御蔵奉行仮役などの役職に任じられる者があり、また役職ではないが、「供頭」と呼ばれる経験年数の豊富な番士は、大番の諸事に精通するものとして畏れ敬われていたという。<sup>(8)</sup>

ところで、本史料が作成された目的は、言うまでもなく、大番の職務遂行時や諸手続き時の参照のためと考えられるが、右に述べた通り大番の中でも諸階級がある。では、本史料を参照して職務に臨んだ人物はどこに属したか。本史料の内容を見るに、組頭の手続きや動向について記したものが散見されること<sup>(9)</sup>、また組頭を「同役」としていることから、これを参照した人物は大番組の組頭であったと考えられる。

では組頭とはどのような存在であったか。<sup>(12)</sup> 大番士をつとめた森山孝盛による「蛸の焼藻の記」<sup>(13)</sup>には「二組五十人を与頭四人に割て預れり、<sup>(11)</sup>とあり、番衆は組頭四人ごとのグループに一一〜一二人ずつ属したことがわかる。また「明良帯録」は、組頭について「二組四人ツ、一隊之世話にて二条大坂へ赴て

組向諸願諸届等を承り頭へ達す」と説明するが、「大番職制」を見るに、組頭は上方在番の最中のみならず、江戸在府中にも諸事手続等において番頭と番衆とをつなぐ役割を果たしていた。そのため組頭は多忙を極めていて、過労のため身体を壊す者も少なくなかった。<sup>(15)</sup> 組頭がいかに大番内の多方面の事柄の熟知と、滞りなく職務を遂行する能力が求められていたかは、本史料を見れば明らかであろう。

### 史料の内容

本史料の内容は、大きく分類すると①江戸城での勤番に関するもの ②能御覧や武術上覧など行事に関するもの ③上方（二条・大坂）在番に関するもの ④その他（火災時の心得や、特殊な場合の届出など）、と分けられる。ここではそれぞれについて簡単にみておきたい。

#### ①江戸城勤番

平時における大番の主たる職務は江戸城・二条城・大坂城の警衛であった。このことは広く知られているが、その具体的な職務や勤務形態に関しては殆んど触れられない。紙幅の都合上、ここで詳細を語ることは難しいが、「大番職制」の記述からその具体相をうかがい知ることができる。

江戸城の警衛では、番衆は城内を担当し、城外（大手門より外の曲輪番所）は大名家や寄合以上の旗本が担当した。<sup>(16)</sup> 「仕官格義弁」<sup>(17)</sup> によれば、はじめ大番組は江戸城虎之間（本丸）に勤めていたが、寛永二〇年（一六四三）に新番が置かれると、御小姓組が紅葉之間、御書院番組が虎之間勤めとなり、大番組は江戸御番御免として上方在番のみを勤めるようにとされた。<sup>(18)</sup> しかし、江戸城勤番なくしては番衆の行儀が教育されないことを危惧した番頭衆は、これの再開を願い出た。その結果、本丸には番所がないことから、西丸の空き建物を大番の番所とすることが決定したという。「吏徴別録」<sup>(19)</sup> には、慶安元年（一六四八）に二組が西丸附となり、同四年（一六五一）に西丸遠侍・虎之間の勤番となったこと、宝永三年（一七〇六）には二之丸勤番も命じられたことが記されている。また天明二年（一七八二）の「職掌録」<sup>(20)</sup> には「御番衆は二丸御玄関、与力同心は同銅御門に勤番す」とある（参考図1、図1参照）。

当番をつとめる組は「当御番書」を作成する。その認め方は三〇に詳しい。これによれば、まず早出の組頭が当御番書を持参し、「御帳懸り御番衆」を以て目付へ提出する。番頭や組頭が病氣や忌中、被災等様々な事情で欠員した場合は、助を勤める者の名前も記載した。また欠勤する番頭から目付へ、欠勤の旨と助となる番頭の名前を報告し、助の番頭は当番の組頭に宛て助を勤める旨を手紙で知らせた。また、三一によれば、組頭が二人以上、番衆が一八人以上欠勤の場合も詰御番中の他組から助を取っていた。

#### ②武芸上覧・能御覧等の行事

將軍が江戸城において五番方（番方の大番・書院番・小姓組番・新番・小十人組）の武芸の腕前を観閲する行事を武芸上覧と言った。<sup>(21)</sup> 上覧に供される武芸は剣術のほか槍術、弓術（図2）、柔術など多岐にわたる。大番衆が試合に召し出されることもあれば、行事の差配をつとめることもあった。五五には上覧当日の動きが詳細に記録されている。九六は武術上覧時に組頭の欠席が多い場合に他組から助を取る際の心得、一〇八は徳川家定の代替後初めての大的上覧時の服装について記す。

次に能御覧について。「仕官格義弁」には「御能之節は大御番と御徒御前置二出候事、むかし虎之間御番方大御番衆、御玄関之御番方御徒御前置に出候、右之引続に而御前置相勤候と承伝候」とある。本文中にも見られるように、御能に係る差配を前置と言ったようである。図3には「当番明番先番三組除外、組ヨリ御前置出ス、月番ヨリ増人二人出ス」とある。四五は御能当日の詳細や心得を記す。また、六五では日光門主の馳走御能の際の番衆の食事差配について記録している。

#### ③上方在番

「明良帯録」大番頭の項に「京大坂在番を主役とす」とあるように、上方在番は大番にとつての主たる職務であった。前述の通り、一時は江戸勤番が免じられ在番のみが大番の職務となった時期もあったことが、その重要さを物語っていると言えよう。そのため、本史料の全一一項目のうち、在番に関係するものは多くを占めている。

例えば、四では二条と大坂在番に係る諸日数の規定を記す。また規定通り出

立出来ないことを「日延」と言い、その取り決めとして、例えば六七では、「取人」〔代人〕（本組以外で在番をする者）として上方在番をつとめる番衆が立する際、容易に日延や先下り（規定より早く帰府すること）を申請している状況を問題視し、出立時日延をした者の先下りは今後許可しないとす。また組頭中の対応が等閑となっていることに対し「とくと弁えるように」と戒めている。このように、大番は折に触れ細かく規律の見直しや確認を行い、滞りなく在番の職務を遂行できるよう努めていた。

また「取人」〔代人〕に対する規定や事例も多く収録されている。例えば二三三は、番衆がこれらをつとめる際の願書の雛形を載せる。一六は、取人・代人の在番中の町方からの借金<sup>(23)</sup>について内済<sup>(24)</sup>すること、内済の有無を在番の組頭から本組の組頭へ伝達することが記されている。これらの取次もまた、組頭の仕事であった。

#### ④その他

その他として、まず火災時の対応について挙げておきたい。一九では夜中の出火時に出勤する際は各自高張提灯を二つずつ持参することや、江戸城内で火の粉を防ぐこと、火事の様子次第では西丸御殿にも出勤すること、その心得を記している。また三五では特に組頭宅近くでの火災について、五七では番衆宅近くでの出火について記す。

また突発的な出来事が起きた場合の対応の事例として、二五では大坂在番中における番衆の召使中間同士の刃傷沙汰<sup>(25)</sup>、二九では番衆の召使中間と西丸奥坊主の召使下女との心中事件<sup>(26)</sup>について載せる。三七では江戸城本丸の御小姓組部屋へ行くはずの葛籠が誤って西丸の大番のもとに来てしまった際の御門断について、また三八・四〇では城内での当番中に番衆や番衆の召使中間が俄かに病気になる際の駕籠での出門の断りについて、実際の事例を書き留めている。

このように、大番組の例規集あるいは実例集とも言うべき「大番職制」は、江戸城警備や上方在番に係る諸手続きの、現場における様子をいまに伝えるものである。その性質上、同様の史料はほかにも多数存在すると考えられる。今後博捜を進めていきたい。

#### 【注】

- (1) 東京大学史料編纂所蔵「大番職制」（請求記号…2056-1）は、昭和七年（一九三二）に本史料を謄写したものである。
- (2) これは、元離宮二条城事務所編『研究紀要元離宮二条城』（以下『紀要』）第三号に翻刻を収録した神宮文庫蔵「二条在番手留」と同様である。本史料の一丁表には「古事類苑編纂事務所」の朱方印が捺されている。神宮文庫所蔵の史料については窪寺恭秀「神宮文庫の古文書について」（『古文書研究』九三・二〇二二年）、「神宮文庫の沿革と古文書」（『古文書研究』二九、一九八八年）参照。
- (3) 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 柳宮補任』一（東京大学出版会、一九六三年）。
- (4) 小田原藩土山県彦左衛門編とされる、江戸幕府の老中以下各役職の職掌・支配関係・官位・役高・起源などの概説書（『国史大辞典』「明良帯録」美和信夫執筆）。
- (5) 類似史料として、東京都公文書館蔵「三御番旧記」（請求記号…Z-103）がある。三御番とは江戸幕府の両番（書院番と小姓組）に大番を加えた三つの番方の総称。これらについて定書や事例の写し等を載せるが、「大番職制」よりも早い時代のものである。翻刻および「大番職制」との内容比較は今後の課題としたい。
- (6) 柴崎謙信「二条在番と二条城」（『紀要』第一号、二〇二二年）。
- (7) 藤井讓治「十七世紀中葉の幕府官僚たち」（『江戸幕府の官僚制』青木書店、一九九九年）。
- (8) 本史料の「六二条大坂在役数并在役順之事」に役として記載がない。
- (9) 「蚕の焼藻の記」上（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第二期二二（吉川弘文館、一九七四年））に「年久敷勤むるものを供頭とて、其十余人をすべて万のことを扱ふに、彼供頭の向ひて頭をあぐる者さらになし、敬び恐る」と神仏にも越たり」とある。「十余人」は大番組を組頭別四班に分けた時の番衆の数。
- (10) 例えば、四一は組頭に任じられた際の書状の書き方、六〇は二之丸当番における組頭部屋の有明（行灯）の使用許可願い、八二は組頭の登城時の挟箱の置場所が記されている。番衆の手続きについて記したのもあるが、組頭は

- 番衆の諸事手続きの取次を職務のひとつとすることから、当然その内容について知悉する必要があったためと考えられる。
- (11) 例えば、一二の目録で「組頭」とある部分が、本文中の事書にあたる箇所では「同役」となっている。
- (12) 大番組組頭の構成の変遷や職務については、横山則孝「正徳元年末の江戸幕府大番組頭について」『近世中期大番筋旗本覚書』八千代出版、二〇一一年、初出二〇〇九年）参照。
- (13) 前掲注（9）。
- (14) 「明良帯録」は組頭について「小高にて骨折場なり」と述べる。
- (15) 柴田純「二条在番衆の出張死」『江戸武士の日常生活』吉川弘文館、二〇一三年）。
- (16) 岩淵令治「江戸城警衛と都市」『日本史研究』五八三、二〇一一年）。
- (17) 史籍研究会編『内閣文庫所蔵史籍叢刊』六（汲古書院、一九八一年）所収。「吏徴別録」では寛永一二年あるいは二〇年とする。
- (18) 国書刊行会編『続々群書類従』第七法制部2（続群書類従完成会、一九六九年）所収。
- (19) 近藤瓶城編『改定史籍集覧』第二七冊（臨川書店、一九八四年）所収。
- (20) 武芸上覧については横山輝樹「武芸上覧と武芸見分」『徳川吉宗の武芸奨励近世中期の旗本強化策』思文閣出版、二〇一七年）参照。
- (21) 「有司勤仕録」に「在番組之内、病氣差合有之不足なる時は、他組方代りを取り、是を取人と云」とある。「代人」と明確に区別されているが、その違いは不明。在番中、番衆はしばしば町人から借銭をしており、本組での在番や取人・代人として上方にいる間に返済を進めた（拙稿「近世後期における二条在番の生活」『紀要』第三号、二〇二四年）の二・⑥⑦参照）。
- (22) 金公事など民事訴訟について当事者間の内々の話し合いによって解決すること（吉川弘文館『国史大辞典』「内済」服部弘司執筆）。
- (23) 同事件については司法省調査部編『御仕置例類集』第一輯第三冊古類集（司法省調査部、一九四三年）の一五六五参照。
- (24) 国立国会図書館蔵「記事条例」七八（請求記号：8126）に同事件の詳細が記されている。

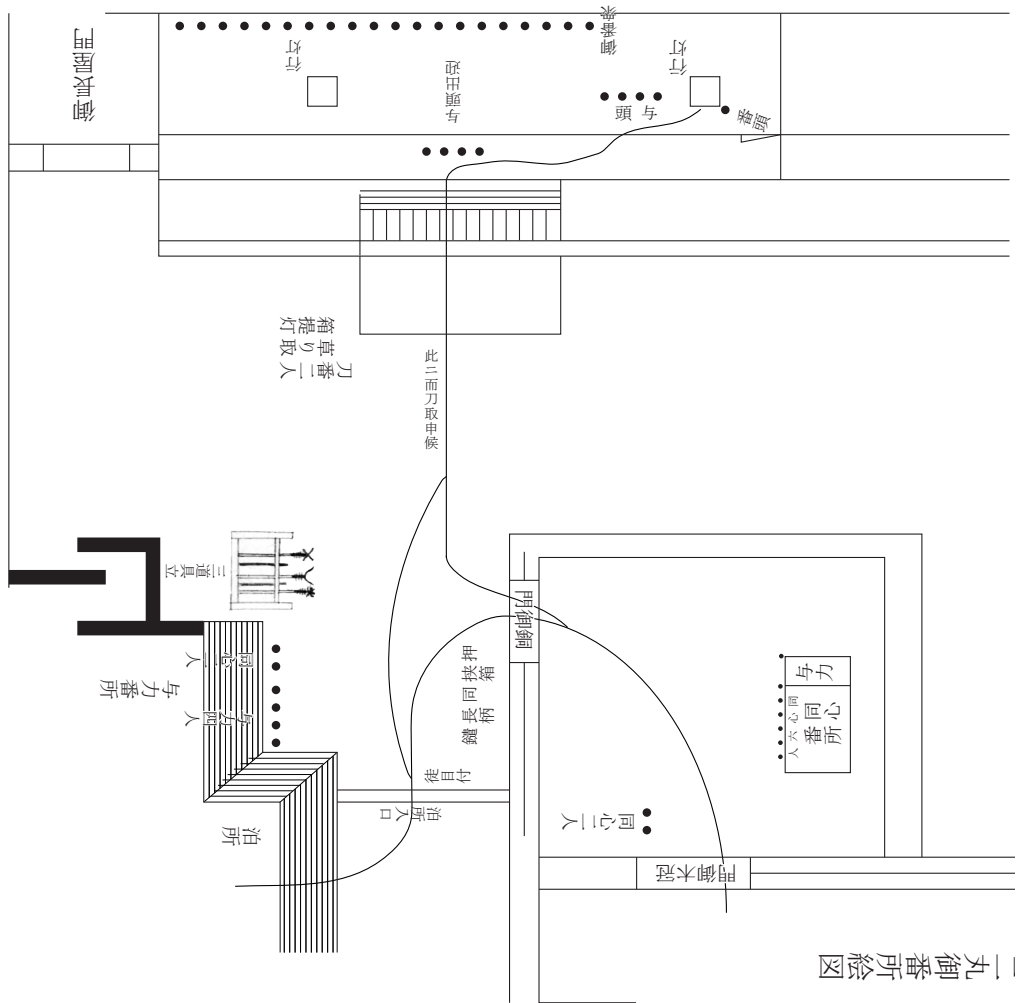
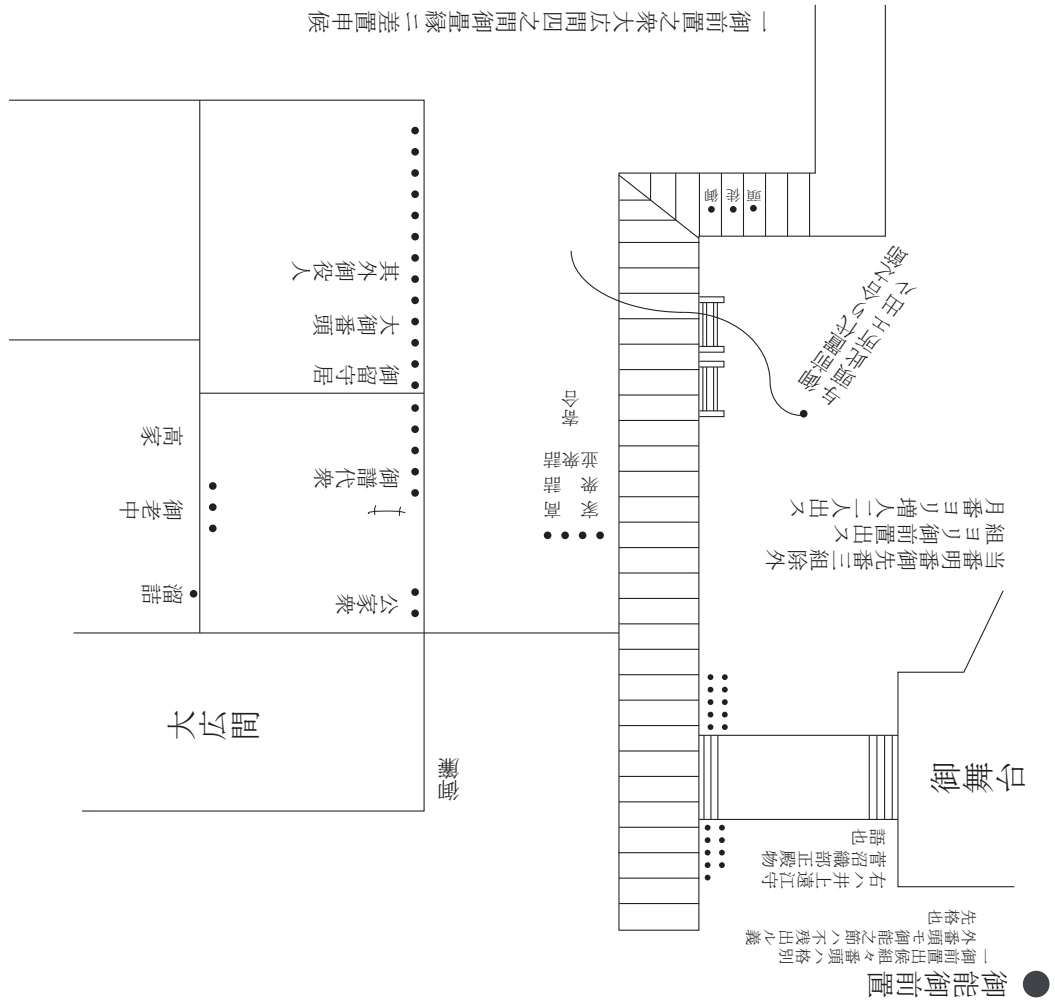


図 1 江戸城二之丸番所

国立国会図書館蔵「御本丸明細図」(請求記号:を二-86)よりトレース。朱等の色情報には省略した(以下同)。「御本丸明細図」は大番頭の勤方絵図である(深井雅海「解題」『江戸時代武家行事儀礼図譜3 諸役人・諸番頭勤方席図』東洋書林、2001年)。





「御本丸明細図」より。「御前置出候組々番頭ハ格別、外番頭モ御能之節ハ不残出ル義先格也」とある。

図 3 御能の前置